

【資料】 渕上貞雄 元参議院議員 聞き取り記録

篠原, 新
広島修道大学国際コミュニティ学部 : 准教授

中島, 琢磨
九州大学大学院法学研究院 : 准教授

山田, 良介
九州国際大学現代ビジネス学部 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/2740947>

出版情報 : 奥田八二日記研究会会報. 4, pp.330-428, 2020-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン :

権利関係 :

【資料】

涇上貞雄 元参議院議員 聞き取り記録

はじめに

奥田八二日記研究会では、奥田日記の読解とともに、奥田県政や福岡県政に関与した人物への聞き取り調査を行っている。奥田県政からすでに20年以上が経過しており、奥田県政や戦後の福岡県政治を実際に知る人物の聞き取り調査は急務であるからである。

本記録は奥田八二日記研究会が行った涇上貞雄元参議院議員の聞き取り記録である。涇上氏は1937年に福岡県田川郡に生まれ、その後の幼少期を「満洲国」の撫順で過ごした。敗戦後の1947年に日本に引き揚げ、福岡県立浮羽高等学校を卒業後、1957年に西日本鉄道にバスの車掌として入社した。その後、西鉄労組や私鉄九州地連等で組合活動に30年以上従事した後、1989年2月の参議院福岡県選挙区補欠選挙に社会党公認候補として立候補して初当選した。この時、福岡県は奥田県政期であり、社会党（社民党）はその後、国政でも連立与党として政権に参加した。涇上氏は、2010年に引退するまでの21年間にわたって参議院議員として活動し、この間、社民党の副党首や参議院議員会長、選挙対策委員長、私鉄総連の顧問などを歴任した。

涇上氏には、2008年に上梓された『巨悪にかつ』および、『Tra・Tra 随想集』（2011年）という著作があり、これらには涇上氏の参議院議員としての日常活動が詳細に綴られている。また、涇上氏の出身母体である西鉄労組はこれまでに、20年史から70年史まで10年毎の『年史』を公刊しており、労働組合の多岐にわたる活動が詳述されている。今回の聞き取り調査では、これらの著作や年史を参考としつつ、より俯瞰的な視点から、これまで明らかになってこなかった涇上氏の生い立ちや戦後の福岡県政治との関わり、また、西鉄労組・私鉄総連での組合活動をお訊きすることから始まった。その後、労組幹部としての涇上氏と奥田県政との関係や、参議院議員としての涇上氏と奥田県政との関係、さらには、連合結成の過程や社会党の変化などもお尋ねした。なお、事実確認のために重複や前後している部分もある。前述のように、涇上氏が辿った人生の軌跡は、福岡県のみならず戦後日本の革新陣営の興隆と退潮に時期的に重なるものであり、本記録は、革新の変容を最前線で経験しつづけた一人の人物による実体験の証言として貴重なものになっている。

内容について、涇上氏ご本人による校正を得ることができた。記して感謝申し上げたい。

篠原 新
中島琢磨
山田良介



渕上貞雄 元参議院議員 略歴

- 昭和 12 年（1937 年）3 月 19 日 福岡県田川郡金田にて出生
昭和 31 年（1956 年） 福岡県立浮羽高等学校卒業
昭和 32 年（1957 年） 西日本鉄道株式会社入社・自動車職場に配属
昭和 57 年（1982 年） 私鉄九州地連委員長に就任
平成元年（1989 年） 参議院議員選挙福岡県選挙区補欠選挙に初当選
平成 4 年（1992 年） 第 16 回参議院議員選挙比例代表で再選
平成 8 年（1996 年） 参議院通信委員会委員長に就任
社民党選挙対策委員長に就任
平成 10 年（1998 年） 第 18 回参議院議員選挙比例代表で三選
社民党幹事長に就任
平成 13 年（2001 年） 社民党副党首に就任
平成 16 年（2004 年） 第 20 回参議院議員選挙比例代表で四選
平成 17 年（2005 年） 社民党私鉄対策特別委員会委員長に就任
平成 22 年（2010 年） 参議院議員を引退

凡 例

1. 本記録は、(第1回) 2018年4月23日、(第2回) 2019年11月2日、(第3回) 2020年1月27日、(第4回) 2020年2月18日に行った渕上貞雄元参議院議員への聞き取り記録である。第1回は、中島琢磨、篠原新、第2回は、森山英明、山田良介、篠原新、第3回は、山田良介、篠原新、第4回は、福留久大、山田良介、篠原新、が聞き手となった。
2. 文字起こしにあたっては、話し手の雰囲気や損なわないように留意した。このため本記録は口語体に近い形で叙述されている。
3. 小見出しは編者が付けたものである。
4. 段落、改行は適宜行った。
5. 渕上貞雄氏および編者による注記・補足は()内に示した。
6. 本記録の編集・校訂は篠原新と山田良介があたった。また、渕上貞雄氏による校正を得た。

第1回（2018年4月23日）

—福岡県の労組や運動について—

篠原新（以下、篠原と略）：本日はお忙しい中ありがとうございます。今日は、淵上先生に色々なことを教えていただきたいと思っております。

先日、今橋省三先生（元福岡高教組本部書記長）から、先生の本（『巨悪にかつ』）を貸していただきました。この本は、3部に分かれておりまして、先生のご経歴に関しては第1部で記述がなされております。ですが、全部で400頁以上ある中で、ご経歴の部分が少ないので、重複になるかもしれませんが、まず、先生のご経歴から教えていただきたいと思っております。

先生は1957年に西日本鉄道に入社されたということなのですが、その12年後の1969年に日本社会党に入党されておられます。まずは、そこまでのお話を訊かせていただきたいと思っております。最初に西日本鉄道に入社された経緯を、お訊きしてもよろしいですか。

淵上貞雄氏（以下、淵上と略）：当時は、経済的になべ底景気と言われて、非常に就職難の時代でした。ですから、西鉄に入るといことは大変なことでしたが、採用していただいて、西鉄バスの車掌で入社しました。昭和32年（1957年）に入社して、ずっとバスの車掌です。

篠原：労働組合に入られたのは、ほぼ同時ですか。

淵上：ユニオンショップですから、会社の社員になったら、組合員ということでしたね。

篠原：その後、1969年に日本社会党に入党される。この時の経緯はどのようなものだったのでしょうか。

淵上：当時、林武彦という福岡の県議員がいましたが、組合として県議員林武彦をどうやって作るかという時に、「党員を増やす」というのがありました。県議員に出るには、「何人か党員を増やさない」とか、「社会新報を増やさない」とか、公認をするにあたってそういう条件があったようです。ですから、私が、組合の末端の役員をしていた頃に「お前さんも入れ」ということだったと思っております。

篠原：林武彦さんは西鉄でしょうか。

淵上：西鉄です。組合本部の副委員長でした。

篠原：淵上先生はそれから3年後の1972年に私鉄九州地連の書記長に就任されておられます。私が見た限りでは、そこから、労働組合の全国的なものへと関係していくように思えるのですが、どのような経緯だったのですか。

淵上：それまでは、西鉄労働組合中央本部があって、久留米、福岡、北九州、筑豊の4支部があって、そこにそれぞれ専従の支部執行委員がいました。その専従を福岡でしていたんです。ちょうど、合理化で、バスの車掌が廃止されて現在のワンマンバスになっていく。それで、「どうしようか。会社に帰って、さて何をするか」ということで、当時、選択す

るとすれば、事務や整備がありました。ほとんどの人は運転手になっていった。しかし、私はその頃、免許を持っていないので、自動車学校に行き免許をとって、バスの運転手でもするかという感じで、「さて、どうしようか」と悩んでいた時に、「私鉄九州地連に來い」との誘いがあり、私鉄九州地連で仕事をする事になりました。将来、労働運動をしようとは考えてもいなかったのですが、「このまま行けば、労働運動で一生終わるだろう」くらいな感じで。

篠原：地方議員から始められる方も多いたと思いますが、そういうことも考えておられなかったのですか。

渕上：全然考えてなかったです。政治の道を歩こうとは全然考えてなかった。九州地連に行き初めて、私鉄産別の仕事をする。私鉄九州地連は、九州各県の私鉄、バス、タクシーの組合の組織、そこで委員長と副委員長、書記長の3人が専従だったんです。

篠原：最初は書記長ですか。

渕上：はい。地連で書記長でした。

篠原：その活動内容としては、政治に対する働きかけということになるのですか。

渕上：大きくモータリゼーションの結果、自動車社会が到来し、公共交通がだんだん廃れていく時でしたから、どのようにして、この路線を守っていくのか。大きなきっかけになったのは、路線廃止からですね。

篠原：それは何年ぐらいですか。

渕上：昭和48年頃です。

篠原：当時の有力な政治家は、どなたですか。

渕上：私鉄の関係ですね。安恒良一（元日本社会党参議院議員・福岡県出身）、吉原米治（元日本社会党衆議院議員・島根県出身）、山中末吉（元日本社会党衆議院議員・京都府出身）。まだ、その頃は、そんなに政策を問題にしていくということより、政策要求の重要性を訴えている時代でした。

ただ、宮崎交通でしたか、過疎で人がバスに乗らないようになったから、バスの路線を廃止するわけです。その時に住民の意見を聞こうと思って、都城の山の中に行った時に、田舎ですから、おじいちゃんが「バス路線がなくなるのは、人が乗らないから仕方ないけど、バス停だけを残せ」というわけです。「バス停だけ残せとは、どういうことですか」と言ったら、「いつかバスが来るかもしれない」と。「だからせめて、路線は廃止してもいいが、バス停だけは残してくれ。いつか路線が復活するかもしれないではないか」と言われた時に、地方のバスの信頼を感じて、なんとかしなくてはいけないと思ったのが、私が政策や政治に関わる始まりです。

篠原：次に福岡県内の話になるとと思いますが、1960年代から1970年代、福岡県では社会主義協会がかなり大きな力を持っていました。その頃の社会主義協会について何かご記憶にあることはありますか。

淵上：社会主義協会に入ったのは、労働運動からだったですね。

篠原：淵上先生は、社会主義協会に入っておられたのですか。

淵上：はい。最初、何をやっているのかわからなかった。職場で運動をやっている人たちで、同じくらいに入社した人たちが何人かいて、そのグループが「お前さんも入れ」ということで入りました。それに入る前は、地区労の中での運動をやっていました。地域の運動。そういう運動の中で、そういう仲間が「お前さん、入れ」ということだったですね。協会に入るといのは、社会問題研究所があって、そこで講演会や学習会があったので、それに参加をしていた。それからです。

篠原：淵上先生は、社会主義協会に入る前に学習会にも参加されたことがあるのですか。

淵上：はい。よく研究会や講演会をやっていたので。

中島琢磨（以下、中島と略）：どういう形で学習会や講演会は行われていましたか。

淵上：私は社会主義協会をあまり意識したことはなかったのですが、大坪康雄さんという方がおられて、その方が労働運動など色々な社会一般のことをずっと話をされていて、こぢんまりとした西鉄の中だけでの学習会があって、その中で学習会をしていた。大きくは、西鉄の労働組合の中にも、そういうグループの学習会が時々あっていました。

中島：そこでの学習会の題材はどのようなものがあったのですか。

淵上：その時の政治情勢、ものの考え方などを初歩的に。

中島：今ですと、例えば紙の資料をみんなで配って、読みながら学習したりしますが、当時の風景はどのような様子だったのですか。

淵上：当時は、『賃労働と資本』を読み合わせていくとか。その時に、この文章と今の社会情勢がどうかということを説明を受けて、議論をしていました。

中島：例えば今ですと、色々な新書の本がたくさん出ていますよね。向坂逸郎さんとか読みやすい本を書いていたりされてますが、そういう社会主義協会の関係者の本はありましたか。

淵上：というよりも、岩波文庫でした。

中島：新書じゃなくて、文庫ですか。

淵上：文庫でした。新書のない時代。『共産党宣言』とか、『賃労働と資本』とかあるじゃないですか。

篠原：岩波文庫の白ですね。あれを読むのですか。

淵上：はい。

篠原：難しいですよ。

淵上：難しいです。「こんな難しいものは、俺らは分からない」という話をしながら、文章の書かれている意味について、「このように書かれている」という説明を受けながら、やっていた。

中島：先生は当時、おいくつぐらいですか。

淵上：24、5の頃からですね。

篠原：その時の先生役だったのが、大坪康雄さんですか。

淵上：大坪康雄さんでしたね。紹介されたのは。

篠原：向坂逸郎氏が来るということは？

淵上：直接はなかったです。そういう偉い人たちとは、我々はそんなに。

篠原：他に先生役として記憶に残っている方はいますか。

淵上：ずっと後になりますが、奥田先生が「資本論の学習会をやる」と言って立ち上げて、資本論を読み始めたことがありました。そしたら、知事に出られたので、3回ぐらいで終わったかな。社会問題研究所、その他、社会党、県評などが主催する学習会があった。

篠原：それは、たくさんの方が来られていましたでしょうか。

淵上：そうですね。たくさんの方と、我々のグループ、私鉄の中の西鉄のグループだけということはありました。

中島：先生がおっしゃった学習会の参加人数は、毎回、何人ぐらいでしたか。

淵上：大体、6、7人ぐらいでした。あまり多くはなかったです。

篠原：それは、平日にやるのですか。

淵上：ほとんど平日の夕方。

中島：ちょっと仕事が落ち着いた後の時間ですね。

淵上：交通産業というのは、朝8時に始まって5時に終わる産業ではないですから、勤務もバラバラですから、集まりやすい時に集めてやっていました。

中島：交通産業の話に関連してお尋ねしたいのですが、バスの車掌として会社に入った時は、バスの運転はされていたのですか。

淵上：いいえ。当時、バスはツーマンで運転手と車掌で運行していました。私は車掌でした。

中島：免許はお持ちではなかった？

淵上：はい。

中島：に入った当時、1950年代後半、岸信介内閣の時、当時の福岡の街並みをずっと見てらっしゃったと思いますが、主にどの路線を走っていらっしゃったのですか。

淵上：福岡市内でしたね。

中島：それは、この天神界限とか博多の方も含めて。

淵上：そうですね。

中島：街並みはどうですか。もう綺麗に復興した後ですか。当時の福岡市内の街並みは、どんな様子でしたか。

淵上：路面電車が走ってまして、まだまだ道路の真ん中にあばら家が建っていたり、立退きがまだ進んでないとか。ようやく国体道路が出来て、福岡の街並みが整備されてきていた。昭和32年ぐらいは、そういう風景でした。

中島：戦争の爪痕はまだ残ってましたか。例えば、空襲で焼けた家とか。

淵上：いいえ、そういうのは見えなかった。所々、昔の家が残っていた。

中島：例えば、東京ですと、昭和32、33年くらいになると、だいが街が復興してきて、戦争の爪痕がなくなってきたなという感じだったらしいのですが、福岡も同じような感じですか。

淵上：電車通りは、そういう形でしたが、この辺一帯は、まだ、あばら屋がずっと建っていて、今の長浜や博多の川の堤防には、あばら屋がずっと建っていて、今でこそ綺麗ですが。昔、屋形船が浮かんでいたところは、まだ、ずっと建っていました。

中島：その街並みの話は非常に大事であると私は思っています、先生が学習会をされていた頃は、ちょうど日本が高度成長している頃ですよ。一方で、社会主義協会の勉強会では、労働者の貧困の問題などを学ばれたのではないかと思います。社会主義協会で現代政治の問題を考える時に、どういうところが問題なのか。政治において何が問題だと議論されたのでしょうか。

淵上：当時の協会内部のことは分かりませんが、私たちのまわりでは、あんまりそういうところにはいかなかったですね。

中島：そこまではいかなかったですか。

淵上：はい。資本と労働の関係、労働組合だから、働くのはどういうことかが主でした。政治的な問題を協会の中で、というか、その当時、私は協会を全然意識してなかったのも、そういうことよりも、日常の労働運動に対する議論の方が多かったですね。

中島：日常の労働問題というと、例えばどういう話になりますか。

淵上：原則的なことで、例えば、賃金とは何か、労働とは何か、働くとはどういう意味なのか、なぜ休みがあるのか、そういう基礎的な生き方みたいなことが多かったです。

中島：基本的な労働に関する考え方や理論、そのような感じですね。

篠原：法律の話もあったのですか。

淵上：法律や協約を学習していました。

篠原：労働協約やそういうのはなかったですか。

淵上：労働協約はあります。労働基準法や労働協約は現場の中でやる以外ない。ですから、例えば、私は協約をどうやって守るのか、守らせるのか。賃金闘争とか、大きなことは本部でやるから、問題は「職場でどれだけ協約を守るか守らせるか」が大事なことで、私がやり始めたのは、会社が協約を守らない。人手不足もあって、無茶苦茶に働かせられたりして、最初は1ヶ月休みがなかったり、2ヶ月休みがなかったりしたから、きっかけは、職場集会の場で、西鉄労働組合は基準法の適用があるのかという一言からはじまり、理論よりも実践が先でした。

最初、青年部ですから、当時の青年婦人部、今の女性部を集めて、一番仕事で嫌いなのは何かと聞いて、調査をして、一番嫌いなものから会社に要求して解決していこうというのが始まりでした。そのあと、そういう調査をして、今度は青年部だけではなく初めて、

運転手、整備、事務職も全部、700人くらいいましたが、運転手はどういうところが問題なのか、車掌はどういうところが問題なのか、整備はどこが問題なのか、事務職はどこが問題なのかをずっと聞いて、一番嫌なことだけ要求してやめようということからやりました。

篠原：そういう労働組合の実際の闘い方と社会主義協会は特に関係はしていないのですか。

淵上：協会から色々な指導があるというより、協会に頼るということは全然なかったです。

意識もなかったですね。その時に、大坪さんという人が来て、「職場で今こういうことをやって、まだ徒弟制度や年功序列が残っているけれども、どうやってなくしていくか。その時にこんなことをしたけど、どうかな」というときに、色々な意見で戦わせていた。だから、協会の思想や理論、協会がやらなければならないという意識は私の中ではなかったです。大坪さん個人みたいな感じでした。

篠原：大坪さんとのやりとりということでしょうか。

淵上：大坪さんとのやりとり。大坪さんが協会としてどうかという話をされたかどうかは、あまり記憶にないですね。終わった後、すぐに酒を飲んでいたので。

篠原：では、淵上先生ではかなり仲がよかったですか。

淵上：よかったですね。そういうのを教えてもらって、間違っているか間違っていないかを。

篠原：理論的な面から？

淵上：はい。だから、その時に、組合員が持つ不満の一番のところから解決をしていこうということが基準でしたね。職場活動は権利闘争ですから、一番難しかったのは、女性の生理休暇です。私もまだ独身だったし、男兄弟ばかりだったので、生理が何かも知らなかったです。「生理は何か」から始めました。そういうことをやって、結局、権利の問題というのは、個人の意識が非常に左右するんですよね。そこをどうするかというのは最大の悩み、一番の苦労、または一番面白いところでもありました。

中島：少しお尋ねしたいことがありますして、先生が西鉄に入社した何年か後に、三井三池闘争、有名な社会運動が起こってますよね。当時のことで、今思い出して、印象に残っていることはありますか。

淵上：バス会社ですから、当時、三池に労働者を派遣する。次の日は警察を、バスに乗せて大牟田まで派遣する。

中島：バスの車掌として。

淵上：バスの車掌ですから。労働者を乗せていく。帰りは警察を乗せてくる。そのときに警察の人も色々な話をしていましたけれども、警察でも、そこに働いている人は誰でも、当事者は人間だなあということでしたね。

篠原：具体的にはどんな会話だったのですか。

淵上：実際には、「早く家に帰って母ちゃん抱きたい」、「たくさん酒を飲みたい」、「あそこのちゃんぽんが食べたい」とかそんな他愛もない話をしていた。だから、三池現地ではも

のすごく対立している割には、個人になればそんなことはなかったです。ただ、私たちは、別に組合として行った時は、三池炭鉱に行って社宅の中に入って、そこで学習会や集会、デモに参加していました。

中島：その学習会はどのような形で行われていましたか。

淵上：行った人たちを集めては、その社宅の中で、三池労組の人たちだったと思いますが、今の闘争の状況などの説明が色々あっていました。

篠原：多分、それも社会主義協会の？

淵上：それはどうだったでしょうか。

中島：その社宅での学習会は、あちこちで開かれていましたか。

淵上：はい。ずっとやってきました。

中島：あちこちというのは、大規模に開かれていましたか。

淵上：そうですね。デモして勉強会をやっては集まって。その時の情勢分析とか、意思統一の場所だったと思いますね。

中島：先ほど、入社当時、西鉄の中で行っていた勉強会は、参加者が6、7名くらいだとおっしゃっていましたが、三井三池闘争当時の社宅での勉強会は、もっと大規模だったでしょうか。

淵上：それは大規模にやっていたと思います。当時、現地指導本部がやって、そこで学習会をやっていました。

篠原：1回あたり、何人ぐらいの集まりですか。

淵上：部屋に入るくらいですからね。15、16人いたのかな。

中島：社宅の部屋の中に、みんなが入るだけ入って、座敷に座って。

淵上：だから、そういうことをやってたんでしょうね。我々は、そこに入っていった。

中島：向坂さんが同じように三井三池で、同じように学習会をされてて、その時の写真などが残っています。その様子は、どこかの学校を使っているような感じでした。みんなで小学校の教室のようなところで、労働者の方々が机に向かって、教卓に向坂さんが立っているような写真でした。でも、今の先生の話を知っていると、社宅でやっていたということですね。

淵上：はい。そんな感じでしたね。それも動員に行って集められて、そこで学習をしていた。だから、そういう時は三池の書記長、副委員長、組織部長等が来て、いろいろ話をしていました。

中島：動員された従業員の方々は、先生も含めて、みんな学習会に出たから帰るのですか。

淵上：大体そのような。たまたま、私がそれに出くわしたのかもしれない。ずっとやられていたのか、系統的にやられていたのかどうかは。私たちは、仕事で行ったり、動員で行ったり。

中島：仕事で行った時の話は興味深いですね。福岡からバスで。

篠原：労働者を連れていく時もあれば、警察を連れていくこともあるのですね。

中島：どちらも「早く家に帰りたい」というような話をしていたということですね。

淵上：警察といえども、家庭のことを話していたので、「この人たちも、普通の人間だ」と思いましたね。

中島：逆に、闘争に労働組合側、労働者側で参加する福岡の人達がバスに乗っている時には、どんな話を他にされていたのですか。

淵上：労働歌を歌ったり。楽しくやって帰ってきていた。

中島：バスの中で歌ってたんですか。

淵上：歌ってた。頑張ろう、三池の歌とか。

篠原：ちょっとした遠足のようですね。

淵上：そうです。

中島：その方々は、鉱山で働いている方ではないですよ。福岡市内の労働者、労働組合の方ですよ。

淵上：そうですね。恐らく、三池に行って、そこで色々なことを教わったりして、三池の組合が今やっている職場活動、当時は職場闘争と運動の中で盛んに言われていた頃です。

中島：興味深い話をありがとうございます。三井三池闘争の前と後で、変わったことはありますか。変わったなど、今、振り返って、お感じになっていること、印象に残っていることがあればお尋ねしたいのですが。

淵上：一つは、三池闘争をして、三池でやられたような職場活動が全国に広がった。これは恐らく、当時の総評の一番特徴的なことだろうと思うけど、三池に来て、三池で色々なこと、戦いを学びながら、現地に帰って、また同じようなことをやっていく。だから、その時の学習会の仕方や組織の仕方は、三池の人たちが恐らく向坂さんたちと話をして、「これでいこう」ということでいっていたんでしょね。

中島：なるほどですね。三井三池闘争の後の向坂逸郎さんの本を読んでいると、「三井三池闘争でやれたことが非常に大事なのだ」ということを書かれていますね。

淵上：そうですね。

中島：戦後史の中では、「三井三池闘争は、組合側の敗北で終わった」と書かれていますが、実際に参加した方々にとってみれば、三井三池のやり方を、その後引き継いでいったということが、一つは言えますかね。

淵上：というか、「職場活動のあり方とは何か」ということは学んだと思いますね。

中島：職場活動のあり方を学ぶ機会になっていたということですね。

淵上：どのようにやっていくか。学習会はどうするか、職場闘争はどうするかということは学んだのではないでしょかね。

中島：もう1点お尋ねしたいのですが、三井三池闘争と同じ頃は、安保闘争が激しかった頃ですね。福岡の様子を教えていただけるとありがたいのですが。

淵上：福岡は夕方になりますと、大体、動員がかかってきて、最後は中洲の交番所前が解散地でした。

中島：どこから出発するのですか。会社ですか。

淵上：会社というか、大体、博多駅前や天神で集会をして、デモで歩いて。

中島：博多駅なら博多駅前の広場ですか。

淵上：なかったですね。なかったから、あの近くの公園。公園というより、当時はすぐ「デモ」と言って、デモをやっている間に人がどんどん増えてきている時代でしたから、特別集めなくても、歩いてました。

篠原：大体、何人ぐらいのデモになるのですか。

淵上：何人ぐらいでしょうか。数えたこともないけど、「今日はデモ」と言うと、すぐ集まって天神から中洲まで連なっていたから、何千人という話でしょうね。

篠原：そうですね。天神から中洲まで繋がるというと、それは数千人必要になる。

中島：中洲の交番に先頭の人たちが到着するときに、天神の方はまだ全員は出発してないとか。

淵上：そんな感じだったです。

中島：天神のどのあたりからスタートするのですか。

淵上：今もあまり変わってないようなところで、新天町の中の。

中島：警固公園の中ですか。

淵上：ちょうど今、商店街がある中とか、すぐあの辺、駅の前で。街頭演説とかやっていた。今はもう出来にくくなっていますが。

中島：西鉄の天神駅の裏側あたりに集まるのですか。新天町があるあの辺りに自然と集まって、そこからスタートするわけですか。

淵上：だから、街頭演説をやったら、集めなくても人が集まって、そのままデモに行く感じ。

篠原：大体、月に何回とか決まりがあったのですか。

淵上：しょっちゅうやってたような気がしますね。楽しみで。

篠原：2、3日に1回とかでしょうか。

淵上：そんな感じでした。

中島：楽しみでしたか。

淵上：楽しみだったですね。

篠原：それは、どういうところが楽しかったのですか。

淵上：合理化反対、安保反対でワーワーやって、集まったら1杯飲んで。

篠原：その安保反対と言いながら、同時に合理化反対もしていたのですか。

淵上：はい。

中島：安保反対だけで集まるのではなく、合理化反対とセットだったのですか。

篠原：その他の主張はありますか。

淵上：おそらく、各労働組合がそれぞれ合理化反対で抱えている問題があったら、加えて集まっていく。大きい集会は県評が集めて、それプラス地区労が集めて。いま、そこは市役所になってますけど。その前がちょっと広場になってますから、そこが大体、主たる会場になってましたね。今、公園になってますけどね。市役所の前の玄関前。

中島：天神とか博多駅周辺で集まって、演説が始まったとき、一人の演説者が安保の問題も提起したり、合理化の問題も提起したり、一人の演説の中でテーマを何個も抱き合わせになっていたのですか。

淵上：当時は代議士の皆さんと県評の幹部や地区労の幹部が演説していました。

篠原：演説している人の中で、印象に残っている人はおられますか。

淵上：当時、皆さんうまかったです。毎日毎日だったから、うまかったですよ。

篠原：当時の代議士というとどなたでしょうか。

淵上：檜崎弥之助や河野正、多賀谷真稔、中西績介、小柳勇、渡辺四郎、松本英一とか、錚々たるメンバーですから。

篠原：やはり喋りはうまいのですか。

淵上：うまいですよ。

中島：当時の檜崎弥之助さんは？

淵上：福岡1区の国会議員。

中島：先生、今日みたいにマイクもないし、声を通るものですか。

淵上：マイクはどうだったかな。大きいニュースカーがあったような気がしますね。まだ、調子が良い頃ですから、総評が。

中島：先生、重ねてのお尋ねで申し訳ないのですが、天神で集会をするときに、演説者は1回の演説で安保問題も取り上げ、合理化問題も取り上げ、一人が複数の論点を取り上げたような印象ですか。

淵上：安保闘争の時は、具体的に、シードラゴンが来てみたり、原潜が来てみたり、色々するじゃないですか。その時その時のテーマを、それぞれが。

中島：やはり、メインの集会のテーマがあるんですね。

淵上：それに従って演説していく。国会は国会の情勢報告をする。県会は県会の情勢報告をする。

中島：すみません。なぜ、このようなことをお尋ねしたかと言うと、シードラゴンの入港に反対する集会だけを開いていたのか、それとも安保闘争の時には、安保条約反対、合理化も反対。

淵上：大体、そういうのは定番でかかっている、その時の主要なテーマ、原潜なら原潜反対でやっていました。

中島：主要なテーマは1つだけですか。2つあったりしますか。

淵上：その時に、例えば板付基地闘争反対ということになったり、いろんなことを言っているという。

中島：安保闘争というのは、岸信介内閣の時の話で、三井三池闘争のやり方であるとか、岸信介の安保条約反対という、その時のやり方が、シードラゴンが来る時とか板付空港の問題が引き継がれていっている印象ですね。

淵上：そうですね。板付闘争で板付空港を取り巻いて、大雨が降って、風邪をひかせて、何百人という人たちが風邪をひいたので、「雨降りはやらないように」と各単組が。

篠原：板付闘争は何年ぐらいの闘争ですか。

淵上：何年ですかね。

篠原：例えば、九大にファントム機が墜落した後ですか。それは昭和43年なのですが。そのあとに板付空港で、みんなでデモをしています。

淵上：しょっちゅうやりました。板付基地撤去反対闘争。ぐるっと赤旗で取り巻いて。

中島：何年ぐらいから基地反対闘争やっていましたか。

淵上：私たちが気がついた時には、反対闘争をやりましたからね。

中島：入社してすぐの頃ですか。

淵上：入社してすぐの頃はちょっと分かりません。

篠原：60年代ではありますよね。

淵上：はい。60年代。

篠原：70年代ではない。

淵上：ファントムが落ちるじゃないですか。九州大学に。

篠原：ファントムが落ちる前から、基地反対闘争はあったんですね。

淵上：反対闘争はありました。板付基地撤去闘争をずっとやってました。ただ、取り囲んでやったりするのは、時々でしたけれども。基地反対闘争は、しょっちゅうやっていた。

中島：そのように、何年の何月に集会をやったという記録はないですか。

淵上：あるはずですけどね。

中島：迎れる可能性はありますか。

淵上：当時の地区労年史など。

中島：その辺りですね。

淵上：持っているとしたら、九大かな。

中島：しかし、300人風邪ひいて、とかいう記録は残ってないですよ。

篠原：その時は西鉄労組で機関紙とかは発行されているのですか。

淵上：大体、発行してますね。

篠原：それは、西鉄には残ってるのでしょうか。

淵上：西鉄にはあるはずですが。ただ、きちんととっているかどうかが問題。すぐ燃やしたり、そのままゴミ焼き場に持って行ったりしているから。ただ、年史を作っていると思うので、

項目ぐらいいは書いてあるかもしれない。風邪ひいた話などは、あの時は後で問題になったんです。2月の寒い時でしたから。

—社会主義協会について—

篠原：社会主義協会について、少し戻りたいのですが、1967年に社会主義協会が分裂することになります。

中島：昭和42年ですね。

篠原：その頃の話は、ご記憶にありますか。

淵上：なんで分裂したのかは、当時、私はよく分かりませんでした。理論学習だけでいいのか、実践していくのが必要ではないか、みたいな感じ。私はその頃はよく分かりませんでした、その頃は。協会に入ってはいたけど、協会のことは。

篠原：先生のおっしゃった理論というのが、いわゆる向坂でしょうか。

淵上：向坂さんだけだったでしょうか。私は、向坂さんより奥田さんの方が強かったような。

篠原：実践が大事だと言ったのが奥田ですか。

淵上：そんなことを言われたような気がしますね。

篠原：その当時から、「向坂と奥田」みたいな構図だったのですか。

淵上：じゃないかな。

篠原：太田ではないですか。

淵上：当時は太田、向坂かな。

篠原：太田は、あまり理論理論という学者ではなく、理論面では奥田だったという話もあります。

淵上：そうですね。奥田さんの方が、より現実的、緻密的。緻密だったのかな。結局、理論は理論であるけれども、実践をやってみて、そこで出てきた問題を理論通りいかなかったら、もう1回。この辺のところは、奥田さんは柔軟だった気がします。ただ、私は厳密にその辺を勉強したことはないです。

篠原：淵上先生は分裂した後、どちらに行ったのですか。

淵上：僕は奥田さん。大坪さんが奥田さんと一緒だったので。「淵上君どうする」、「いいよ」とそんな感じですよ。あまり理屈上こうだからということはないです。それこそ、一杯飲みに行こうか、行こう行こうという感じでした。

篠原：この社会主義協会の分裂が労働組合の運動にもたらした影響はございますか。

淵上：出てきてると思います。

篠原：どの辺りでしょうか。

淵上：やはり、日本の革新運動にとっても、マイナスだったのではないかと思います。本来、現実の社会だから理論通りにいくわけではないので、その辺をもう少し柔軟に対応していくこととして、現実的な解決を求めていけば良かったのですが、その辺が足りなかつ

たのではないか。その点で、私は理論に従って大衆に教えて、それでいこう、というのは運動の話ですから。そうではなくて、そこの現実を、ダメだと言って分裂を求めるのではなく、妥協してまとめる努力が足りなかったのではないかと思います。

篠原：それは社会主義協会の人たちに対してでしょうか。

淵上：よく分かりません。組合の場合は。大体、分裂をしていくときは、会社資本の側から楔を打ち込まれて、飲ませ食わせ抱かせてグループを作っていきますよね。その時に、こっちが原則的になってしまうと、相手側もそうなるから、分裂させて組合の力を弱めて、会社のいうとおりにさせようと分裂させるのですから。その時の指導者が、分裂回避のために、一歩下がれる勇気があるかどうかが大事ですね。

篠原：その指導者は、どなたになるのですか。

淵上：労働組合の幹部しか経験がないので分かりませんが。党的なところから分裂問題を考えたことはない。労働組合の中での分裂でしたから、分裂させられる。そのとき組織の弱さというのがあるわけです。その弱さというところを、「そうじゃないよ」という理屈を教えていかないといけない。うまくいかないですね。

篠原：分裂した社会主義協会は、向坂派協会が強くなっていきますよね。

淵上：そうですね。多数派になっていく。

篠原：それで社会党に対しても介入を始めるようになります。

淵上：そうですね。結局、日本の政党の組織というのは、保守革新を問わず、ずっと分裂状態じゃないですか。自民党の場合は、派閥という形でうまく治まっているが、革新の側は、分裂して各政党を名乗っていく。だから、自民党の派閥と革新の分裂の状況は、革新側は政党を名乗るけれども、自民党はそれぞれ派閥を作っているだけで、独立していない。統合をうまくやっているのが自民党ではないかと思えます。だから、自民党の中の、どの派と話をするのが非常に大事。片一方の派閥と話をしてる時に、こっちの派閥と話をしても、物事は進まない。なぜ分裂しているのかなと思った時に、自民党は体制維持でまとまる。こちらは、分裂して終わり。けんかだけして。こんな感じで今も続いているという状況ですね。

中島：理論も大事だけれども、現場のことも大事で、現実的な要素も考えなければならないとおっしゃっていましたが、昭和42年よりも前になると、社会党の中で江田三郎らが、構造改革論を出していくんですよね。本屋さんには、構造改革論の本が、池田内閣期の頃に並んでたりして、学習会などもよく行われていたようですが、先生の職場では構造改革論の勉強会はされていなかったか。

淵上：そのように位置付けて学習会したことはなかったですね。ただ、江田三郎さんが構造改革論で打ち上げていった、イギリスのような社会保障、アメリカのような生活、ソビエトのような体制、こういう社会を目指すというのは、「なんでこれがいけないのか」と当時思いました。

中島：「なんで、これがいけないのか」と。

渚上：派閥の議論にしてしまったのがいけない。勝ち負けの議論に。どういう国を作るかというふうに行けばよかった。そういう議論だとは思いますが。今、言っているのは、みんな構造改革論みたいなことではないですか。

中島：そうですね。先生の発言は興味深くて、「なんでこれがいかんのか」と思ったという事は、当時、社会主義協会が江田三郎さん達の構造改革論を厳しく批判しますね。やはり、その批判という雰囲気職場の中にまで入ってきていたということなのでしょうか。

渚上：それはあったと思いますね。大きな流れで言うと、総評・同盟みたいな感じ。総評・同盟だけではないところがないといけない、というところがありますね。

中島：なるほどですね。

渚上：それは、やっぱり労働者の生活があるから。生活を無視して、理屈はないわけですから。生活をどれだけ大事にするかというところで、一致できるようになっていけば、あんな大きくはならずに。それか、統一戦線みたいにまとまれるか。どこかで妥協するか。どこで妥協するかが大事なのではないかな。

中島：当時の話で、ちょっと別の話になりますが、昭和 39 年、東京オリンピックが行われた年になりますが、先ほど先生がおっしゃられた原子力潜水艦のシードラゴンが佐世保に入港しました。当時のシードラゴンの入港のことで、ご記憶に残っていることがあればお訊きしたいのですが。

渚上：佐世保に入ってくるようになってから、福岡では、毎週、シードラゴン入港反対の集会を市役所前でやってたことがありました。私も佐世保まで行って、一番最初に催涙ガスを使われたのが、我々の福岡の部隊だったかな。平瀬橋のところで 23 日。全学連の街頭カンパで 1 万円がどんどん入るような、社会的に信用されてた時でしたから、その連中と一緒に、平瀬橋突破の動員に行った。

中島：エンタープライズ入港とシードラゴン入港と間違えられるときがあるのですが。

渚上：エンタープライズだな。シードラゴンもシードラゴンで毎週、集会。佐世保はエンタープライズでした。

中島：シードラゴンの原子力潜水艦の話で、核エネルギーじゃないですか。この辺りのことで、先生、お感じになったことございますか。

渚上：それこそ、許せるわけではないじゃないかと。

中島：「許せるわけではないじゃないか」というお気持ちを、もう少しお尋ねしたいのですが、当時、シードラゴンを巡って、どんな議論が先生の職場でなされていきましたか。

渚上：やはり原子力に対するアレルギーの強さを、みんなが持っていた時代でした。原子力と聞いただけで、反対といった感じでした。

中島：その時の反対という思いの背景は、やはり被爆国だからですか。あるいは、戦争体験

なども含めて？

淵上：はい、そうです。中国からの引揚と中国の内戦と広島・長崎・沖縄の経験からと戦後の飢餓から反対です。「シードラゴン、シードラゴン」という、おじさんの声だけが今でも残っていますが。西田か、西岡か、地区労の議長をしていた人。

篠原：それは、どこの地区労ですか。

淵上：福岡地区労。市役所の前で「シードラゴン」と言っていた。

篠原：その時に、檜崎弥之助が逮捕されてますよね。

淵上：あったね。

篠原：警察官を背負い投げで投げて逮捕されました。

淵上：福岡は、しょっちゅうそういうことするんですよ。福岡の党で、動員で行った時、佐世保のエンタープライズの時も、警察が指揮官を行っているジープをガタガタやって。

中島：福岡の部隊がですか。

淵上：はい。ガタガタやったわけですよ。今から、「催涙ガスをまく」と言った時には、福岡の部隊が一番前でした。私たちが一番前でした。

中島：先生、その部隊は労働者ばかりですか。学生達はいましたか。

淵上：はい、学生と労働者等。それは社会党総評の福岡の部隊で行っていた。

中島：社会党総評の部隊で、従業員と学生が一緒になっていたということですか。

淵上：一緒というか、組織そのものは別ですが、学生は学生の部隊だけで、我々は我々の部隊だけで。学生の部隊がやられたら、我々が前に出る。まず、顔をガスでやって、目を開けないようにして、くるっと後ろを向いたら腰のところをば一っとやって、ばたっと倒れる。そこを捕まえる。あのガスが強かったですね。

中島：そうですか。

淵上：私達も動員に行っちゃりました。あの時、初めてでしたね。

篠原：それが、エンタープライズの話ですか。

淵上：エンタープライズ。

中島：昭和43年で1968年ですね。九大のファントム墜落の時と同じ年ですね。

淵上：九大と沖縄国際大学で同じ墜ちたやつでも、九大はしばらくぶら下がっていた。

中島：そうなんですよね。バリゲート封鎖をしました。あの時の昭和43年が、一番運動が激しかったからですね。ファントムの墜落の後で、福岡市内をいろいろな団体がデモするんですよ。

淵上：そうですね。だから、ずっとあそこに動員で行ったものです。

中島：先生は、九大にファントムが突き刺さっているのを見に行かれましたか。

淵上：行きました。当時、法学部の井上教授が「激突、炎上と言うんだ。衝突、墜落ではない」という話をしていました。九州大学と沖縄国際大学の違いかな。力関係の違いもあったかもしれないし。現場の状況の違いもあったかもしれません。

—社会党、非核三原則、檜崎弥之助氏について—

中島：エンタープライズの入港の時には、ちょうど佐藤内閣が非核三原則を出した頃ですね。

渚上：そうですね。

中島：先生は非核三原則の問題を労働組合の学習会や集会で取り上げられた様子は、ご記憶にありますか。

渚上：「持たず、持ち込まず、作らず」。こればかり言っていたような感じで、具体的にどうするかは……。

中島：やはり非核三原則がスローガンになっていたということですね。

渚上：はい。特に私鉄九州の場合は、長崎に組合がありましたからね。それは、よく長崎の人たちと話をした。

篠原：非核三原則についてですが、佐藤政権が1968年の1月に言い始めるとは思います、当時、非核三原則には賛成だったのですか。

渚上：賛成とか反対とかいう議論は、あまりなかったのではないですかね。

篠原：社会党の資料を見ると、社会党は賛成か反対かというよりも、どうも佐藤政権の言う非核三原則を信用していないという面があって、「何を言っているのか」という欺瞞に満ちたものだと捉えているところがあります。

渚上：あったかもしれませんね。あれから安保闘争、安保5人男とか色々出てきた時代ですかね。

篠原：渚上先生は、職場で非核三原則について話されたことはあるのですか。

渚上：話したことはないですね。思いはありましたけど。

中島：思いがあるというのは、「持たず、作らず」までは？

渚上：スローガンのように言っていたかもしれない。ものすごく深く考えて、というより。

中島：少し細かい話になってしまいますが、シードラゴンの頃の話ですが、東京オリンピックと同じ年の話ですね。アメリカの本音は、ポラリス潜水艦って、聞かれたことありますか。原子力潜水艦の中でも、核弾頭を積んでいる。これを日本にも寄港させたかったんですよ。ところが、日本国内の反対が大きいから、その布石として、シードラゴンを入港させるんです。そのシードラゴンは原子力が推進力だけど、核弾頭は積んでいない。アメリカの本音はポラリスです。そこの核に対する国内の反発の強さは、今の先生のお話を伺っても実感しますね。

渚上：やはり核に対するアレルギーは、ものすごく強かったのではないかね。

中島：大きいですね。

渚上：今でもあると思いますよ。ただ、ずっと運動として、非核三原則を守れ、原発反対を続けていることが大事です。徐々に原発を推進していく側が、原子力発電は安全だ、安全だの神話によって、だんだんアレルギーがなくなってきたのかな。しかし、それでもあるんじゃないですか、今でも。核に対する国民の感情は根底にあると思います。無茶苦茶な

殺人兵器ですから。

篠原：先ほどから出てきた、檜崎弥之助氏についてお訊きしたいのですが、先生は檜崎氏とは旧知の間柄であるという感じですか。

淵上：遠い人でしたね。

篠原：遠い？

淵上：はい。

篠原：どういう意味で遠いのですか。

淵上：やはり特別じゃないですか。輝ける人でしたから。福岡1区の場合、檜崎弥之助、河野正という両社会党代議士を私どもは応援していた。ただ、職場で推薦を分けていた。選挙しやすいのは、弥之助さんの方がしやすかった。

篠原：選挙しやすいとは、どういう意味ですか。

淵上：選挙闘争をやっていくときに、「河野さんをお願いします」と「檜崎さんをお願いします」とでは、河野さんは社会福祉の関係の仕事が多かったのも、非常に地味。檜崎さんはテレビで派手。最後は騙されたりもしましたが、その差はありました。

中島：檜崎弥之助さんは馬出に住んでましたね。ご自宅の場所は有名だったのですか。社会党の政治家たちは、檜崎さん以外にも「清貧に甘んじる」ということをやってらっしゃる。だから、檜崎さんの家も多分木造のアパートなんですよ。

篠原：九大病院の近くだったそうですね。

淵上：非常に大きな境目がありまして、解放同盟の松本治一郎さんが、「雨が漏れなければいい。家とはそういうものだ」と。あの人が生きてる時に、家を建てたりする人は社会党にはいなかったのではないかと。

中島：むしろ、清貧に甘んじるということですね。

篠原：福岡県内では？

淵上：県内はもとより、九州でも。

中島：松本治一郎さんのやり方、生き方が1つの模範になってたんですね。

淵上：違った意味で大きい重みと言いますか、ガチッとありました。

中島：松本治一郎さんが、「雨が漏れなければいい」と実践されているのに、自分だけ家を建てるわけにはいかない。僕は、浅沼稻次郎さん、彼が清貧に甘んじる政治家として有名だったから、彼の影響力が九州でも大きいかと思ってましたが、松本さんなんですよ。

淵上：そういう感じだったですね。だから、松本治一郎さんが亡くなってから、少し変わりましたけど。あの時代の人たちは、そういうことで運動をやってきたんでしょうね。

篠原：檜崎弥之助に戻りたいのですが、彼は当時から福岡でも有名なスター代議士だったわけですか。

淵上：いいえ、そうでもなかったのではないかと。やはり、安保闘争を通じてからではないでしょうか。最初から、そんなに有名だったわけではない。彼は、いきなり国会議員になっ

てたから、福岡の革新運動は松本治一郎さんを中心にやっていて、解放同盟の方の議員が多かったです。それに徐々に、労働組合出身の人が党に入っていく。最初は、解放同盟の人が多かった。

篠原：檜崎弥之助さんの奥さんは、松本治一郎の姪ですから、もともと解放同盟から入ってきております。やはり有名になったのは安保からでしょうか。

淵上：だと思います。

篠原：細かい話ですが、1968年に檜崎弥之助が追求した問題で、AMMがあったことをご存知でしょうか。アメリカではなく、日本が核兵器の研究をしていたという話があります。

淵上：そういうことかもしれませんね。あの頃からじゃないですか。党の中に安保。

篠原：その2年後から社会党内に軍事プロジェクトチームができてくる。

淵上：それが、安保5人男になっていくのかなあ。

篠原：安保5人男と、ほぼ同じ時ですね。

淵上：だから、そういうのが出てきたのではないかなと思う。なんとなく覚えがある。この頃、私はピーピーパーパーの頃。

篠原：このころ、檜崎弥之助が佐世保で催涙ガスをかけられたということを国会で追及しています。

淵上：そうですね。福岡ですから。私達の同僚がやられた。催涙ガスが濃くて。

篠原：その時に、CNという言葉は出てきませんでしたか。クロロアセトフェノンです。

淵上：もうその男は亡くなりましたけど、結局私たちが1台の車で佐世保まで行って、ガスをかけられるわけですね。そして、福岡に帰ってくる途中に、その男が1月の寒いのに、「尻が焼ける」と言うのです。だから、福岡に帰ってくる間中、ワセリンか何かの油を塗ったりしていた。寒いけれども、尻が熱くてたまらないと言うから、恥ずかしい話、後ろの窓開けて、尻を出して、福岡まで帰ってきた。ガソリンスタンドで水をかけながら帰ってくるけど、催涙ガスだから、みんな涙を流していた。病院に連れて行ったら、尻の皮が剥げていた。うつ伏せになって、ずっと寝ていた。それを国会で取り上げたんです。

中島：それは、先生、西鉄の労組の皆さんが被害者になったのですか。

淵上：はい。我々は西鉄に動員がかかったから行って、その時にさっき言ったみたいにガチャガチャとやったから。

中島：車で行って、車で帰ってきたとおっしゃいましたが。

淵上：レンタカーを借りて行きました。動員で佐世保まで行きました。

中島：列車で行ったんじゃないのですか。

淵上：車でした。レンタカーで。

中島：何人ぐらい乗って？

淵上：あの時は、5人乗っていた。それで、一人だけ、ものすごくかぶった。それは大変でした。私達もヘルメットかぶってますから、この辺が焼けて。ヤッケなんか着て行って、

家に帰って洗濯中も涙がどんどん出た。

中島：先生も涙がずっと出ていたのですか。

淵上：はい。催涙ガスが、まだ洋服に残っているわけです。だから、もう捨てましたよ。そのくらい、ものすごく酷かったです。皮がケロイドみたいになって剥げて。お尻が国会で問題になったのは、その人の写真。

篠原：一人、失明してますよね。

淵上：はい。それで、国会でやってくれと。

中島：西鉄の労組で、檜崎さんをお願いしたんですね。

淵上：どうなっているんだということで、我々もやって。

中島：そうでしたか。福岡の部隊が最初にかけてたとおっしゃいましたが、西鉄の労組以外にも動員がかかった人たちが、福岡部隊として、みんな一緒にいたのですか。

淵上：そうです。グループグループで組むじゃないですか。我々は青のヘルメットをかぶってたから、「青のヘルメット逃げるな。もう一回体制を立て直して突っ込め」と言われて、警察に突っ込んで行った。

中島：誰に言われるのですか。

淵上：それは党の指揮者がいて、マイクを持って、「突っ込め」とか「逃げろ」とか言っていた。

中島：党は社会党ですか。

淵上：社会党です。

中島：政治家ですか。

淵上：そうです。

中島：政治家が指示をするのですか。

篠原：国会議員ですか。

淵上：当時は県本部の人だったと思いますね。

中島：県本部は、長崎の県本部？

淵上：いえ、福岡の県本部。

中島：その人たちが指示を出すのですか。福岡の部隊を率いているのは、福岡の社会党の県本部。やはり、党が動いてますよね。

淵上：党と県評。おそらく、県総評も一緒になって、我々労働者部隊も一緒になって。

中島：確認ですが、「突っ込め」と指示を出すのは、社会党の県本部の政治家ですか。

淵上：そうですね。

中島：職員ではなくて、政治家？

篠原：県会議員とか？

淵上：県会議員だったと思いますね。

中島：エンタープライズの時ですか。

渚上：この時が酷かった。これが初めてですよ。

篠原：私が調べたところ、クロロアセトフェノンというのは、ガスとして使うのはあり得るらしいです。ですが、水に溶かして使うものではないらしいです。これを水に溶かして使うと残存性が出てくる。

渚上：ずっと抜けないですよ。だから、その時手袋をはめて、目をこすると1週間しても涙が出る。ずっと涙が出るから「捨てる」と。捨てましたけれども。それは、酷かったですよ。ガスを使ったのも、これが初めてではないか。今からガスを放水するというのは、もうバシャーンときた。

中島：そのきっかけの1つは、福岡の部隊が警察側の指揮官がいる車に突撃をして行って、ガタガタ揺らし始めたので、向こうも撒いてきた。

渚上：おそらく、一番最初に使われた。その前に学生がいましたけど。学生が退いてしまった後、私たちが一番前になった。

中島：向こうも、もう「福岡の部隊が来た、強い労組が来る」と構えているわけですね。

篠原：狙い撃ちされている感じですね。

渚上：そうだと思いますよ。

中島：福岡は強いんですね。平瀬橋の上ですよ。車は、どの辺りに停めたのですか。

渚上：平瀬橋がありますよね。ちょっと前に木がある。その前に警察の車。我々はこの道をざっと逃げて。

中島：もう逃げて行ったのですね。

渚上：ガスをかけられてからは、捕まえられるから、逃げるしかないから逃げる。

中島：ガスをかけられた後、すぐ車で逃げたんですね。

渚上：ずぶ濡れですよ。学生は、上着一枚だけ脱いだら、さっと水かけて、きちんと援護隊がいた。我々はそんなものはない。ガスが出てくるとは思っていない。今度も寒くてずぶ濡れになるかな、くらいにしか思ってなかったのに。

中島：学生たちは車で来ていないので、列車ですよ。逃げられないですよ。

渚上：列車だったと思います。大変だったと思います。

中島：学生達は援護の部隊もあったのですか。

渚上：きちんとそういうのは、あった。行けば、ちゃんと水をかけてやるとか。

中島：女子学生たちが水をかけたり？

渚上：水をかけたり、洋服を着替えさせたり。

中島：援護部隊ですか。

渚上：びしょ濡れになって帰って来た。体で乾く間、ガスがずっと出るから、泣きながら。

中島：近くに、佐世保の市民病院があったのですが、そこには駆け込まずに、帰ったのですか。

渚上：そうですね。

中島：病院はすぐ近くにあって、そこはそこで治療はしてたようですが。

淵上：そのように思ってた。佐世保から福岡に帰ってくる間、薬局で火傷の薬を買って、塗りながら帰って来た。

篠原：榑崎がすごく時間をかけて追及しているのは、そういう背景があるんですね。

淵上：私たちが、榑崎弥之助の大きな支持母体でしたから、真剣にやってくれた。皮がむけて赤い肉が出ていた。写真を撮って、榑崎弥之助議員にやった。

中島：先生の上司が、お尻の写真を榑崎さんに渡したんでしょうね。

淵上：あの時は自宅で写して、榑崎弥之助議員が直接、取りに行ったかもしれない。

篠原：お尻の皮が剥げたのは、西鉄労組の方？

淵上：そうそう。

中島：榑崎さんが直接写真を取りにきた？

淵上：かもしれませんね。

篠原：その写真は、見たことがあります。榑崎氏の本に白黒写真で。ただ、そのことについて労働者としか書いてないので、どこの労働者とは書いてありませんでした。

淵上：そうなったのは、その人一人でした。ヘルメットの紐や手袋についたところが、しばらく痒くて、後に残って。あれが初めてでしたね。ガスが使われたのが。

中島：先生、今の話、大変興味深かったのですが、同じように、1980年代になると、佐世保に戦艦ニュージャージーが入って来ます。これは少し小さいのですが、この時、論点になったのはトマホークです。これも核兵器を積める兵器で、佐世保に来たのが一番大きいニュージャージー、横須賀にロングビーチ、呉にメリルが入ったのですが、1986年ですから、昭和61年の頃です。この話をご記憶にありますか。同じように労働組合関係で何か問題を提起したご記憶はありますか。

淵上：佐世保まで行ったかな。これは、入港したんですかね。

中島：入港はしたのですが。

淵上：沖の方に留まっているのを、こちらからワーワー言っただけかな。抗議行動をやったくらいですかね。

中島：覚えてらっしゃいますね。この時、核兵器を積んだ船が来ることが問題として取り上げられた。やはり、核の問題が80年代になっても残っている。

淵上：その点はずっとでしたね。

中島：これは、労組の集会でも取り上げられたりしてましたか。

淵上：当時は、組合、総評でしたから、党と総評の関係だったので、党が総評と相談すれば、総評が指示して、総評の組合に出してくる。それで、動員で行くという感じですね。

中島：今回のニュージャージーと同じ感じですね。

淵上：同じような感じですよ。エンタープライズも同じような感じですよ。当時の総評と党が一緒になって、という感じですね。

中島：その関係性は、少し大きな話になりますけれども、三井三池闘争の頃から、例えばニュージャーシー入港の時の、党と総評との協力関係のように、同じようなことでつながってきていますよね。

渕上：同じようなパターン。総評と党は表裏一体な感じでしたから、党に相談をする。党が持ちかけて来る。逆に、総評側が持って行って、党も一緒にやらせるという感じだった。今みたいに政治に全然関心がないのではなく、核の問題や軍事の問題は、常に一緒のテーマでした。

中島：一緒のテーマですね。

渕上：そういう感じでした。それは、今もずっと沖縄で続いている。九州ブロックとして一体的に取り組みますからね。

—奥田県政について—

篠原：最後に奥田県政と先生との関わりについて、お訊きたいのですが、奥田県政は1983年が初当選なのですが、この選挙に渕上先生はどのように関わっていたのですか。

渕上：結局、私は労働組合で九州ブロックの担当でしたので、直接的には党と西鉄労働組合との関係。それとの関わりしかないですね。

篠原：奥田先生が出馬される時に、この選挙は勝てると思いになられましたか。

渕上：多分、負けるだろうと。勝つなんて思ってなかったですね。途中から少しムードが変わってきたのは、北九州の市長をされた吉田法晴という人が参議院に出た時か、「ほうせい、ほうせい、吉田法晴」と学校の生徒が言って回るようなコマーシャルがあった。その時に奥田さんがやったコマーシャルが、「今何時だ、八時（八二）だ」と。そのコマーシャルを子供達が言い始めた。それから、ムードが変わった感じです。

篠原：渕上先生は、奥田八二氏とは昔からの付き合いなのですか。

渕上：名前だけは早くから知ってまして、選挙に出るちょっと前くらいに、奥田先生が7、8人集めて、資本論の学習会を始めて、2回か3回したら、選挙に出るからということで、終わった。選挙の前は、それまでぐらいです。

篠原：奥田氏が出馬するときは、意外でしたか。それとも、当然と思われましたか。

渕上：意外でしたね。まさか、政治の道を歩くとは思ってなかったですね。

篠原：そして、そのコマーシャルで、子供達も言い始めた。

渕上：言い始めましたね。「今何時だ、八時（八二）だ」と。そして当選。私の当選も、奥田さんの県知事当選がなければなかったと思います。

篠原：奥田先生の潮目が変わったのはコマーシャルの話がありますが、これまで福岡県はずっと保守ですよ。それが、どうして、奥田の時に革新へとシフトしたのでしょうか。

渕上：当時の知事、亀井光の知事公舎問題。5千円のスリッパ、3万円のゴミ箱などの話題が出てから、ムードがガラッと変わった。意外とそういうことに対して福岡県民は厳しい

のではないか。汚職など。それと、大きな背景は、当時、労働戦線統一問題が出てきたので、背後に、同盟対総評みたいな争いがあった、どちらが主導権を取るかという時に、この選挙で勝つか負けるかというのが陣営にとって大きな問題だった。総評と同盟プラス共産党だったか、あの頃、奥田さんは共産党と一緒にやったのかな。

篠原：社共でやっています。

淵上：やりましたよね。社共でやれるかどうか。奥田さんでなければ、社共オッケーでなかったかもしれない。そういうのが大きいと思います。労働戦線統一の時に大きな同盟と総評の部隊が、喧嘩のように張り合うのではなく、ここでひと頑張りしてきちんと存在感を示しておこうというのが、総評幹部にあったと思います。それで、力が大きく出てきたのではないか。

中島：先生、同盟というと、東海地方の同盟が有名ですよ。九州地域での同盟の存在感というのは、どのような感じだったのでしょうか。

淵上：あの頃は、生産性向上運動、賛成か反対かみたいなのがあって。分裂攻撃と、そういうのを専門にやっている人たちがウロウロしていた。私たちのところにも、そのような話がありましたが、それは始めから断った。でもなんか怪しい人物がいた。

中島：企業で言うと、どういうところが同盟の傘下として有名だったのでしょうか。

淵上：九州電力。

篠原：奥田先生の2期目の1989年に淵上先生が参議院に当選される。非常に失礼な言い方ですが、この時になぜ先生が候補者になられたのか、教えていただきたいです。

淵上：補欠選挙でした。県総評と社会党の間で候補者作りやってたんでしょうね。当時、共産党の勢力もだんだん強くなりつつあって、それこそ連合が結成された頃でしたので、ここで不戦敗とはならないだろうということで、県総評の幹部の人たちが寄って、色々候補者作りをやっていたのではないか。その時に出たい人がいたんですよ。

篠原：ちょっと問題がある方？

淵上：当時の西鉄の池松委員長がいて、私も政治に出たいとは思ってなかったもので、政治ならその人がいいかなと思っていた。1月10日前後だったか、ちらほら私の名前が出てきていて。というのは、西鉄の組合の幹部が「うちから出そう」みたいなことを言った。社会党としては、当時の書記長の竹村さんという人に決めていた。そしたら、西鉄から出そうということになって、西鉄はだれかとなったら、淵上になっていたわけです。私はその話の時、逃げて隠れていたけれど、10日頃に春闘の準備のために九州各県から代表者を集めて会議をしないといけなくなった。その時に捕まえられた。「俺は地位も名誉もないし、金もないから出ない」と言ったら、「地位も名誉も金もないから、落選してもいいじゃないか」と言うから、「当選しないなら出よう」と言って出た。

篠原：それで、当選された？

淵上：当選したんですね。奥田さんが県知事をやられてて、福岡県全体の中では不戦敗では

いけないというムードと、奥田県政をどうするみたいな雰囲気があった。奥田さんの県政の1期目が終わる頃ですかね。

篠原：先ほど、奥田氏が知事だったことも影響したとおっしゃいましたが、どういうところで大きかったですか。

渕上：革新県政というのと、あと米の自由化があった。私のところが少しだけ畑があったので、うちの家内が農協の婦人部の役員をしていて、「奥さんが農協の婦人部長らしい」というのが広がって、米の自由化反対と重なったんじゃないでしょうか。

篠原：リクルート事件は？

渕上：リクルート事件がちょうどあった時ですから、農政問題と消費税問題とリクルート問題の三点セット。

篠原：奥田八二氏から助けてもらったことは何かありますか。

渕上：あつという間の選挙でしたからね。しかし、後で聞けば、奥田さん辺りがぐるっと県内をよろしくと回っていた。県政の中の与党、少数与党でしたが、社民党県議団で奥田県政を支えていましたから、その点が良かったですね。だから、奥田さんの政治が浸透し始めている頃だったので、それが一番大きかったのではなかったでしょうか。不正に対して奥田知事がやろうとしたことに対して、暴力事件が起きる。その時のけじめを奥田知事がきちんとつけていたことが、政治信頼につながっていったのではないですかね。

篠原：関連してお伺いしたいのは、奥田県政を、どのように特徴付けられると思ってらっしゃいますか。

渕上：人には柔軟で、己には厳しい人でしたね。いけないことはいけないと、きちんと通そうと。本来は弱い人たちに対して厳しくするということは間違いかもしれないけど、例えば、生活保護費を不正受給していることに対してきちんとする。そういうところは、けじめをきちんとつけた人だなと思います。今までルーズにしていたところをやる。その代わり、きちんと責任を持つところがありましたね。原則は原則だけど、柔軟にされる。

篠原：原則には柔軟であるというのは具体的にはどういうことでしょうか。

渕上：柔軟というのは、自分の主張ばかりしないで、妥協するところは妥協して、次に行くという意味。具体的に、細かな話はないのですが。

篠原：確かに社会主義協会分裂の頃から、理論だけではなく、現実問題を。

渕上：ずっとそのような目でいましたから、それは変わらなかったような感じです。

篠原：知事になってからも、柔軟性を発揮したところがありますか。

渕上：だから良かったのではないのでしょうか。

篠原：具体的にどんなところで発揮されたと思いますか。

渕上：与野党を超えて。県会議員の果たす役割も大きいですよ。だけど、知事が自分のことでない福岡県全体の発展を考える。その場合にどこに重点をおくかと言ったら、福岡を北九州、筑豊、福岡、久留米と4つに分けたとしたら、落ち込んでいるのは、筑豊、北九州

のところでしたから、ここにどう力を入れるかとか。その代わりそこに不正があれば、きちんと対応して行く。バランス感覚というの、少し違うなあ。もともと喋りもそういう喋りだったからですね。

篠原：喋りは上手いのですか。

淵上：あまり上手いとは言えないですけど、優しかった。意外と、骨、度胸、そんな感じですね。

篠原：最後ですが、奥田県政には評価すべき点もあると思いますが、一方で課題もあったかと思えます。どういう課題があったと思えますか。

淵上：県政を運営して行くにあたって、少数与党だったので、自分がやりたいと思っていることができなかつたところがあったと思えますね。そこが少数与党の悲しいところだったのではないかと。やりたいけど、できない。だけど、妥協もせざるを得ない。妥協というのは、往往にして政権がひっくり返る時もあるじゃないですか。そういう難しさはあったと思えますね。

篠原：先生が考えている、奥田がやりたかったこととは、どんなものでしょうか。

淵上：筑豊・北九州など産炭地の復興・県南振興・筑後川流域・県内の文化回廊構想などをやりたかったのではないかなと思えますね。一番、遅れているところだと思えますね。今でこそ、福岡、北九州、筑豊県南の道路がきちんと出来てますが、自民党は、奥田知事の時は、「この道路は絶対作らせない」とか。大きな声で言ってたかは分かりませんが。今のように筑豊にバイパス道路がきちんとできれば、もう少し早く回復できていたのではないかなと思えますね。革新の間は絶対作らせないみたいな動きが、自民党側にあったようですから。今は、筑豊と福岡が近くなってきてるし、北九州と筑豊も近くなってきてるし、そういう意味ではやりたくてもできなかったことのひとつが、今出来ている。そこが政治の取引だったのではないかと。

それと、農業をどうするかというのは、ずっと思いがあったような気がします。農業と漁業のところ。

篠原：農業というのは、農業をどうしたかったということですか。

淵上：これから先の農業をどうするか、県産品運動に、どう参加させるか。農業、漁業関係。ある程度、有明海の話も当時の県会議員の話の聞けば、かなり有明海の問題は取り上げてきたと思います。農業、漁業を含めて、バランスを考えていたのではないかと。だから、奥田県政で、もう少し自由にさせたら、もう少し面白い県になっていたかも、もう少し福祉が豊かになっていたかもしれないと思えますけれど。県会議員の方達もその辺りはわかまえていた感じですね。

篠原：とりあえず、本日はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

（第1回聞き取り 終）

第2回（2019年11月2日）

—西鉄労組と福岡県知事の関係について—

篠原：今日は西鉄労組の話からお訊きしたいと思っております。まず、西鉄労組が、戦後の福岡県知事（杉本勝次、土屋香鹿、鶴崎多一、亀井光、奥田八二）とどのような関係にあったのかを、お訊きしたいと思います。戦後の福岡県の知事は、基本的に、保守と革新が入れ替わるような形が続いてきました。まず、杉本知事についてどのような思い出がございますでしょうか。

淵上：杉本さんのときは、まだ、そんな運動にあまり関わってませんでしたから、名前だけは、革新県政っていうことで知っておりました。

篠原：確認ですが、淵上先生は、杉本知事は革新という認識ですか。

淵上：杉本さんは、そうではなかったですかね。

森山英明（以下、森山と略）：杉本さん、あの人は知事選に出るときは社会党で。

淵上：社会党だったはずですよ。

篠原：私たちが調べたところ、杉本氏は、確かに社会党の国会議員という経歴を持っていますが、その後、自民党に接近しています。

淵上：それは県政上あったかもしれませんね。

篠原：だんだんと自民党に近づいています。

淵上：変わったかもしれません、最後。

森山：久留米市長になるときは、自民党推薦だった。

淵上：なので、あまりそういう認識はなかった。だけど、おぼろげながら革新っていうのはありましたね。

篠原：淵上先生が西鉄に入社されるのが1957年で、杉本知事が終わるのが1955年なので、入社前です。

淵上：ですけども、そういう記憶はありましたね。

篠原：まだ運動には？

淵上：関係ありません。

篠原：次に、保守の土屋香鹿知事になります。先生はもうご活躍中になるかと思いますが、どのようなご記憶がございますでしょうか。

淵上：土屋さんは、汚職で追放運動か何かやったときの名前ぐらいしか覚えてないですね。

森山：リコール運動やったんですよ。

淵上：リコール問題やったですかね。

篠原：先生は、選挙運動などの活動は？

淵上：あまり、そのころは関わってなかったと思います。

篠原：まだお若いですよ。

山田良介（以下、山田と略）：そうですね、入って、ちょうど20歳になるかなられるかぐらいですね。

淵上：そういうときですから、はい。その組合の宣伝で、名前は知っていましたが、あまり具体的な運動には関わっておりません。

篠原：どのようなイメージを持っておられたでしょうか。

淵上：何か、リコール運動だから、悪い人だなぐらいな認識だったでしょうね。

篠原：そうですね。汚職で問題になった。

淵上：恐らくそうだと思います。

篠原：土屋香鹿知事は2期目も出馬しています。そして、対立候補が鶴崎です。

淵上：鶴崎さん。

篠原：この知事選で勝利したのは、もちろん鶴崎ですけれども。

淵上：鶴崎さんでしたね。

篠原：このときの選挙戦について、どのようなことがあったのでしょうか。

淵上：鶴崎さんの選挙はそんなに……これもまたそんなに、青年部におったでしょうから、組合の指示で動員ぐらいには行ったぐらいなことではないでしょうかね。支部の執行委員しよったかな。

山田：昭和36年に中央委員という形で、執行委員はその後ですね。

淵上：その後です。

山田：39年ですね。

淵上：はい。だから、そのころですから、社会党、県評、西鉄労働組合で、推薦を決めた候補を、組合員にお願いするぐらいなことじゃないでしょうかね。

篠原：鶴崎県政は2期続き、その後、亀井光が当選します。

淵上：負ける。

篠原：このときの選挙についてはどのような関わり方をされたのでしょうか。

淵上：このときは、ちょうど恐らく、県議選も、地方統一自治体選挙のある年ではなかったですかね。林県議の選挙事務所で負けを聞いた。

森山：知事選は全部統一選挙ですね。

淵上：統一選挙やったですね。

淵上：知事と一緒にいたから、恐らく、私は林県議の選挙運動をやったと思います。だから、併せて知事は鶴崎、県議は林っていう感じの運動ですね。

篠原：西鉄労組の50年史には、「とりわけ全国唯一の社会党知事（鶴崎氏）の三選を守り得なかったことは、これを支持する労組として十分な自己批判が必要となった」という総括をしています（『西鉄労組50年史』、265頁）。

淵上：そうですね。非常に僅差。

森山：4,800ぐらい。

淵上：負けたときでしたから、地団駄踏んで悔しがったときでした。まさかあのとき、負けるとは思ってなかった選挙だったと思います。だから僅差で負けた。ちょうど、林さんの選挙事務所に私はいましたんで、残念に思ったことはあります。

篠原：敗因はどのようなもの思っておられますでしょうか。

淵上：このころから、企業選挙が始まるのかな。「革新に渡すな」、何かそんな音頭ではなかったですかね。

篠原：当時は、北九州市長選挙でも負けております。

淵上：はい、2人負け。

篠原：北九州市の吉田法晴さんも、このときに負けました。

淵上：そのとき、吉田法清さん負けるのは、ちょうど「糞尿譚」のあったころかな、じゃあ。

森山：八幡製鐵はIMF・JC運動を始める。

淵上：ああ。

森山：始めて、生産性運動を宮田義二氏と宮田早苗氏の宮田兄弟が。

淵上：そのころじわっと労働組合の中にも、そういう話がちらほら出てきてたころですもんね。生産性運動がね。右か左かとかというのは、そうか、生産性運動が始まるころだったんですかね。だから、大きな変わり目ではありましたが、運動の変わり目。

篠原：鶴崎県政について伺いたいのですが、淵上先生は鶴崎県政をどのようにみておられたのでしょうか。

淵上：そんなに意識はなかったですね。革新県政っていうことで、「われわれの知事だ」ぐらいな印象だったと思いますね。

山田：そうなるとうっかり、選挙運動では、当然なんでしょうけど、西鉄を母体とする林武彦氏の運動は力を入れるのでしょうか。

淵上：入れる。そして、ついでに選挙もするっていう感じ。あまり、政治教育をそういう面で受けたことはなかったですね。労働組合支持、社会党、イコール支持社会党、オーケーみたいな感じでしたから。

篠原：申し上げにくいのですが、鶴崎県政については、労働組合や革新県政の支持者に対して利益誘導し過ぎたと言いますか、優遇し過ぎて反感を集めてしまったという反省もあるようですが、そういう感想はございますか。

淵上：私たちの認識では、当時は、社会党知事だから、そういうことやっても当たり前みたいな感じでしたな。だから、それは恐らく、資本の側っていうか、経営側が考えた発想じゃなかったんでしょうかね。そこら辺はよく分かりませんね。

篠原：この鶴崎県政というのは、淵上先生からみると成功か失敗かという、どちらになりますでしょうか。

淵上：選挙は勝つか負けるかだから。勝てば成功、負ければ失敗。そんな発想ですよ。

篠原：次に、4期務めるのが亀井光知事ですが、言うまでもなく保守側です。この亀井県政

と西鉄労組は、どういう関係にあったのでしょうか。

淵上：組合と亀井県政っていうのだと、考えれば何も関係なかったような関係ですかね。関係ってどういうことを指すのか、ちょっとよく……。

篠原：敵対的な関係であったのか。それとも、距離を取っていただけなのか。

淵上：憎い相手ではあったでしょうけど、敵対まで、そんな、そういう感情より、労働組合として革新知事をつくろうというのが先で、「亀井憎し、新しい我が方の知事をつくろう」という感じぐらいじゃなかったですかね。そんな感じですよ、組合は。

山田：逆に言えば、亀井県政だからといって、その組合運動に対して、直接的な何らかの悪い影響というのは、もちろんないわけですよ。何かありますか。

淵上：そうですね。労働組合と行政っていうのは、官公労の組合と違って、民間の場合はちょっと一歩置くからですね。だから、逆に言うと行政の側より、西鉄の会社との関係のほう非常に強く、積極的に活動するのであって、行政のほうはあまり関係なかったですね。

山田：やっぱり直接的な問題ですよ。

淵上：だから、そうすると、組合が支持してる社会党、社会党が推す候補をわれわれが運動するっていう構図だったですね。

篠原：この亀井が4選したということは、西鉄労組が推している候補が選挙で4回負けるということでもあります。負けが16年続く中で、西鉄労組には何か変化が起こるものなのでしょうか。

淵上：県政と直接、西鉄労組という関わりはあまりなかったですね。ですから、県との関わりは林武彦という県議を通して、問題を解決していくっていうことでしたから、直接、県政がどうだこうだということにはならなかったですね。

篠原：私たちが調べたところ、亀井県政16年の間に、県職員の間では亀井知事に対する不満が少しずつたまってきて、それが奥田県政につながるのですが、西鉄労組側からみてそう感じたことはありますか。

淵上：ストレートにはないと思います。それは、西鉄が県評に加盟してる、地区労に加盟してる。だから、県評と自治労との関係。自治労と県評との関係が、県との関係。それが情報としては流れてくることはありましたから。そういう県政のおごり高ぶりの政治っていうのは分かってはおったですね。これに対して、知事選で対抗していこう、党が支持する候補者を応援していくっていう感じですね。

山田：そうなりますと、西鉄労組として、一番力を入れてた選挙っていうのは、もちろん、林武彦氏の選挙については出身母体だからそうでしょうけど。一般的には、例えば、国政がありますよね。国政があつて、知事選があつて、あるいは県議会選だとか、市議会選ありますけど、どこら辺が一番頑張ろうみたいな感じなのか。

淵上：一番頑張ったのは、やっぱり県だったと思いますね。

山田：それは、出身の？

淵上：林武彦県議・組織内候補を中心にして。その次は、私鉄総連組織内候補。

山田：代表ですね。

淵上：うん、代表を推す参議院選。

山田：参院選ですね。

淵上：衆参の私鉄組織内候補。

山田：そう考えると、結局、組織の代表を出すっていうところに関しては、もちろん力を入れるけど、それ以外に関しては革新だから……。

淵上：支持協力。

山田：支持協力なんですね。

森山：でも、当時は一般論として組織が選挙協力もしたんだと思います。

淵上：恐らく、そういうことまではやってたでしょうけど、私は、そういうところまではまだ行ってなかった。

山田：気持ちの問題ですね。

淵上：ええ、そうですね。それで、党が推薦、公認決めれば全部頑張ると。また、個別選対が西鉄の組合に依頼され、組合が決定すれば、当選に向けて頑張るということですね。だから、恐らく、50年史の中で載ってるのも、推薦をした人たちを中心に書いてると思います。

—西鉄労組と総評、県評の関係について—

篠原：西鉄の50年史の中にも、福岡県評の存在が書かれています。基本的なことで申し訳ないのですが、西鉄労組と福岡県評の関係というのは、どういうものだったのでしょうか。

淵上：県評加盟組合だから、県評の出す方針に従って、組合も県評と一緒に運動してたっていうのが実態じゃないですかね。

篠原：話が戻るのですが、50年史の中には、全国組織としての総評があるなかでも、西鉄労組が総評に従ってないときがありました。西鉄労組が総評と県評を選んでいるようにみえるところがあったのですが。

淵上：従ってない、そういうところありますか。

篠原：1950年代です。

森山：60年安保の前。

淵上：10年前だね。そうですね。私鉄総連をつくっていくときにも、加盟していった西鉄労組。総評をつくるのにも私鉄総連は関わってきてるはずで、5単産共闘から始まるんで、そういうことを考えると、総評、私鉄総連、県評、西鉄というのは常に一体だったと思うね。

篠原：1956年の衆議院選挙の補選の際に、福岡県評が社会党候補を推薦しないと決定したのを受けて、西鉄労組も社会党に反省を促すために、社会党公認候補を推薦しないという

こと決めた50年史にはありますが（『西鉄労組50年史』、261頁）、このときの記憶はありますか。

淵上：そのころは、西鉄労組の中における、恐らく左右の対立と言うか、また、党に対して、組合は党の下請機関ではないぞ、労働運動全体にそういう流れがあったのではなかったですかね。一時期、そういう風潮があったですね。

篠原：ありましたか。

淵上：ありました。

篠原：その後、西鉄労組は政治局を発足させています。

山田：1957年。

淵上：そのとき、何でだったかな。

篠原：革新の左右対立があったと思うのですが、西鉄労組はどちら側だったのでしょうか。

淵上：右か左か右寄りか。

篠原：なぜ右なのでしょう。

淵上：ちょっと余談になりますけど、西鉄の会社を言わして、「わが労働組合は総評とは違うもん」と。

篠原：総評とは違う。

淵上：うん。さりとて、同盟まではいかんけれどもという印象持った。そんな話をちょっと聞いたことあるんだね。

山田：それは、その総評が掲げる政治的なものには、あまりコミットはしないのでしょうか。

淵上：それはないけど、同盟的と言うより、企業内組合の意識が強いのでは……。

山田：同盟ほどでもない？

淵上：ないという。さりとて、組織ですから、同盟・民社支持する人もいたので、そのような感じの話をされていた人がいたんですね。

山田：それは西鉄労組なのか、それとも私鉄総連？

淵上：それは西鉄労組ですね。

山田：私鉄総連じゃなくて、西鉄労組の。

淵上：はい。だから恐らく、私鉄の中も、右、左の論争は常にあるからですね、そういうのが派閥的にはちょっと強かったのかもしれないね。

山田：そうなるとですよ、私鉄総連の中でも、西鉄労組は右っていうふうな理解でしょうか。

淵上：私鉄はちょっと複雑。右、左っていうことで、あまり考えたことはなかったですね。

ただ、私鉄総連の方針は忠実に守ろう。運動上のことで、酒を飲んだときぐらいには、話としてはそういう、右、左のことはあったような感じはしますね。

篠原：当時、福岡県評は左右のどちらになるんですか。

淵上：あまり考えたことなかったですね、右、左。

森山：一本線ですよ。左一本線。多分、当時からずーっと。

篠原：西鉄労組は右でしょうか。

森山：時々違うと聞いていました。

山田：県評の中において、比較的？

淵上：右のほう。

山田：右のほう、かといって、さっきおっしゃったように、同盟ほどではない。

淵上：ではないけど。

森山：県評自体が官公労がかなり強い。

山田：強いですね。

森山：共産党は外れておったけど、あれですもんね、大体、社会党という。

淵上：だから、官公労と民間との間に西鉄がいるという印象ですね。

篠原：当時、西鉄労組で有力な方というのはどなたになりますか。

淵上：林さんと並ぶっていうのは、佐々木栄。

篠原：彼も西鉄労組の。

淵上：そうですね。西鉄労組委員長もされましたし、林さんと並ぶ。私鉄九州地連委員長。

この人は右だったですね。右、左っていうふうには分けてはいかんかもしれんけども、左右で言えば、左が林、右が佐々木みたいな感じだな。

山田：その西鉄の中で？

淵上：うん。例えばよ。左とか右とかっていうふうに言うなら、大体そんな。

森山：テーマ、テーマで、右、左、変わったりするのですかね。

淵上：うん。右、左、そんな感じ。仲はよかったですよ。そんな対立するほどのことはないけど。

篠原：西鉄労組の路線は、いつまで維持されている感じでしょうか。

淵上：ずっとというわけではないでしょうけれども。当時、どこの組合でもある、主流、反主流みたいな感じ。だから、林、佐々木は、主流、反主流ではないもんな。ごちゃ混ぜみたいな。

篠原：ただ、そんなに激しい対立は。

淵上：激しい対立はなかったね。

—西鉄労組と政党の関係について—

篠原：次に、西鉄労組と政党との関係をお伺いしたいと思います。基本的には西鉄労組は社会党とつながりが強かったと思います。

淵上：そうですね。

篠原：同じ革新の共産党との関係は、時代によって変わってくると思うのですが、淵上先生はどのように受け止めておられるでしょうか。

淵上：私は西鉄の方針どおり、社会党やったですね。

篠原：共産党とは、どういう関係だったんでしょうか。

淵上：共産党は少数派だったので、そんなに……。

山田：組合員の中の共産党支持者っていうのは？

淵上：おりましたね。

山田：いるけども、力はなかったっていうことですか。

淵上：左といわれてるグループの中で活動はしていました。

森山：そうですか。

淵上：西鉄労組の中における共産党の関わりは、やっぱ労働運動の事件、到津事件っていうのがあったはずですよ。そのころは、左ページをやっていく一つの大きな。それ以来、そんなに共産党は勢力を伸ばしていく、どの労働組合の中にもおられるように、その程度の人はおりましたね。

篠原：少数派？

淵上：少数派で。だからといって、それが影響するようなことまでには、あまりなかった感じかな。

篠原：激しい対立というわけではないということでしょうか。

淵上：なかったですね。やっぱり、主流社会党だったんで。結局、社会党が、強いところは共産党少数で、社会党がちゃんとしておりさえすれば、共産党よりこちらのほうが主流だったんで、あまり問題にならなかったですね。

篠原：それは50年代からそうだったのでしょうか。

淵上：大体、ずっとそうですね。

篠原：次に、公明党は西鉄労組に影響することはありましたでしょうか。

淵上：ほとんどなかったと思います。おるにはおりましたけどね。

篠原：少数でしょうか。

淵上：ええ。少数でおるにはおった。だけど、公明党を名乗ってる人はいませんでした。私たちの時代は。

篠原：数的に言うと、共産党と比べてさらに少ない感じですか。

淵上：分からなかったですね。

森山：表には出てきませんでしたね。

淵上：隠れてた感じ。隠れてたっていうかオープンにしていなかったですね、公明党。公明党は話題になるっていうのは、なかったと思います。

森山：大体、先生、公明党が福岡県内の組織の中でね、労働組合の組織の中で、問題になったことはないと思いますよ、もともと。むしろ、労働組合内部での問題よりも、選挙のときだけですよ、あるのは。公明党の人ね、今でもですよ、県職員の中にも公明の人が出てきて選挙運動してますから。組織、自治労推薦の候補の選挙運動してる。もちろん、仕方の、関わり方は違いますよ。そういうのじゃ、隠してあんまり表面出てこない。多分

西鉄もそうじゃないですかね。

瀧上：そう。恐らく、創価学会っていうこと自体もそんなにオープンにしないし、公明党になってなおさらしなかったですね。

篠原：次に、民社党は西鉄労組にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

瀧上：ここは、西鉄の労働組合の体質が先ほど言ったような感じだったので、ほんとはこれも、政治闘争で分かれ、民社党が直接入ってくることはなかったと思います。あんまりそういう、一部の人には、そういう働き掛けぐらひはあったかもしれませんが。

全体として、私鉄総連で決定すれば、西鉄も決定を守っていましたから、あまり問題にならなかった。一部の人にはあったと思いますが、組織問題としてはね。恐らくいろんなアプローチがあったでしょうから、人を通して、当時のことですから。だけど、西鉄の中にそんな、さっき言ったような感じでしたから、あまり入ってきてなかったんじゃないですかね。

篠原：年史の中には、民社党のことはあまり書かれておりません。

瀧上：書かれてないはずですよ。

篠原：しかし、西鉄労組は民社党にとっては、ある意味、魅力的な組織のような気がするのですが。

瀧上：そうですね。恐らく、先ほど言ったような、会社の評価みたいなのは一般的にあったかもしれませんね。

篠原：しかし、瀧上先生は民社党の影響はあんまりなかったとお感じになっていたと。

瀧上：それは関係なかった。考えられるとすればですね、労働運動の中で、官公労と民間、民間の中にあって、政府が認可していく運賃、料金。だから、九州電力、西鉄、西部ガス、当時国鉄、電電公社、専売公社各組合と、そういう何かの交わりがあったからですね。恐らく、そういう印象を持たれるっていうのはあるかもしれない。そのときに、電力は民社ですから。ガスは中立でしょ。

森山：あとね、八幡製鐵。

瀧上：八幡。

森山：製鐵の宮田早苗氏のところが、強烈な民社媒体ですよ。

瀧上：あそこは民社だったですね。私が補欠選挙に出るときは、八幡製鐵、推薦してくれたんです。

森山：そうですね。本当。だからシンパシーはあったんです。西鉄のほうに対するシンパシーがあったということでしょうね。

瀧上：八幡製鐵の大会に、私、挨拶行ったことある。そのときに、黒いネズミか白いネズミか知らないけれども、と言って挨拶したような気がするんだよな。

山田：補選は89年だから、もう連合が。

瀧上：ちょうど発足したころ。

淵上：そのときにですね、八幡製鐵グループは総評でしたから。そのときにですね、連合をつくるときに、鉄鋼の代表、私、私鉄の代表で出て、九州ブロックをつくろうといったときに、九州ブロック代表に強烈に推したんだよな。そういうのがあってね。各県連合の人事をめぐって、事務局長を電力が握れば議長はNTT、NTTが議長を握れば、電力が事務局長みたいな、大まかなこの動きが、連合つくってくときに、九州ブロックをつくってくときにあったんですよ。そのときにね、鉄鋼労連総評ですから、九州の代表をやっぱり、鉄鋼がするべきだっていうのを強力に推した1人が私。で、衛藤辨一郎かな。衛藤辨一郎が連合の九州ブロックの初代代表になるはずですよ。なるんですよ。そういうのがありましてね。だから推薦してくれたのかもしれない。

—林武彦氏について—

篠原：次に、林武彦氏について、お訊きたいと思っています。先生方は林武彦氏のことをよくご存じだと思うのですが、私たちは林武彦氏の名前しか知りません。同時に、年史を見ても、林武彦氏の名前が出てきますが、どういう人であったのかが書かれていないので、基本的なところからお訊きたいと思います。淵上先生が、最初に林武彦氏と会ったのはいつごろでしょうか。

淵上：林武彦さんが、一番最初に立候補するのが昭和34年。

篠原：そうです。

淵上：34年のときは、林武彦のポスターをバス停に貼って回ったことがあります。そのときに、「ああ、この人が県会議員に出るんだ」っちゅうて、私は車掌しながらバケツを持って、林武彦のポスターをバス停にずーっと貼っていったんだよ。発車オーライって言いながら。

篠原：当時、林武彦氏は32歳。

淵上：そう、32歳。

篠原：初めて、県会議員に出る。

淵上：選挙に出るときに初めて名前を知った。本人がどういう人なのか全然知らないで、ただ「ポスターを貼ってこい」と言われて、「はい、分かりました」と言って、ポスター貼りに行っただけの話。

森山：あれは福岡市全体でしたね、当時は。市全体。東区とかなんかないから。

淵上：市全体、福岡市全体が選挙区。まだ区制がないころです。

篠原：50年史を見ますと、このころに西鉄労組は、推薦する人を選挙で選ぶようになったと書いてあります。「それまで候補者を、組合員の申し出によりほぼ無条件に推薦候補としていたことからくる弊害を排除し、『出たい人より、出したい人』を推薦候補とするため、候補者別の居住区組合員の無記名投票を実施し、その上で推薦候補を決める」と書いてあります(『西鉄労組50年史』、262頁)。そこで、林武彦氏が推薦になったのではない

かと思うのですけれども。

渕上：そのころ、県会議員 1 人しかいなかったんで、推薦も何もなかったと思います。よく分かりません、私は、そのころは。

篠原：年史によりますと、県会議員に 3 人の候補者を推薦して、当選したのが林武彦氏だけです。

渕上：他にも 2 人おったんかな、落選したんですか、その 2 人は。

篠原：2 人は福岡と北九州で落選しています。

渕上：福岡と北九州で。

篠原：そうですね、河波虎之助。

渕上：河波虎之助。

篠原：あとは、竹田明義さん。

渕上：そうそう、北九州。

篠原：北九州で行橋ですね。

渕上：はい。

篠原：ここで当選したのが林武彦さんでしょうか。

渕上：林武彦だけ。

篠原：林武彦氏とその選挙運動の際に、初めてお会いになった。

渕上：選挙で会うっていうか、知っただけの話ですね。

篠原：個人的な関係を持ち始めるのは、いつぐらいになりますでしょうか。

渕上：私は、支部の役員になってからぐらいでしょうね。

山田：支部の役員というのは。

渕上：昭和 38 年。

山田：執行委員だったからですね。

渕上：福岡地区支部執行委員になって、選挙運動するようになってからぐらいですね。それまでは遠い人。

篠原：西鉄労組内では、会ったけれども。

渕上：会ったけど、一番最初は入社してすぐですから、話をしたことはありません。

篠原：林武彦氏は、西鉄内ではどういう仕事をされているのでしょうか。

渕上：私が知ったときは、もう副委員長をされてたですね。その当時のこと、私よく知りません。恐らく、今のような機構、組織機構をつくり上げていく段階じゃなかったんかな。まだ戦後間もないころ、30 年ごろようやく西鉄の組合も落ち着いていく時代でしょうから。そのころ組織整備をして、林さんが出ていったんじゃないですかね、県会議員に。

森山：林さんは労働組合から推薦されて、アメリカに留学するでしょ。フルブライト基金で。

渕上：招待を受けて。

森山：招待を受けて行ったんですよね、アメリカへ、ずっと。

淵上：行くんです。

森山：何カ月かけてアメリカを見てきます。。

淵上：そうなんですね。

森山：そのときに、戦後ね、大屋麗之助とって後に社長になる方ですが、彼と林さんとの盟友だったっていうんですよ。「林さん、あんた、労働組合しなさい」、「私は会社をやるから」というふうに分けたと、確か、大屋さんから僕は聞いたと思うんだけどね。

淵上：そしたらですね、そのころ、会社の幹部、将来幹部になった人たちは、ほとんど労働運動の経験人ですよ、戦後の混乱期に。そして、重役になっていってますね。だから、そういう話あったかもしれません。

篠原：そして林武彦氏は昭和34年の初当選以来、ずっと福岡県議員でいらっしやいますよね。

淵上：議員、はい。社会党。

篠原：なぜずっと県議員なのでしょう。

淵上：なぜ県議員？

篠原：例えば、国会議員への流れがあるかと思うのですが。

淵上：ずっと県議員ですね。

山田：国政に行くというのは？

淵上：行こうかっていうのは、当時、福岡、定数1区5人。社会党2、檜崎弥之助、河野正。福岡市の社会党は、とりわけ解放同盟との関係が、松本治一郎さんとの関係が非常に強かったのも、恐らくその中から、衆議院に檜崎弥之助さん解放同盟から出てたんで、そういう関係もあったんじゃないでしょうかね。

篠原：いるから出られないということでしょうか。

淵上：だから、あんまり国会を目指すなんていうことは、聞いたことなかったですね。

山田：西鉄労組からしてみても、別に、国会議員とかっていう声もなかった？

淵上：国会議員の必要より、やっぱり西鉄の場合は県下一円でしたから、県議会のほうが大事。政治的には県議会のほうがいい、だったでしょうね。運賃問題だとかっていうのは、許認可制の時代は、国のほうも大事でしたけども。それ以上に、やっぱり福岡県の中の交通、そちらの対策のほうが必要だったでしょうね。

篠原：林武彦氏の専門分野は、交通政策ですか。

淵上：デパートやったな。

森山：何もかも、何もかもして。

淵上：何もかも。

森山：不思議な人ですよ。

淵上：不思議な、それこそ、どんなふう……。とにかくですね、身内には厳しく、外にはにこやかに。身内には厳しく。点検と確認がやかましい人でしたね。

篠原：具体的にはどういうことでしょうか。

渕上：自分が命令した仕事は必ず点検をする。命じた仕事は必ず報告をさせる。アイデアマン的な、アイデアマンでもあったでしょうね。何事もちょっと先が好きな人だった。

森山：酒好き？ 飲んでおられましたか？

渕上：酒はあんまり飲まなかったですね。飲んで、酒飲もうかなんて言われたことないもんな。

森山：よう中洲にはおられたけど、自分あんまり飲んでなかった。

渕上：そういう人との付き合いはよくやったでしょうけど、あまり酔っぱらうほど飲んだことはなかったみたい。見たことなかったですね。

篠原：今までのお話を訊いていると、とても有能な政治家のように思うのですが。

渕上：そうですね。

篠原：やはり相当有能なのでしょうか。

渕上：やっぱりそうだったと思います。アイデアマンだったと思いますね。

篠原：どんなアイデアを出されたのですか。

渕上：結局、にぎやかか……にぎやかかって言ったらいかんのかな。派手なことがちょっと好きな人で、だからいろんなことを考えるんですよね。いろんなことを考える。奥田県政との関わりは知りませんが。組合のときも、ちょうちん行列が好きな人だったんで、にぎやかな……。意外と優しいようで、几帳面で、厳しい人だったっていう印象しかないんだよね、私は選挙運動を通じて。

篠原：社会党県議団の中では、だんだんと中心的な存在になっていったと。

渕上：そうですね。

篠原：自民党県議団とか自民党から見ても、一目を置かれるような存在だったのですか。

渕上：特に、やっぱり奥田革新県政になってからのほうが、そういうのが強くなったんじゃないすかな。そこら辺……。

森山：その前から、前からですよ。

渕上：前からだったか。

森山：亀井さんのときから。

渕上：やっぱり、亀井さんのときもそうだったかな。何かそんな、何かユニークな。

森山：亀井知事も自民党議員の話よりも林さんの話はよく聞くということを耳にしましたね。それは、その後どうやって、あの人は奥田さんとの関係で、コペルニクス的転換をやったかというのはあるんですけど。

渕上：西鉄労組の中で、そんな、こっち向こうとかってというのはあんまり聞かなかったですね。

篠原：これだけ力のある政治家だと、批判する人や反対する人もいると思いますが、そういう方はおられましたか。

淵上：あんまり聞かなかったですね。というよりそんなに……。とにかく選挙になれば、一番で当選しなきゃならないっちゃうのが最大の目標で、常に。だから福岡全県のときもトップで、東区になってもトップ。しかも、できれば全国で得票数の多い県会議員になりたいっていう夢やら持ってた。

山田：それは、労働組合からしてみたときに、林県議に対して、具体的には何を期待してたんですか。さっき、県議のほうが、西鉄からすると大事だっておっしゃってましたけど。

淵上：やっぱり福岡県下における労働組合として、当時、どうですかね、労働組合として社会党を支持推薦し、当選させることが、政治活動の第一義的な問題でしたから。やっぱり、そのことに全力を常に挙げたっていうのが労働組合だと思いますね。

そして、その後、政策問題っていうのが出てくるのは、モータリゼーションが出てきて、公共交通が時代とともに衰退をしていくときに、政策問題出てきたわけですけども、それまでっていうのはあんまり。逆に言うと、路線をどうやって増やすとか、どこに鉄道をどう敷くとかかっていう問題のときの役割を果たしてくれたほうが大きかったかもしれないね。

山田：そう考えると、西鉄という企業体にとってもメリットがある？

淵上：それはあったと思います。

山田：県議としてのキャリアがまだないときには、組合の要望を聞かざるを得ないでしょうけど、キャリアを重ねていくとそうじゃないようになる。そういう局面とかってありましたか。

淵上：ありますね。

山田：何か覚えていらっしゃるエピソードとかありますか。

淵上：議員ちゅうのは、そういう性格持ちますな。民間の場合は。やっぱり企業はどうなったかっていうことになると、法律に従ってこう動いてる。だから、西鉄という企業からすると、あまり表向きに政治向き出れない。というのは、何でかっていうと、運賃が許認可運賃だから、そんなに、今のように自由にやれるときではないから、やっぱり縛られたですね、社会的に。だから、そういうときにどうするかっていう意味では役立ったでしょうね、林さんはね。

だから、会社がやれないようなところは、「ちょっと、林君に頼むか」みたいなところは。なかなか、さっといかないやつ。だから、運賃制度、許認可制度、制約からくる政治活動みたいなところは、役割としてあったでしょうね。だから、半分以上は会社の仕事したかもしれませんが、会社からの要望が多かったかもしれません。

山田：企業別組合の性格からくるのでしょうけど、企業の利益が上がるのが、結果的にその組合員の利益につながるっていう発想はやっぱり。

淵上：それはあったでしょう。あったでしょうね。

山田：そうなる、今の資本主義のシステムみたいなものに問題があるから、それを変えよ

うといった政治闘争とかってというのは、西鉄労組ってというのは、左、右でいえば右のほうだっておっしゃってましたが、弱かったっていう理解でいいんですかね。

渚上：だから、ちょうど真ん中。総評の中で官公労と民間の真ん中にぐらいなところに位置付けられてたんじゃないですかね。

山田：運賃自体が許認可制であって、半分公的な企業の性格からくるんですかね。

渚上：ええ。だから、産業別統一闘争やって、中央で解決をしていく、そのときに中労委が絡んでくる。そうすると、世の中的には労使で決めたんじゃないなくて、中労委が出したんですと。だから、そのことがやっぱり運賃に跳ね返ってきてたからですね。それはあったでしょうね、そういうのは。だから、西鉄労組というのは、意外と微妙なところにおったことは事実ですね。

—奥田県政と林武彦氏の関係について—

篠原：奥田県政の話に進めさせていただくと、奥田日記の中には林武彦氏のことがたくさん書かれています。渚上先生からみて、奥田と林武彦の関係はどのようなものだったとみておられますか。

渚上：結局、県政は少数与党ですから、大胆に野党と妥協せざるをえない。妥協するということは、与党にとっては傷を負うわけだから、そこのところをやっぴりかばった。そこのところの傷をどう浅くするかが、林さんの役割だったろうと思いますね。

だから、表向きのちゃんちゃんばらばらは、派手にいろいろやられた。奥田さんのところでやられても、裏ではそういうところを自民党に対して根回す役割。だから与党の代表者しながら、国でいったら国対的な役割。どうまとめるかと、野党との間を。そこが中心だったので、奥田さんという学者から知事になってくる、政治経験が少ないとき。だから、しょっちゅう、初めのうちはぎくしゃくしてたと思いますけど、奥田さんもだんだん慣れて。日記読まれて分かるように、慣れてくるでしょうから、そういうところの役割があったんじゃないでしょうかね。そして、県議団長としてまとめていくっていう。

篠原：その際に、林武彦氏の自民党側のカウンターパートはどなたになるのでしょうか。

渚上：やっぱ、自民党の有力者だったと思いますね。恐らく、代表幹事長。特段、誰と誰とか、やっぱり党の役職だったと思いますね、それは。

森山：浜中ですよ、浜中茂足。

渚上：浜中さん、筑豊の。

森山：いやいや、遠賀の。

渚上：遠賀の。浜中さんな、そうかもしれません。

森山：実力的には、早麻（清蔵）さんも自民党としては有力な議員だったのでしょうか。

渚上：その関係でしょう。

森山：それが中心ですね。

淵上：恐らく、亀井県政のときからの流れじゃないでしょうかね。そのときの自民党と。恐らく県評が激しくやるんで、県評との間の役割とかね。

森山：そうですね。

淵上：ただ単に、県政の中だけでなく、そういう有力な社民党、社会党の支持団体である県評と県との関係の役割だとかっていうのを、表舞台だけでなくやっていく。だから、そういう意味では、必要なポジションに常におったってということやないでしょうかね。与党の窓口みたいにして問題解決していく。

山田：前、県評事務局長の岩崎隆次郎さんから話伺ったときに、これは岩崎隆次郎さんの見立てなんですけど、結局、ある意味、最初から少数与党なので、さっきおっしゃるように、常に野党との間の関係をどう処理して、まさに国での国対的な。そういった意味では、林武彦氏がいなければ奥田県政は動かなかった。

逆に言えば、結局、そういう役割が故にだんだん、やっぱ林武彦氏が発言力を増してきて、3期目になってくると、ある意味、奥田県政なのか、あるいは林県政なのか、そういうようなことをおっしゃってたんですけど。淵上先生から見たときに、今みたいな意見はどうです。

淵上：だんだん、そういう感じになってくるでしょうね。相手も成長してくるし、こっちも成長してくるし、大体話は、もめればここに持っていけば何とかなるっていうのが、ずっと何回か積み上げてくると、そういう理解になってくると思いますね。そうすると、手数、場数を踏んで、手っ取り早いところに話つけていくっていうのはあるんじゃないですかね。ただ、ルールは守ったと思います。原則はね。

山田：ルールといいますと。

淵上：だからね、それは、社会党が揺れ動いていくときでも、分裂をしてゆくときなんか、それは、いろいろ言われたでしょうが、ずっと社会党員でしたからね。

森山：社民党にね。

淵上：社民党に。

森山：民主ができたときも社民党に残っとられたんですよ。

淵上：はい。だから、そういうときに、そういう動きはなかったからですね。だから、恐らく、意外と大胆に妥協するけど、原則はきちっと守ってくつていうところがあったから、林さんもやれたと思うんですよ。

原則と柔軟性と現実妥協。その原則がきちっとあった上に、どう柔軟に対応するかっていうのがあったんで、だんだんだんだん、言われるように、期を重ねるごとに従って、相手側も認めてきたでしょう。

森山：いや、それでも、奥田さんも林さんも似たようなこと言うんですよ。「左側の足はしっかりと地つけてね、右側の足は一生懸命かき混ぜる」って。ところが、どっかりと原則の左足は動かさんののに、現実には即して自由に右の動きが激しなると、そこが目立ち、評価

も右にとられがちになるのしょうけど。2人に共通してそうなんですよね。

渕上：うん。何か、そういうのがあったから、やれたんじゃないですか。

篠原：「原則」を守ってということの「原則」は何になりますか。

渕上：やっぱり、労働組合というところはきちっと守る。自分の支持基盤はいろいろ、それも、労働組合よりも業界からの支持のほうが多いような人だったけれども、結局、組合の支持ちゅうのは、きちっともらうように常にしてきたところですから。

それから、意外と地域住民の頼まれ事。これをやったら必ず報告をした人ですね、どんな小さなことでも。

篠原：要望を受けたら対応するということでしょうか。

渕上：受けたら。もう結果が駄目でとかよかったとか、何とか言わずに、そのときに。例えば、地域の要望であれば、「まず、あなた方がやるには、一人一人来ても弱いから、署名を取りなさい」と。署名を取ってきたら、「これをこう集めて、ここに持っていきなさい」とか。そういうのを具体的に指導しながら、物事をつくり上げていくようなところはちゃんと守ったんです、あの人は。だからですね、恐らく、林さんに物事を頼んだら、本人が回答するか、出来ないときは、必ず秘書が答えを持って行ったり、できても、できなくても、問題したらね。

篠原：有権者としては、信頼できる政治家になりますよね。

渕上：そういうことになる、うん。だから、できないものはできない、できるものはできるっていう答えがはっきり出してた人ですから。そういう、やっぱり政治家としての地域とのつながりのところってのは、きちっと守った。そういうようなこともあったし、原則的な、議員としては当たり前のことだけど、ちゃんとやってた。

その代わり、今言うように、頼まれれば、企業のことも、組合のこともやる。自民党か社会党か分からんぐらいなことと言われる評価。

山田：親分タイプでもないんですよ、かなり結構きちょうめんなんですよ。

渕上：あのね、「よし、任せとけ」みたいなことの親分ではなかったですね。「よし、おう、それ、俺がしてやろう」ってなんては言わなかったです。言わなかった。ちゃんと、こういうふうにしてた。だけど、頼まれ事の報告は必ずしていた。

山田：細かいとこにこだわるというよりは、かなり大胆に、柔軟に。

渕上：に見えるけど、裏側はものすごい緻密だったですね。と私はそう思います。あの、技術屋さんだもんな。もともと、出身は電気かな。

森山：戸畑か八幡の工業高校。

渕上：技術屋さんなんでね、やっぱそういう性格を持ちますかな。おおまん（いい加減）じゃないんですよ、だからおおまんじゃなくて、非常に緻密です。

篠原：少数与党である奥田県政の中で、自民党側との問題解決に取り組んだということですが、どういう手法で問題を解決するのでしょうか。国政レベルでは自民党が与党で、社会

党が少数野党なわけです。自民党から見れば、交渉の方法があると思います。しかし、逆の場合、小さいほうが大きい党に対して、どうしたら問題の解決が図れるのでしょうか。持っている資源が少ないのに。

淵上：資源は少ないですね。そうやって、相手がどっと持ってくるじゃないですか。限度があるじゃないですか、与党として少数でやれる限度は。だから奥田さんも、だんだんだんだん変わってきたと思うけども、やっぱりね、私が林さんを見る目は、相手のメンツをきちっと立てた。俗な言葉で言えば、恥かかせなかった。

奥田県政としてやれない、ぎりぎりの線はあるじゃないですか。これは守らないかんじじゃないですか。だけど、相手がむちゃくちゃ言ってきたとしても、答えはノーで出さないかんときがあるじゃないですか。そのときに、メンツをつぶしたり、相手の立場を損なうようなことをしなかったと、私は思いますね。そういう配慮をしたんじゃないかな。そうするとね、だんだんそれが信頼になってきて、相手が持ってきて、「まあ、林が言いよることなら」と、こうなるでしょう。恐らく、そんな関係までつくり上げたと思うな、僕は。

だからね、その原則、原則というより、森山さん、僕の言い方あれだけど、僕の見方は、相手の立場をちゃんと考えて。言うなら、ぶすつとここを刺さず、ここを刺して。致命傷を与えずに、相手もちゃんと、断るけれども、何か残してやっつくというようなね、そういうようなところではなかったでしょうかね。

篠原：非常に高度な政治的テクニックですね。

淵上：そりゃ、もちろん政治的ですよ。それに奥田さんの知恵が加わるわけだから、奥田さんがそんなに間違え訂正やらないですよ。林さんがいろいろ考えたにしても、理屈的に合うかどうかは、やっぱり奥田さん判断したでしょうから。

篠原：その奥田・林ラインというのは、常に盤石ないい関係だったのでしょうか。

淵上：それはどうかな。僕は中にいたわけじゃないから分かりませんが。

篠原：林武彦氏にとっては、奥田のためにこんなに頑張ってるのに、奥田に対して不満や不平が出てくることはないのでしょうか。

淵上：やっぱり、少数与党ってのをわきまえとったんでしょうね、これは。だから、今までの学者知事にな、奥田さんじゃなかったでしょうかね。奥田さんも意外とアイデアマンだから。いろんなアイデア出す、考える人やから。

篠原：奥田と林武彦は、知事になる前からつながりがあったのでしょうか。

森山：そう深い付き合いはなかったと思います。もともとは県議会のほうは、長谷部忠志という、県庁出身の県会議員がいたんですよ。これと林さんは結構、拮抗する力を持っていました。ところが、奥田知事が当選するときに、この長谷部さんが落選する。すると、必然的に林さんしかおらんようになった、議会对応ができるのは。そこが、幸か不幸かの世界ですよ。

篠原：そうすると、奥田県政期に林武彦氏は、自民党との交渉をほぼ担当していたことにな

ると思います。その期間中、西鉄労組にとって、林武彦氏はどういう存在に変わっていったのでしょうか。

淵上：林さん・奥田知事との関係は、社会問題研究所発足当時から親交があったと思います。ここは、非常に微妙になってくるのは、委員長が川崎照雄にかわってからですよ、恐らく。それは、総評から連合にかわる。で、恐らく、その委員長に対して誰がどういうサジェスション与えたかはよく分からないけれども、私に対して、その川崎委員長が、社民党を辞めて民主に入れと。でも、俺は入らんって言って大げんかになる。「その次の選挙を、淵上、見とけ」と、川崎委員長が言ったんです。だからですね、20年史なんか見られたら、選挙闘争の表現っていうのは非常に一般的。非常に一般的に書かれている。それは、そういう背景があったからだと思います。これは初めて、こういうところでオープンにする話ですけど、そういうのがありましてね。

篠原：それは50年史ではないでしょうか。

淵上：50年史か。恐らくですね、福岡県議選挙も一般的にしか書いていない。あのころ立て続けに出した、だから、そういう、裏側の背景がありましてね。だから当時、林武彦も西鉄労組にとっては、ちょっと邪魔になる存在になってきたんだな。だから、西鉄がもう1人立てますよ、北九州から。あのときに、林県議に対抗して、川崎委員長が新人を立候補させる。

森山：西鉄の出身の県会議員。

淵上：勝見保。これが1期だけかな。

篠原：林武彦と。

淵上：勝見は当選する。北九州。こっちが、福岡。

篠原：両方とも当選。

淵上：当選。北九州。川崎委員長の思い通りにコントロールする人物として。

森山：林さんにはコントロールが利かん。

淵上：コントロール利かんです。利かんっていうより、林県議が上ですよ。それはね。だからですね。県会の中で何があったんでしょうね、恐らく何かがあったんでしょうよ。

森山：だから、今おっしゃるように、林さんがあっちに動かん。社民党から動かんということが。

淵上：動かない、が邪魔になる。

森山：邪魔になって。

淵上：そうすると、俺の言うことを聞く県会議員をとというのが西鉄労組が動いて出してくる。

淵上はけんかする（笑）。

森山：要するに、88年、89年あたりの激動の中で変節する。変化して。

篠原：そうですね、年史は、新しい時代になればなるほど、表面的な記述になっています。

淵上：恐らくそうでしょうね。だから、西鉄の選挙運動に対する、私たちのやった苦労話が

あっていいはずですよ。ならない。新聞に書いてるみたいなことが、ぱーっと書いてるだけ。それでね、私も挨拶文、組織内議員ですから書きましたが、私自身としてはそういうふうにした。だから、そういう葛藤はあったんですよ。

（第2回聞き取り 終）

第3回（2020年1月27日）

—連合結成をめぐる私鉄総連、西鉄労組の動向について—

篠原：私たちは事前に、西鉄労組の年史を読んでおります。しかし、詳細まで把握できていないところがありますので、きょうは89年の連合結成のあたりからお伺いできればと思っております。

まず、最初に、先生がいわゆる労働戦線の統一というものを意識し始めたのはいつぐらいからだったのでしょうか。

瀧上：労働戦線統一問題とか組織統一問題を考えたのは、私が九州地連で仕事をしましたので、九州地連加盟組合の中に分裂組合がありましたので、分裂組合をどのように統一させていくかというのは、産別運動の中の大きな一つの組織テーマだったんです。だから、その組織統一問題については日常的に関わってきておりましたので、労働組合が組織統一していこう、組織統一をしようということについては、基本的には賛成でしたね。

山田：今おっしゃった分裂労組といった場合には九州の私鉄の？

瀧上：私鉄九州地連加盟組合の中の分裂している組合。

山田：西鉄の場合には総評ですね。そこに加盟していない、あるいはまったく違う。

瀧上：私鉄総連に加盟をしている組合の中です。分裂組合があるわけです。例えば島原鉄道労働組合は一時期、組合が分裂して一企業の中に7つぐらいあったのです。

山田：島原鉄道の組合員自体が7つぐらいに。

瀧上：分裂していて、私が担当するときには2つ、3つくらいになっていましたので、できるだけ組織統一させていこうというので、労働組合が分裂状態よりも統一をさせていこうと。私の基本的な認識は、日本の労働運動の分裂というのは、政党の支配下が強くて分裂をしていっている傾向があるので、それはちょっと問題じゃないかと。できるだけ政党の支配をなくして、組織統一をさせていこうというようなことで、分裂組合の問題を取り組んできていました。

篠原：先生が、島原鉄道のような分裂した組合を見て統一したほうがいいと思っていたのは、何年ごろからでしょうか。

山田：先生は72年から地連のほうの書記長をされていますね。

瀧上：はい。

山田：ここから。

瀧上：そこからですね。

山田：70年代半ばから民間を中心として統一の動きというのが先行しますよね。特に金属とかあっちのほうが先に動きますけれども、その中でそういう動きを見ながら、現におっしゃるように九州の中ですが、そういうふうに分裂しているわけだから、まずは私鉄というところで九州の私鉄労組を、私鉄総連のところで一本化させていこうというのがイメ

ーじだったんですか。

淵上：そうですね。

山田：例えば、分裂して島原鉄道7つというのはちょっとある意味「へえ」なんですけど、支持政党でいえば共産党や民社も？

淵上：民社ですね。

山田：民社。

淵上：政党は民社を支持していた。私鉄九州地連内の分裂組合の場合は必ずしも、じゃあ同盟なのかということそうでもないですね。だから例えば南国交通労働組合は政党と関係なく組織内部の事情で分裂組合、また私鉄鹿児島交通のように企業が合併して一企業になっても元の企業にあった組合（ともに私鉄加盟）がそのまま二組合（現在は統一しています）。

山田：南国交通、鹿児島。

淵上：鹿児島県内の私鉄にも分裂組合がありました。そこも統一をさせていくんですけども、その場合は逆に組織内の左右の対立によって分裂しているわけですね。ですから、イデオロギーで分裂しているわけじゃないんですよ。

山田：左右の分裂は？

淵上：イデオロギーで対立していると。俗に言う、組合側、会社側。会社の言うことを聞く執行部じゃなくて、組合の言うことを聞く執行部。そんなグループ・派閥そういう感じ。

山田：政党支持を巡るというよりは企業との関係、会社との関係をどうとるのかによって、ある意味、組合主義的な、協調的な姿勢をとる組合もあれば、それに対してもう少し対決姿勢を出すという。そのスタンスを巡って割れていったという。

淵上：そうですね。

篠原：そうなりますと、先生の重要なお仕事は、分裂していたものを統一していくということだったのでしょか。

淵上：主要な日常的な課題もありますが、それも1つの重要な仕事でした。

篠原：先生は分裂していた各地の労働組合を統一するために、どういう戦略や方法で統一をさせていったのでしょうか。

淵上：まずは、分裂をそれぞれしていく経緯というのは、もう全部違うんですよ。ですからそのところをきちっと分析・掌握した上で、どう統一させていくかというときに、分裂の仕方によって違ってくるんで、なかなかこうやればこうなるというようなことにはならなかったんです。ですから、それぞれの組合の特徴を分析した上で、どうやって統一をさせていくかというやり方を当該組合と協議をして、まずはその組織の中に入って行ってやろうと。

というのは、なぜそういうことを考えたかという、産別統一闘争を通じて、企業は違って統一した労働条件を求めていましたから、産別統一闘争でほとんど主要な闘争、春

闘、権利闘争の秋闘、交通政策闘争というのは大体産別闘争の主要な柱でしたから、分裂しているとその足引っ張りになるもんです。やっぱり分裂しているところは、先に低い条件で妥結したり組織攻撃を受けたりするもんですから、そうすると九州全体に与えていく影響などがあって、言うなら、経営側は非常にうまく分裂を利用して全体的な条件を抑えていっているというような状況ですから、なるべくそれをなくそうということです。

山田：その場合に、分裂しているのを一本化させていくというときには、例えばある会社の中の複数の組合がいて、その組合の横同士を説得して1つの組合になっていく。それとも、組合を私鉄総連、あるいは九州地連のほうの加盟という形で引き上げる形で次第に、こっちに吸収していくという、そういう意味ですか。

瀬上：そうです。やはり私たちの私鉄総連に加盟させることでした。分裂は資本の側の介入と併せて組合内部の人間関係や組合役員の人事関係などでした。

山田：人事は人間関係。

瀬上：人間関係。それと当時、同盟・民社ができたときの、そういう動きもあったのかもしれませんがね。ですから、私鉄総連に対抗して大きな同盟の組織としては交通労連があります。九州でいえば九産交。ですから、そういうところが出てきて、分裂組合の片一方の指導を行っていたので、最終的にはそこかな。

だから私のところから分かれて、脱退していったところもありますね。例えば佐賀の祐徳バス、昭和バスは私鉄に加盟をして、加盟をした翌年に春闘でストライキに参加する組合になる。同時に総選挙があったときに、佐賀の保利茂さんが落選するわけですね。それのしっぺ返りで、私鉄総連から脱退させられるとかね。そんな話を聞いています。

山田：脱退させられる。

瀬上：させられる。

山田：させられるというのは？

瀬上：組合が選挙でも当時の社会党議員を応援することなどあって、会社が私鉄総連を脱退しろと。「私鉄総連に入ったから俺は落選した」みたいな感じだろうな。そういうのがあったようです。だから分裂というのは一概に、一つの例えば同盟・総評というのにきちんと割り切れていうよりも、そういういろんなものが。それはもちろん、昔ながらの同族会社的なところもあるもんですから、そこからどう脱皮させるかという経営の民主化をやらないと、いつまでも徒弟制度みたいなのが残っているような感じのするところに、多く分裂が出てきたもんですから。

もちろんそれは、当時、同盟・民社、そういうのがあって分裂をしていく過程というのは大きな流れとしてはありますけども。それをできるだけ統一して、そういうことのないようにということでやってきました。

篠原：なかなか一枚岩ではないところが多かったというのは、日本の革新陣営全体がある意味バラバラなわけですけども、日本全体の革新の統一問題についてはどうお考えでし

たでしょうか。

淵上：日本全体の革新の統一については、あまり考えたことはありませんでしたけど、選挙をやってみて、社会党と共産党の票を単純に合わせれば、保守に勝つやないか、自民党に勝つやないかと。言うならばヨーロッパの人民戦線みたいな感じのことは思っていましたね。

山田：それは先生ご自身の見解だとは思いますが、そのお考えは私鉄九州地連とかでは共有はされていたと思われませんか。

淵上：そんなに具体的なことじゃなくて、分裂組合を組織統一させていこうということの方針を出して、それで、分裂組合対策を取り組んでみて。

山田：よく労働戦線統一のときに問題になるのが、共産党系の組合をどうするのか。そこを含めるのか、あるいはそこを排除するのかというのが多分、中央レベルでは問題になったと思うんです。特に同盟側からすると、共産党系は受け入れがたかったと思うんですね。そういった点については、私鉄の九州地連ではどういう議論をしましたか。

淵上：政党との関係ではほとんどなかったですね。

山田：政党の色は関係なく。

淵上：共産党系ともなかったですね。全然なかったですね。

山田：なかったというのは交渉がなかったのか、それとも。

淵上：交渉はありませんでした。あまり考えてもいなかったですね。

山田：大ざっぱに言えば同盟系と、いわゆる総評系総連というところをどう合体していった、その中にまだそこに所属していない組合をどう入れ込んでいくのかという。

淵上：上部団体を持たない分裂組合があるわけですから、先ず私鉄に加盟させることを重点にしました。

篠原：細かな話になりますが、1981年に私鉄総連が、最終的には連合になりますが、統一準備会に参加を決定していますが、この記憶はございますか。

淵上：そうですね。これは臨時中央委員会を開いたと思います。そこで決めていくというのはありました。

山田：そのころ中央レベルの集まりとかにも先生は顔を出していらっしゃるというわけではないですか。

淵上：私鉄総連本部の会議には、大体全部出席していました。

山田：出ているわけですね。

篠原：先生は1982年に私鉄九州地連の委員長ですから、常に私鉄総連の会議には。

淵上：出席していました。私鉄としてどう対応していくのかというので、私鉄の中では慎重に議論をしました。少し遅れて統一には参加していったと思いますね。

篠原：このときに私鉄総連は慎重ではあったけれども、賛成でもあったと。

淵上：そうですね。

篠原：西鉄労組はどうでしょうか。

涑上：私鉄総連が決定すればそれに従っていました。九州地連の中の組合も私鉄総連で決めれば、それに従って統一していくということでした。労働戦線統一問題で、慎重な意見はありましたが、「俺のところは反対だ」というところはなかったですね。

篠原：先生は当時、私鉄九州地連の委員長ですから、九州地区の取りまとめというがお仕事だったと思いますが、そこではあまり苦勞しなかったということでしょうか。

涑上：こういう方針に決まったんで、これでいこうというようなことで。ただ、反対の部分もありましたが、組織問題はいろいろあるけれども、大同団結してという感じでした。私鉄は決めるまでにいろんな職場討議を行いますので、決めるまでに時間がかかりますが、参加しようと決めれば全体で守っていく組織なので、決めるまでが大変です。

篠原：具体的には 1982 年 12 月 14 日に、まず全民労協（日本民間労働組合協議会）が結成されて、前後して私鉄総連がこの全民労協に正式に加盟すると。

涑上：そうですね。だから遅れて。それは内部の討議、下部討議というのに私鉄総連は産別としては非常に時間を割いたわけです。やっぱり統一問題は私鉄総連の歴史に深く関係するものですから。

山田：西鉄労組の 40 年史のところ、全民労協加盟を巡って、やっぱり若干議論があったということ。これは 83 年の私鉄総連の 47 回臨時大会です。これを見ると、そこで議論がされたような書きぶりですね。

涑上：ええ。

山田：中には、ほかの地区から加盟することに対して。

涑上：賛成、反対。

山田：反対、あるいは慎重とった意見もあった。

涑上：当時は慎重論が多かったですね。

山田：慎重論を主張するときの大きな理由というのはどういう理由ですか。

涑上：私としては、その分裂組合であっても職場は同じですから日常的に相手の行動を見聞するので、同盟の組合員の運動をちゃんと見ているのです。分裂組合だから見ているわけですよ、組合員はちゃんと。日頃の行動を見てあのようになるんじゃないかと、なっちゃんいかんというのは分裂組合を通して、そういう意見が出てくるんですね。だから私鉄は「もう決めた。行こう」というような感じじゃなくて、そういうところに非常に慎重に。だからそういう意味では、かなり下部討議に長い時間がかかるのです。

山田：私鉄総連当時の執行部自身は加盟のほうへという意向で、それについて討議してくださいと。

涑上：討議ですね。加盟する方向で討議してください。加盟する、そしたらそれを下に下ろす。そして討議してきて、また大会で決めていく。だから普通、中央委員会、大会行って、産別方針を決めるのですが、労働戦線問題だけで臨時大会を開催したと思います。だから

非常に、組織的には慎重に扱ってというか、十分議論を行って来ました。

篠原：淵上先生ご本人としては、統一問題についてはどういうスタンスでおられたのでしょうか。

淵上：私も慎重派でして、言うなら、私鉄の中小でそういう分裂組合の活動を通して、他の組合からオルグがきて、例えば春闘解決金を要求する。それは闘争の結果として解決していく場合に解決金というのがあります。闘争が終わって、個人的に解決金の話が出る、そういうことを直接、経営者から聞くと、「解決金など私鉄はいりませんよ」と、「これは労使対等で苦勞して結論を出したんだから、それでいいじゃないですか」、「いやいや、違うんだ、君に対する解決金だ」と言う。そういう分裂組合の中には往々にして、そういうことで問題を解決していったという話を聞くと、そんなのは駄目だと。組織統一をするにしても、そういう動きというのがあるから、だから慎重にならざるを得なかったですね。だから私鉄が、私は組織統一をしていくときの慎重な考え方は、分裂組合の組織活動が非常に重要な経験があったからだと思っています。

山田：春闘で賃上げ交渉をするときは足並みをそろえたほうが交渉力は上がる。そういったこともあって、まずは九州地域の労働組合を一本化していく。問題は労働戦線統一ということで一緒になろうというところで、同盟のようなやり方は果たしていいのかという疑問が、先生もそうだし、私鉄総連の中でもあって、慎重だった。だけど、最後には、やっぱり一緒にならなければいけないと。

淵上：というのは大同団結という大きな流れだったんでしょうね。

山田：もう大きな流れで、もうすでに先行している民間部門もあって、私鉄総連としてもそこからちょっと距離を取るということは難しいんじゃないかという。

淵上：難しかったと思いますね。私鉄総連の方針、自分たちの方針をどれだけ連合の方針の中に組み込ませるか。だからおそらく難しい問題は棚上げ論議して、原発問題だとかそういうものはこっち側線に置いたり、憲法問題をこっちに置いたりしたのは、やっぱりそういうのがあったんじゃないですかね。

篠原：また具体的な話になるのですが、1983年に私鉄総連が全民労協に正式に加盟して、それから約4年後の87年11月20日に、全民労協から全日本民間労働組合連合会（民間連合）が結成されて、そのすこし前に私鉄総連が第53回臨時大会でこの民間連合に正式加盟を決定するという流れですが、ここはスムーズだったのでしょうか。

淵上：やっぱりそこは賛成・反対の議論があったと思います。だけど比較的スムーズにその大会は……、いかなかったところもあるかな。大体スムーズにいったほうですね。

篠原：以前の流れと同じ流れなので、スムーズなのかと思うのですけれども。

淵上：全国組織ですから、一部共産党系の強い部分もありました。そういうところが反対の動きがあったことは事実ですけれども、そうでないところはほとんど大体、私鉄総連が決めた方針に従っていこうという流れでしたね。

篠原：この過程で労働組合の労働戦線の統一が徐々に進んでくる。そうすると涸上先生はその政治力が強くなってくるとお感じになっていましたか。

涸上：やっぱりそれはそういうふうになってくるだろうと思っていましたね。やはり労働組合が社会的な役割として果たしていくには、ある程度、政治力というのも必要なんで、そのところは非常に強くなってくるだろうというふうに思っていましたね。ちょっと今はどうか分かりませんが、その点では失望していますね。

山田：失望といいますと、今の連合？

涸上：ええ。

山田：その当時は、労働戦線が統一する、結果的には政治力が強まって、労働組合、あるいは労働者の意見が政治の場にもっと代弁できるんじゃないかという期待はあった。

涸上：ありました。私鉄総連として例えば年金制度問題なんかで、スト等々、私鉄・産別だけよりやっぱり総評全体で年金スト打っていくじゃないですか。そういうことを考えると、やはり今、労働組合が果たすべき社会的な役割というのは、大きくなってくるであろうと思っていました。

具体的には賃金袋の明細にあるだろうと。上のほうは入ってくるということは下が取られるところと、取られるところをよく分析していこうやないかと言って、その税金の中身をこういう話をすると、結果的に政治問題を考えなきゃいけないというので、労働組合の意見を聞く政党支持ということになってくるんですね。

だからやはり、ある程度そういう労働組合が、社会的な役割を果たしていかなきゃならない。そういうのはあると思うんですけどね。だけど、そのところは、政治は政治、労働運動は労働運動というのかどうか。だけど、給料袋は1つだからねという話で、上が労働組合なら下は政治だという話をしていましたね。差し引かれるところ。そういう話をしながら運動していた時代ですね。

—連合結成をめぐる福岡県内の諸団体の動向について—

篠原：次に福岡の労働戦線統一の話に進めたいと思います。私鉄総連が87年に民間連合に正式加盟を決定して、それから数カ月後、1988年2月29日に福岡県民間労働組合連合会準備会というのが結成されていますが、そのときのご記憶はありますか。

涸上：私が出たのは九州ブロックの会議はありますけれども、福岡県には出ていってないですね。

篠原：そして、1988年12月に連合福岡が結成されて、会長が池松巖根西鉄労組中央執行委員長になります。そのときのご記憶はございますでしょうか。

涸上：これも、西鉄の池松君が連合の会長になる前に、九州ブロックの会議があるんですね。だから九州ブロックのところでは参加をしましたがけれども、そのところでは私は参加していません。

篠原：分かりました。西鉄労組50年史(382頁)によりますと、1989年5月に福岡で「官民統一を促進する会」と「統一案起草委員会」が発足し、つまり労働団体の官民統一を福岡でやるという団体が発足していますが、先生は、参加されましたでしょうか。

渚上：それも参加していないですね。

篠原：50年史にはこのように書かれています。「連合福岡を軸に県評と官公労協・県同盟と全官公とがブリッジ協議をもって詰めの作業が進められ、89年12月統一達成の具体化のための官公労協、全官公を加えた『労働7団体首脳会議』で協議を進めることになった」(382頁)。このころの経緯はどのようなものだったのでしょうか。

渚上：それはもう全然分かりません。入っていないですね。

山田：西鉄の労働組合に。

渚上：西鉄労組に。

山田：その頃は私鉄総連の九州地連のほうの活動がもっぱらで。

渚上：そうですね。だから地域、各県、具体的に個別県評との話というのは、私は出ていないです。

篠原：渚上先生から見て、福岡県の連合福岡、労働戦線の統一はスムーズに進んだというふうにお考えですか。

渚上：統一問題は比較的スムーズにいったんじゃないでしょうかね。ここのところは。

山田：前回お話を伺ったとき、連合人事を巡って、九州ブロックではやはり鉄鋼労連を代表として出すべきだという、現に実際そうなったという話がありましたが、九州ブロックの中での議論と、県の中の議論というのは全くもう別個にされていたのでしょうか。

渚上：別個だったんでしょうね。上下の関係というのはあんまりなかったですね。九州ブロックは九州ブロック。

山田：そうはいつでも実際には、主だったところは福岡ですね。

渚上：ええ。そこで決めたことを下にそれぞれ。連合の組織がそんなふうに具体的に、九州ブロックが決めたから、じゃあ各県はこれに従いなさいというような組織でもなかったと思いますね。

山田：そもそもブロックといったときの、そのブロックの役割というのはどういう。

渚上：だからおそらく、全国連合をつくって、九州は九州ブロックということにして統一させるには、そういうやり方をやったほうがいいんじゃないかな、ということではなかったですかね。それはちょっと分かりませんね。

だから私は九州地連だから、やっぱりブロックを持っている産別と持っていない産別とあっているはずですね、単産が。だから持っているところが集まって推進していったという感じですね。

山田：持っているところは比較的大きなところですよ。地域レベルになってくると、そこには加わっていないようなところも含めて、どういうふうにとまとまってくるのかという議

論になるわけですね。

淵上：だから九州ブロックは九州ブロック、地域（県）は地域（県）といった感じですね。

九州ブロックで大まかな方針を決め、県連合結成がやりやすいようにする。

篠原：西鉄 50 年史を確認したいのですが、このときに統一労組懇談会が統一を妨害したという記述があります（382 頁）。この統一労組懇は共産党のことでしょうか。

淵上：だと思えます。

篠原：具体的にどういう妨害があったかというのは、ご記憶はございますか。

淵上：共産党から具体的に私自身に対してあったことは、ちょうど九州ブロック連合代表者会議を嬉野で開催され出席しました。それこそ 12 月だったので、平日、8 日だったからちょっと具体的に分かりませんが、私はそのときに泊まらず、翌日は、私鉄中小がストライキを予定して決行するかどうかの時でしたから、嬉野から福岡に帰ってきたんです。だけど共産党は『赤旗』新聞に「淵上、嬉野でどんちゃん騒ぎ。芸者あげてどんちゃん騒ぎする」というのを書く。

だから、私はそのときに真面目に、私鉄九州地連中小組合は明日、ストライキ入れるかどうかですから、そんな嬉野で酒なんか飲む段じゃないので、福岡に帰って来ていました。それでも新聞『赤旗』に書いてしまって、これは余談ですけど、選挙の時も、共産党の『赤旗』の記者が執拗にそのことを追及してきたんですね。

山田：1989 年の国政補選のとき。

淵上：そう、補選のとき。それで私は、選挙事務所が西鉄労働会館でしたので、事務所にきているというから捕まえろと言って下まで追いかけていったけど、逃げ足が速くて捕まえきれなかった（笑）。

篠原：それは共産党としては。

淵上：やっぱり統一反対だったんでしょうね。統一反対で鮮明にして、統一労組懇をつくって、自分達の勢力を拡大していこうという、労働組合を政党の配下に置くというのは、チャンスと見たんじゃないんでしょうか。だからそういうのはありましたね。だから『赤旗』に書かれたし、「淵上、芸者あげて酒飲んで戦線統一」って言ってね（笑）。

山田：そのあとは『赤旗』に対してももちろん抗議。

淵上：いや、何もしなかったです。もう捕まえてやってやろうと思ったぐらいで。

篠原：前後しますが、1989 年 1 月 12 日に連合福岡の統一大会が開催されて、そして池松西鉄労組委員長が副会長に就任しますが、ご記憶はございますか。

淵上：福岡のことは分かりませんね。だから準備会のときの代表は池松君がやったと思いますけど。

篠原：それ以降は、あまり先生は関わっていないということでしょうか。

淵上：そうです、あまり九州ブロックが具体的に各県をどう、具体的に指導する、そのために何をするかなんていうのはあまりなかったですね。それぞれそこで決めたことはそれ

それ単組でやれば。そこに参加しているところが大体各県の大所。電力とNTTが主に当時、連合を結成していく時点では大きな役割を果たしていたと思います。

だからそのときに、あまり電力とNTTだけでは、だから衛藤君、ちょっとがんばってくれよという話をしたのです。

山田：たまたまかもしれませんが、県評の事務局長も西鉄出身ですよ。

淵上：松田留吉さん。

山田：そして連合のところに池松さん、それから先生もいらっしゃるということで、西鉄労組で主要なところを全部押さえているようなイメージがあったんですが、今のお話を伺うと。

淵上：必ずしもそんなふうに。

山田：たまたまそうであって、横のつながりがあってやっているというわけではない。

淵上：ええ。結局、西鉄がどう動くかというのは県評の中でも一つの役割があったと思うんですね。九州ブロックの中でも私に対して、その九州ブロックの例えば最後、官民統一していくときなんかは、自治労にも九州ブロックがあったと思うんです。

自治労（宮崎県本部坂田正一委員長）の代表から私に官公労のことも考えるようにとの話がありました。

篠原：50年史からは、福岡県内での官民統一にはいろいろな曲折があり、かなり手間取ったという印象を受けますが、この経緯はご存じですか。

淵上：おそらく、自治労は非常に慎重だったと思います。だから自治労が慎重だったんで、そこらあたり、言うなら総評系官公労と同盟官公労とあるけれども、やっぱりそこらあたりが、内部の調整もあったんじゃないでしょうか。だから難しかった。そのときに官公労と組合の間にちょうど私どもが入ったような感じだったんですね。

山田：私どもとおっしゃいますと。

淵上：私鉄。池松君もおそらくそういう役割を果たしたと思う。

山田：前回、民間企業と官公労系の真ん中だとおっしゃったんですけど、逆に言えばそういう性格が、官公労と民間の仲介役としての役割を期待されたということですか。

淵上：やっぱりあったと思います。だからおそらく、今でも西鉄労組との交流が続いていますが、西鉄、九州電力、西部ガス、NTT、この4つは大会に代表を招待していますが、挨拶を受けています。ですから、そういう根のところは昔、許認可事業の組合ということで、半官半民みたいな感じだからということじゃないかな。

その中で比較的当時、なぜ私鉄かというと、私鉄は春闘時に中央で大手集団交渉を行い、統一闘争で大手の金額を決めるじゃないですか。その金額が地方にずっと波及していくわけです（現在は個別交渉）。だから波及していく段階で、それが各県段階における民間の相場に、相場というより、考える基準になっていたのではないかと思います。

山田：自動車や電機などがあると思いますけれども、あともう一つが私鉄。

瀧上：そうだったですね。だから先行部隊が大体賃金相場を決める。続いて私鉄は大手集団交渉を行い、大手組合の金額を決める。大手金額を目標にして、私どもも私鉄九州各県の私鉄、バス、ハイタクの組合を福岡に集めて、経営側も集まって集団交渉を行い決める（集団交渉、現在はなし）。

私鉄の賃金が決まれば民間中小に与える影響は強かったですね。鹿児島为例ですけども、何年の春闘か忘れちゃったけど、10,000 円の壁を破るか破らないかの春闘のとき、鹿児島経営者団体から私鉄のストライキは3日は我慢するから、絶対10,000円は上げちゃいけんといって私鉄経営者に対して鹿児島県の経営者から激励が来るわけですね。大体そんな政治的背景がありましたね。

だから結局ストライキと言うことになりませんが、1日、2日、3日ぐらいは経営者も我慢するけど、というのはその地域の経営者がまとまっていたということのようですね。だからなかなか壁は簡単に、じゃあ私鉄労使だけで破れるかといったら、そういうことにはならなかったですね。

山田：今のお話を伺うと、私鉄は各地域でもそうでしょうし、全国で見ても重要な役割を担っていた。だから、官民がどうしていくのかというときにも私鉄の役割というのは非常に大きいということ当然分かっていたらっしゃったんだと思うんですけど。

瀧上：そんな社会的な役割があったのではと思っています。

山田：そうすると労働戦線統一というときに、われわれはどうするのかというのは、日本の労働組合全体にも大きな影響を与えるんじゃないかという自覚はやっぱりありましたか。

瀧上：ありましたね。それはそういう。やっぱり官公労は官公労でまとまった意見を持ってきたのを、今度は民間組合で協議して決めていましたので、それはありましたね。

山田：九州ブロックの自治労のほうからいろいろ注文が出ていたということで何か覚えていらっしゃることはありますか。印象的なやりとりとかは？

瀧上：自治労は九州の宮崎自治労坂田正一委員長、九州の大將、そんな人が窓口になって、その代わりに官公労をまとめて、それを、今度は九州ブロックの方針を決定する段階で官公労の意見として会議で議論をしていました。方針を決めていました。そういうことを私は随分やったもんです。

篠原：福岡の話になりますが、連合福岡が89年1月12日に結成されます。それによって、福岡県評が10月12日に解散をする。そして同時に発足した県評センターが、反戦・平和・地域運動等の重要な役割を果たしていくことになったと50年史（383頁）にありますが、この記述は正確ですか。

瀧上：これは、九州各県評とも同じでした。統一していくときに寄りがないという課題がありましたので。だから各平和センターが各県にできて、今もあります。残っていますね。

篠原：反戦・平和・地域運動等が連合福岡とはすこし違うという形なのでしょうか。なぜ、別組織なのかをもう少し理解したいと思います。

淵上：そのところは統一するときに、連合として受け入れられないとって預かりにしていたところの、反戦平和問題等を中心にして意見のまとまらない課題はやっぱりずっと残ったんです。

篠原：連合側とすると、その部分はどのように受け入れられないのでしょうか。

淵上：連合に加盟する各々組合の歴史と政策評価による違い、少し時間が必要と思います。

篠原：政党の。

淵上：関係もあると思います。

篠原：福岡に県評センターができるわけですね。

淵上：センターをつくっている。

篠原：その県評センターも93年11月30日には解散しています。ここの経緯について、先生はご存じですか。

淵上：知りません。

篠原：県評センターは93年11月30日に解散しましたが、この運動の一部を継承する福岡県平和運動センターが設立されています。先生はこのときの経緯をご存じですか。

淵上：それも分からないです。

篠原：福岡県平和運動センターは95年12月31日に解散しています。

淵上：なぜ消えていくんでしょうかね。そして今あるのが平和フォーラム。だんだん消えて小さくなっていますね。それは党におったから分かるんですけど、なぜ消えていったかという、各単組の事情でしょうね。多くの単産が民主主軸に移行しました。

篠原：反戦・平和・地域運動等をやっていた人たちというのは、福岡県でいえばどういう人たちでしょうか。

淵上：福岡県でいえば、どういう人たちというより、元の官公労の組合が中心になりますかね。それに民間労組一部を加えた組織。

篠原：ほかの県では残っている。

淵上：残っています。福岡県は、どういうわけか、急いで早くつぶれている。

篠原：これはなぜなのでしょう。

淵上：そのときの各単組の組織の事情と指導者だったでしょう。これは言い過ぎかもしれませんが。

山田：連合ができるというふうに、結局、特定の政党に対する支持はしないということだと思んですけど、淵上先生は88年に社会党の福岡県本部労働対策部長をされて、89年に副委員長。社会党委員としての経歴もいっぱいありますが、その社会党のほうから見たときに、この連合ができるということに対してはどのようなふうに当時、議論されていたか。

淵上：支持団体をなくすというのはもう、党と労働組合の従来からの関係からすれば、危機意識としては持っていました。

山田：あった。

瀧上：それは強くあった。

山田：ある意味、先生は2つの役割といいましょうか、一方では社会党という政党のほうでの役割と、もう一方は労働組合の側の役割があったと思うんですが、そこはご本人の中ではどういうふうに整理をしていらっしゃったんですか。

瀧上：このところは、立場上は非常に微妙でしたね。ただ、私自身は当時、そういうふうに出ていったけど、ちょうど私が党において参議院に出るときと、連合結成と重なり合うわけじゃないですか。だから明確にそこまで党と労働組合の关系到深く考えてはいなかった。労働組合の政党支持自由の方向により進むであろうと思っていました。

—1989年の参議院補選への出馬について—

山田：先生の経歴に沿ってですが、最初、私鉄九州地連で活動されて、87年に交通運輸労働組合協議会議長をされて、その翌年に社会党の福岡県本部の労働対策部長をされていきますけれども、どういう経緯とどういう役割をそれぞれされたんですかね。経歴でいえばちょっと動きがありますよね。

瀧上：党歴のところか。こんなのやったのかな（笑）。

山田：じゃあ、あまりご本人としては。

瀧上：記憶にないですね。

山田：でも、党のほうの労働対策部長をされていらっしゃるわけですよね。

瀧上：これはあれじゃないですか。参議院福岡補選に出るときに付けた肩書じゃないですかね。

山田：参院に出るための準備として、党としての経歴も付けたほうがいいじゃないかということですか。

瀧上：そうじゃないかな。

山田：あまり党の中での活動は？

瀧上：なかったです。党員であったことは事実やけど、そういう党の役員として何か仕事をするようなことはなかった。

篠原：参議院議員になってしまうとやはり。

瀧上：それはもう、そうです。役割としてきちっとやらないかんと思ったけど。88年。これは本当かな。

篠原：それは先生の『巨悪にかつ』に書かれています。

瀧上：じゃあ、参議院選挙対策のためのあれかな（笑）。小野明参議院議員の選挙のためだったか。

山田：そうすると、ご自身のアイデンティティとしては西鉄出身であり、私鉄総連の九州のほうでずっと活動されていたので、自分としては社会党員としてのというよりは、そっち

のほうが大きいわけですね。

淵上：そうですね、私鉄産別運動のほうが大きいです。

篠原：これは池松執行委員長が西鉄50年史に書いている部分です。「50年を振り返って」というところで、淵上参議誕生について、労働対策部長であることは重視されているようです。「支部専従役員を経て、私鉄九州地連書記長、委員長、連合九州ブロック代表幹事、社会党県本部労対部長であること」（384頁）と書かれているので、重要なポストだったのではないかと思います。

淵上：思い出しました。そういえば、日教組出身の小野明参議院議員選挙のときに選挙機構の中に労働部長として私は労働担当で入ったことはあります。そのことが書かれているのかもしれない。

山田：そこで先生は労対をされたということですね。

淵上：ええ。そうでした、そのとき労対をしていました。小野明参議院議員の参議院選挙のときに。

篠原：参議院選挙についても、先生は経験をお持ちだった。そういったところで、次の淵上候補の擁立につながったという理解でよろしいでしょうか。

淵上：そうですね。それはもう池松君が勝手に考えたことでしょう。池松君が思ったことでしょうね。

山田：今おっしゃった小野さんの選挙のあたりから、それが88年ですね。そのころからそれまでの九州の中での私鉄の労働運動のいうところから、国政へだんだん入っていったという感じですか。

淵上：入ったじゃなくて、入らされた。正式には入らされた。

篠原：出馬された際の経緯ですが、これは補選で前の自民党参議院議員が亡くなられたことから始まった選挙です。そこで淵上先生は急に候補になり、当選するという過程ですが、基本的にはスムーズに候補者擁立が進んだ形でしょうか。

淵上：当時、社会党は参議院選挙、12月23日に亡くなられたんで補欠選挙ということで、党の中では、その参議院補欠選挙を見送るわけには、不戦敗はないだろうということにはなっていたんだと思います。それで急な話だったもので、おそらく当時、社会党の書記長をされていた竹村さん、この方が候補者に挙がっていたんじゃないですかね。候補者に挙がっていて。

篠原：それは竹村俊夫書記長。

淵上：ええ、書記長ですね。組合的な背景を申し上げると、連合発足がありますね。その背景に連合じゃないもう1つの共産党系の動きというのも非常に活発になっているというのがあって、だから社会党は従来のような戦い方で選挙をやればいいのかというのが労働組合側にはあったんじゃないでしょうかね。だから、とにかく片一方は連合という、片一方は、共産系の組織、やっぱり連合をつくるときの勢力争いになるじゃないですか。だ

から片一方は共産党、片一方は社会党で、その選挙はそういう裏の背景としては、労働組合のそういう労働戦線に対するところでの勢力争いとでも云うのか、やっぱり共産党がぐんと票を取れば、そこに与える影響もあるだろうし。逆にそこで社会党が大敗すれば、労働戦線に統一に与える影響も大きいと思うというのではなかったのかなと私は思いますけどね、当時。

ただ、社会党が誰か出してやればいいという選挙ではないと労働組合側はとったんじゃないかなと私は思っています。それで私が、参議院補選に出るということがマスコミに出ていたので、議員になるような人間ではないので、私は人に会わないように隠れてました。それでも春闘の準備のため私鉄九州地連の代表者会議をするようにしていたから、それに出ていたときに捕まって、参議院に出ろと言われた。西鉄労組三役で決めて、県評や主要な単産、単組と相談したうえで出馬の要請があったのではと思います。

そのときこういうふうの説得されたんです。「淵上君、君は地連の委員長として決めたことは守れというように指導しよるかどうか」と言うから、「何をお前たちはそんなとぼけたことをいうか。当たり前このっちゃないか、そんなことは」とこう言ったんです。そうしたところが、「俺たち、お前が参議院に出るように決めたんや」と池松君が言うわけ。だから、出ろと。「冗談じゃないよ。そんなことないぞ」と言って、「俺はな、金も持たんぞ。第一、参議院に出る用意もしてない。議員になる意思もない。名誉もいらない」。そうしたら「金もない、名誉もいらなきゃ、参議院に出て、落選しても何も失うものはないじゃないか。いいじゃないか出ろ」と。

そのときに、おそらく自民党が80万から90万の基礎票で、当時の社会党はそれの半分くらいの30万。だからこの選挙は絶対負けると分かるとるから、負けが予測されるので、選挙に出たい人はいたが、手を挙げる人はいない。「淵上君、選挙に出ろ」といって。負けてもお前は金もなきゃ地位もいらないというなら、何も失うものがないやないかと、説得された。

春闘もあるんで駄目だとお断りしましたが、時間もない、皆んなと相談の結果だと、小野さんの選挙運動もやっていたもんですから、じゃあ、そういうことになったらしゃあないと言って。

山田：ご本人としては、小野さんの選挙運動とかをやっていて、いずれ自分もつていうのは？

淵上：いや、もう、政治に出る意志は全然なかったですね。

篠原：『淵上貞雄 20年の歩み』（2009年）にある「西鉄労組からの『心配するな、絶対に当選はないから』という強引な説得がなければ、今の自分はない」（15頁）というのは、偽らざる気持ちでしょうか。

淵上：そうそう。そうです。

篠原：私としては、次の文章も気になっていて、「私鉄北陸地連委員長からは『選挙はすべ

て本人の責任だ』という手紙をいただき、覚悟ができた」(15頁)と書いてあるので、先生自身の覚悟もやはりあったのでしょうか。

渕上:いや、その手紙は立候補してから来た手紙。「選挙はすべて本人が決める」。意味深い言葉なんですね。選挙はすべて本人が決める。

篠原:この文章の理解はどうでしょうか。「自分の責任と勝負に関係なく戦う選挙は気楽なもので楽しいものだった」(15頁)とあります。

渕上:応援をしていただいた人々には失礼ですが、大体負けると思っているから(笑)。ただし、決意をしてからは、当落に関係なくすべての責任は自分にある、泣き言は言わないという決意でした。

篠原:本当にこの通りですね。

渕上:ええ、絶対もう、大体その基礎票が半分しかないんですよ。そして相手候補はそのときの参議院選挙に出る準備をずっとしてきているわけですから、大体その人に勝つわけがない。7月の選挙に出る準備をしてきている人が補欠選挙に出るわけですから。

篠原:ここに書いてあるように、「立候補することよりも当選したことの方が驚きだった」と(15頁)。

渕上:そうです。

篠原:「人生の天地がひっくり返る」(15頁)とあります。しかし、先生は圧勝されています。

渕上:なぜかですね。応援していただいた皆さんの御蔭です。

篠原:圧勝した原因は、先生は何だと思っておられますか。

渕上:ちょうどそのときの政治情勢だと思っています。最大はやっぱり消費税導入でしょうね。12月に竹下内閣が消費税導入を決めて初めての国政選挙ですから。消費税が何たるかというのよりも、消費税反対の動きが一つと、次に政治腐敗、リクルートの問題。それと米価、コメの自由化の問題がありました。

篠原:先生が当選された直後に、福岡の檜崎弥之助氏が雑誌のインタビューで、檜崎議員もかなり協力したと答えていますが、先生にそういう実感はありますか。

渕上:はい。結局、そういう国会の中で、福岡の中での中心的な役割を果たしている人ですから、やっぱりその影響はあったんじゃないでしょうか。

篠原:リクルート疑惑徹底解明、消費税反対、農産物自由化反対というのが社会党候補、つまり渕上先生のスローガンであって、檜崎氏も自分のニュースカーを15日間動かしたりしたと答えています。

渕上:おそらく、社会党県本部から推薦のお願いに行ったと思います。そういうことをやってくれていたでしょうね。私は全然分からない。そのような多くの方々のご支援があったからでしょう。選挙後半は恐れ程盛り上がっていましたので。私は消費税だったのかなと思いますね。

それとリクルート汚職というのはあの当時、インパクトを与えていたと思いますね。皆んな怒っていました。その3つの問題というのは、農村にとって死活問題。初めてコメの自由化をやっていくわけでしょう。だから生活が一変、将来に対する不安を強く持っていました。

ちょっと横道にそれますが、公示日当日のことです。選挙カーがあるじゃないですか。車だけが来たんですよ。1月25日公示日、真冬ですから毛布を積んだり、暖房設備あるじゃないですか。そんなものは全然ない、選挙カーが来てポンと。それで寒いから、風邪ひかせるからね、街頭を回る選挙カーは全部窓閉めさせて、風が入らんようにして、暖房と言えば、車の暖房だけしかないから。そうしたら怒られましてね。「もうちょっと真面目にやれ」と。「真面目にやれといたって、この寒さで、先生、寒いのに、窓を開けて走れなんて言われたら、みんな風邪ひきますよ」と。「当たり前のことじゃないか、冬も開けて」と多賀谷先生がその車に乗って来たの。

篠原：多賀谷真稔。

淵上：うん、多賀谷真稔議員。「淵上君、すまんやった」と。それから多賀谷先生がその場ですぐに防寒用の毛布等を差し入れてくれるような状態だったです。それほど慌しい選挙初日でした。

篠原：窓を開けてやったら寒かったのですか。

淵上：寒い、寒くて。だから、選挙どころではなかった、街宣どころではなかった。初日からそんな状態ですから、オリンピックの精神でした。

山田：面白いですね。口説いたほうも、どうせ負けるだろうけど、出さんわけにもいかんから、ぐらいのところでやっていたという自己認識と、その結果とのギャップ。でも、やり始めると感触はあるわけでしょう。

淵上：ありますね。最初の一週間、県内を一巡するまでは選挙が行われているのかという程、静かなものでした。後半は別ですが。それは、ずっと当時は、社会党は負け続けていたので、まずポスターに、「おい、どうせ負ける選挙やけん『かつ』と書こう」と。その「かつ」と書いた文字は、西鉄労組が春闘時に家族とともに闘う家族春闘としてこどもたちが書いた「かつ」を使いました。集会や街頭演説で、この「かつ」は小学校3年生の女の子が書いたんですよと言ったら、女性が「わあっ」と燃えるわけね。学校の先生に言ったら、また「わあっ」と。だからそういう何か偶然が重なり合ったんじゃないでしょうか。だから最初1週間ぐらい有権者の反応は全くなし、これはもうどうせ負ける選挙だなというほど低調でした。

篠原：当時、労働組合運動内部では統一問題が議論されていたわけですが、選挙でそういうことを訴えたことはございますか。

淵上：労働戦線問題を訴えたことはありません。ちょっと選挙に出るということになって、連合問題で、政治、選挙問題は一切関わられないと言われました、選挙になったときに。

私はそのときはっきり、「どうぞ、そのようにしてください。選挙でもって、今までつくり上げてきた連合の組織が崩れるようなことがあってはならないから、それは一切やめてください」と、私は言った。そのとき衛藤君じゃなかったかな。ちょっとそこは、名前をはっきり分かりませんが、連合ができたからといって、君の選挙はできない。だから僕は逆に、一切やらないでくださいと。

言ったら逆に八幡製鐵労組から推薦していただき、「頑張れ、頑張れ」と。私の似顔絵描いて激励してくれた。事務所玄関前にしばらく飾ってあった、選挙期間中。

山田：そのときの実際の支持勢力は連合ではなくて、それぞれの労働組合が個別に支援をするということですか。

淵上：そうだったと思います。

山田：中心は西鉄労組がしたんだと思いますけど。

淵上：西鉄労働組合をはじめとして私鉄九州地連仲間が事務所に寝泊まりして頑張ってくれました。主要な単産の幹部の方々が出てくれという、立候補の要請のあった組合からの支持。

篠原：金銭的な話になりますが、選挙はすごくお金がかかると言われます。淵上先生の場合は、基本的には労働組合やその組織が丸抱えということでしょうか。

淵上：そうですね。

篠原：ご自身のお金を使ってということはないのでしょうか。

淵上：それはあります。ありますけど、それは自分の身の回り程度。そんなに選挙に、この金で選挙してくれなんていうことにはならないですけどね。だから当時は、一銭もお金を出せとか言われなかったですね。おそらく党と労働組合の間でいろんな話をして決めてくれたとは思いますがね。

篠原：選挙運動の指揮をされた方、選挙運動を中心になって取り仕切った方というのは西鉄労組の方でしょうか。

淵上：池松委員長が中心だったでしょう。それと竹村書記長だったと思います。それと県評の松田事務局長かな。

篠原：一番苦労したこととして覚えていることはございますか。

淵上：選挙事務所方々や支援をしていただいた人の方が大変だったと思います。候補者は決められたスケジュールで動けばよい。あつという間の出来事で、どうせ負ける選挙、気楽にいけど。だから楽しくワイワイ、ガヤガヤでいけというような話ですから、その選挙のときに苦労したというのは、人の前で演説する原稿、毎日毎日考えないかんとか、それくらいのことで、話すのは大変難しいなと思ったぐらいなことで。大体もともと選挙をやろうとか、勝とうとか何とか意識は全然ないじゃないですか。どうせ負ける選挙だから開き直ってやっているぐらいだから。ただし、選挙後半は変わって来ました。

篠原：先生が選挙を戦っていたときに、福岡県は奥田県政でした。革新県政だったわけですから

が、やはりこれはプラスに働いたのでしょうか

渚上：ものすごいですね。それはものすごいです。おそらく絶対表に出なかったけれども、やっぱりじわっと奥田知事というのが浸透していましたね。

篠原：そうですね。2期目ですね。

渚上：2期目ですから。だから、おそらく表向きにはやっていないけれども、相当、奥田知事はやってくれたと思っています。結局、奥田知事が1期目はそんなに目立たなかったかもしれないけれども、確実に各所、各地域でやっていってくれてるじゃないですか。で、かなり現場をやっぱり歩かれとったんで、おそらくそこには確実な指示がいていたと思います。

篠原：奥田知事の力といいますか、そういうものを感じたことはありますか。

渚上：それは農業者の、もちろんコメの自由化という問題もあったかもしれませんが、結局第一線で働いている現場に、かなり奥田知事が顔を出されていたんじゃないかなと思うんですね。ですから、その影響だと思うんですけど、やっぱり農家、農村の方が、筑後地方でいえば、有明海の人や農村の人たちというのはかなり。コメの自由化というのは大きな意識の変化をもたらしたと思います。特に若い人たちに農業に対する危機感がありました。

だから、そんなことがやっぱりなければ、あんなことにはならなかったんじゃないかなと思うんですね。票が出るなんていうことが。

山田：違う言い方をすれば、革新に対するイメージがだいぶ変わってきた。本来保守を支持するところであっても。

渚上：そうですね。だから、もう、世の中が変わると思った人も多かったようです。ある自民党の支持者の人から、「私はこれで自分の会社も終わると思ってあんたの名前を書いた」という保守の人もいました。だから世の中がちょうど変化の時代だったんでしょうね。変わり目だったと思うんですね。

篠原：これは以前にもお伺いしたのですが、渚上先生は奥田八二氏と以前からお知り合いですよね。

渚上：だったですね。奥田先生と、個人的にいよいよ具体的になってきたのは、奥田さんが知事になる前に、それこそ直前ぐらいな時期に、各組合の幹部の人たち、そのときも2回ぐらいしか集まっていなかったから分かりませんでしたけど、集まって『資本論』の学習会を行おうという話をさせていただいて、そこで、直接会う機会がありました。1回目を終わって、2回目に『資本論』はどのように読むのかとかという考え方、認識論のところの話をするぐらいが個人的なこと。あとは、知事になって、私が議員になってからはちょくちょく会っている。

篠原：初当選の際の写真には、渚上先生の横に奥田氏が並んでいます。

渚上：そうそう。千代町選挙事務所で当選の報を聞いた後ですね。だから奥田革新県政なか

りせば、当選はなかった話でしょうね。

山田：渚上先生が出馬されるにあたって、ご家族の方のご反応はどうだったんですか。

渚上：まず、明日、記者会見をして発表することになりましたので、夜中に家に帰りまして、ちょっと起きてくれと。

山田：そこで初めてお話しした。

渚上：初めてですね。

山田：それは奥さまへ？

渚上：そう。「選挙に出ることになった」と言ったときに、妻はこげん言うたね。「出会い頭の交通事故みたいなもんね。頑張んなさい」と言った。

山田：そういう立候補するときに、ご家族がすごく反対するというのはよくあると思うんですけど。

渚上：言ったらそう言ったんですよ。出ることになります。それで、「どうせ負ける選挙やけ、恥かかせるけんね」と言って、「申し訳ないけど、こんなふうたい」「もうしゃあなかな。出会い頭の交通事故と思って頑張んなさい」とこう言うわけ。

だから、その足で夜中、妻の里に行って、「参議院補欠選挙に立候補します。どうせ負ける選挙ですが、こうして明日記者会見、発表しますけん、よろしく」と言った。私の本家に行って、ここも「明日、参院補選に立候補の発表をします」と。「参議院か、衆議院ならいいけどね」という話、土木建設業です。

だから夜中、もう12時過ぎに行っていましたけど、「お母さん、ちょっとお頭のついた物を持ってこい」と言って、尾頭付き。そのイリコを持ってこさせて、イリコと冷や酒で「頑張れ」と。「おっちゃん、迷惑かける」と言ったら、「しゃあなかない。お前がな、自民党ならな、よかばってん」とか言いながら話し合っ（笑）。

篠原：でも、それから参議院議員を20年以上続けることになるわけです。

渚上：そうですね、不思議なことですよ、本当に。

山田：今のお話を伺うと、誰も「まあ、しゃあないね」ぐらいで、止める人はいなかった。

渚上：だから、家内と家内の里と私のおふくろの本家筋は反対ではなかったですね。誰も止めなかったですね。「お前のこっちゃけ、しゃあないな」というような。

篠原：奥田八二氏は家族が反対でした。

渚上：だからそんな話をずっと聞くでしょう。ちょっと余談になりますけど、もともとおふくろの里の親父は村会議員したり、その従兄弟は町長したりとかという。だから、私が出たときに、私は田舎の浮羽ですから、地域の人たちは「ああ、あそこの家系は政治筋やな」と。

山田：浮羽というのはお母さまのほうのご出身が？

渚上：そうです。親父もそうなの、竹野なんですけど。だからあそこはもう、「政治筋の家やけん」ということやと。あとから聞いた話です。

山田：当時お仕事は、私鉄総連を続けていたという理解でよろしいですか。

淵上：はい。

山田：国会議員がもし駄目だとしても、そこでの仕事を続けられるという約束なんですか。

それとも出馬するにあたって辞めなきゃいけなかったのでしょうか。

淵上：ここはね、事件。

篠原：実は奥田氏が知事選に出馬する際にも、落選後をどうするのかは議論になっています。

淵上：そんなことは考えていなかったですね。もし、自分が落選したらどうするかといったときに、そのまま委員長続けられるかな、どうかなというのは問題やなど、その認識はありましたね。

話は変わりますが、そのときの正月に考えたことは、俺はもう 50 になったな。そしたら、第二の人生考えないかなというふうに、来年は 50 だからとって、その前年の暮れの 12 月、押し迫ったころ、どうせするなら、家も少し畑があるので、百姓でもせないかなと思って、近所の若い人たちが柿の剪定講習会を行っていたので、まず柿の剪定講習会ぐらい行って第二の人生考えようと、年頭に定年後のことを思っていました。

篠原：それは柿農家ということですか。

淵上：うん。もともと柿畑を少し持っていたんで、親父とお袋がやっていたんで、それをしてながら何か、労働運動やってきたから、社会活動は何かしなければいかなというぐらいの、ぼんやりは考えてました。年齢も 50 歳だから、10 年間ぐらいで何か考えればいいなと思って、まずはそれなら手っ取り早く百姓の見習いをするかというんで、始めたところでしたね。そして明けてすぐですからね、言われたのが。

山田：落ちるやろうというときに先生としては、まず委員長はもう辞めないかと。でも、もちろん、10 年少なくともあるわけですね。そこはどうお考えだったのでしょうか。

淵上：その、落選したからとって、会社から首切られるわけないんで、現場に。

山田：西鉄に戻れば。

淵上：戻ることになるだろうとは思っていましたけどね。

山田：それは組合のほうに戻る。

淵上：いや、そこまではそんな具体的に考えたことはなかったです。

篠原：先生を口説きに行った人たちは、そういう話はされないのですか。

淵上：全然なかった。選挙が終わって聞いた話では、落選したら自治体選挙に出すと、私鉄総連か総評と話したと聞きましたが、全然なかったと思いますね。私を口説くときの方法は、そういう口説き方じゃなかったんですね。あとから池松君が「俺が出ればよかった。俺が出れば」ずっと言っていました。2 年ぐらい言っていたようです。池松君が出てくれれば、私は苦勞せずに良かったのに。

篠原：それはどういう意味ですか。自分になりたかったということですか。

淵上：と思います。その前に、彼はやっぱり政治のことを考えていたんじゃないかと思いま

す。そういうことを言うと八幡の衛藤君が、「そげなこと、今頃言うな」とたしなめていた。私の目の前で言ったことがあるんです。池松君は久山の町会議員になる。

山田：池松さんはそういう政治に対する思いが強かった。だけど、当時は自分が出ても勝てるとは思っていなかったから代わりに。

渕上：だから私を。だからそこにはあまりいい動機で出したのではないと私は思います。

篠原：繰り返しになりますけれども、先生はセーフティネットなしだったのですか。落選した場合も保障はなく。

渕上：そんな話は一切なかったです。

山田：西鉄には戻れる。

渕上：西鉄には戻れるから、箸を落とすことはない、それだけは思っていましたけど。だから落選してから戻るなんかを考える暇はなかったですね。それほど急な短期の選挙でした。

篠原：急に始まった選挙戦です。

渕上：10日の日に言われて。1カ月ですよ、当選まで。約1カ月。2月12日に当選していました。事前運動も何もない超短期の選挙戦でした。

（第3回聞き取り 終）

第4回（2020年2月18日）

—社会党の政権参加と交通政策について—

篠原：まず、先生が国会議員になってからの話をお伺いしたいと思っています。先生が初当選されたのは1989年で、そのときの社会党は野党です。

淵上：野党です。

篠原：そして、93年の細川政権から社会党が連立与党になります。つまり、先生は短時間で野党と与党を経験したことになりますが、そのときにどのような違いや変化をお感じになりましたでしょうか。

淵上：なかなか難しい問題ですが、この項目を頂いてどうしようかなとだいぶ考えてみましたが、そんなに自分は真面目にやっと思ったかなと思いつつながら。一つは、ずっと野党だもんですから、現実的な対応というのが、個々別々にやられておったというのは、当時まだ自治体議員、労働組合幹部、官公労出身の議員がおられたんです。その点では7党1会派の細川政権ができたときでも党の大臣は一定程度、行政の中でも評価がありましたもんね。思ったよりやるではないかというのが行政の評価でした。

そのとき、例えば北海道の五十嵐広三さんとか、伊藤茂さんとか、野坂浩賢さんとか。かなり行政的には熟知をしている方ばかりだったんです。

福留久大（以下、福留と略）：伊藤さんは行政の経験はないんじゃないですか。

淵上：そうでした。行政の経験はないです。

福留：伊藤茂さん。

淵上：はい。社会党、党の幹部、国民運動部長をされていましたが、それはなかったけれども、優秀だったんです。

篠原：確認したいのですが、先生がおっしゃったことは、野党が長い社会党議員の中でも、自治体で、例えば首長をやっていた議員はかなり実力を持っていたということですか。

淵上：そうです。

篠原：逆に、自治体での行政経験を持っていない議員はどうだったのでしょうか。

淵上：労働組合出身者が多く、政策論争の経験があり、官公労の方は日常業務で何らかの政治とのかかわりもあって、そんなに悪い評価はなかったです。各官僚の中にあっても意外としっかりやるやないかというふうに言われていたのを記憶しています。

篠原：先生は初当選されて、そのときは自治体の行政の経験はなかったわけですが。

淵上：全然なかったから、何も分からなかったです。だから、政治といっても選挙運動と私鉄で交通政策要求で省庁交渉をすることだったので、手探りで自分でやる以外になかったです。

篠原：社会党も幾つかの派閥やグループはあると思いますが、先生はどのグループに所属していたのでしょうか。

渕上：参議院の場合は、右左というのがあって、私は左側のほうにおったでしょうね。

篠原：自分から左ということを表示するのですか。

渕上：あんたは左だもんと言われて、そうかなと思っていた程度です。労働組合の中でも私鉄は左のほう、真ん中よりちょっと左みたいな感じで受け止められていたんで、そういう人、例えば矢田部理さん、志苦さんとか、そういう人たちのグループから誘いがあって、その中で一緒にいろんな研究会だとか活動をしていました。

山田：それは外から見たときに、自民党の派閥みたいはこの人はこの派閥だというのは分かるような感じですか。それとも、やっぱりそういう勉強会とかに参加して、緩やかな形でこの人はこちらのグループだね、みたいな感じですか？

渕上：あんまり私自身はそういうことを感じなかったですけども。

山田：ご本人としては、自分はこのグループに所属しているんだとかというような強い帰属意識みたいなものは。

渕上：なかったです。

山田：特になくて、ざっくり分けると、じゃあこちらかなぐらいの。

渕上：そんな感じでした。

福留：その頃、社会党の参議院議員というのは何人ぐらいですか。

渕上：15～16人でした。

福留：その中の何人かから勉強会とか何かのお誘いがあったということですか。

渕上：そうですね。常任委員会毎に部会がありまして、部会毎の勉強会が多く、そちらの勉強会が主でした。あとはテーマごとにやっていたんで、そのテーマに興味があれば出ていっても何とも言われなかったんで、あんまり派閥という意識を私自身は持っていなかったです。

篠原：その勉強会というのはどういうことをする勉強会なのでしょう。先生役の方が来られるのでしょうか。

渕上：例えば、議員で弁護士さんとか、矢田部さんの場合なんかは弁護士さんだったんで、そういう人たちが中心になって主にやられていた。

山田：当選されて、今おっしゃった勉強会に入られて、初期というか、例えば90年代前半辺りで特に力を入れて先生が勉強会で活動された分野はどういう分野だったんですか。

渕上：私は出身が私鉄でしたので、主には交通問題が中心でした。結局、私鉄出身は交通問題をやらないと最大の支持母体ですから、やっぱりその仕事が主だったんです。

山田：80年代後半から90年代前半にかけて、私鉄が抱えていた問題というと、例えばどういうものが。

渕上：福留先生もご存じのように、私鉄が大きく政策をやらないともう労使間の問題ではないという交通状況というのは、公共交通から自動車産業が発展するにつれて、自動車社会に変化をしていくじゃないですか。そうすると、片一方で公共交通というのが衰退をして

いく。それも地方から表れてくる。だから、地方の矛盾をどのように解決していくかというところで、やはりどうやったら生きていくかと。地方の公共交通を守ることができるかということがメインだったんです。まだ労働者の首切りというのはツーマンでありましたけれども、当時はそんなに具体的にだーっと押し寄せてくるほどではなかったんです。それでも早くから政策問題を考えなきゃいけないじゃないかという走りぐらいな、そういうのを経験した後に参議院に立候補した。当時は私鉄も 5 人から衆議院にも議員がいたし、参議院にもいたから。私鉄は何人いたかな。多いときは 5~6 人おったんですかね。ですから、だんだん少なくなってきましたけれども。

篠原：先生は、国会議員になる以前から私鉄総連としての活動をされていました。そして、その後、参議院議員になると、実際の政策決定の場に立ち会うことになると思います。政策決定について、外から見たときと、参議院議員として中に入ってから見るときの違いはございましたか。

淵上：経験がないから、ベテランの安恒良一（西鉄出身）さんがおられたので、安恒さんに頼めば大体の物事は、私鉄の問題は解決していた時代です。だから、安恒さんの時代に政策問題の議論が、ようやく始まった頃ですかね。そういう時代でしたから。

篠原：先生が参議院議員の時に、交通政策関係で印象に残っている政策はございますか。

淵上：一番は、交通基本法をどうやって成立させていくかと。それと、やはり国鉄問題が大きな社会問題になっていたし、地方の中小私鉄バスが、過疎問題と同様に重要視されていた。そういう時代でしたから、それでも地方の交通を守れということで、島根大学の乗本吉郎先生を中心にして、地域の問題と公共交通問題を政策問題として、取り組んで来ました。それから生活交通という言葉なんかだんだん生まれてきたりしてきた時代です。ですから、思うにはやはり交通問題が中心でした。

篠原：地方の公共交通をどうやって守っていくかということに関しては、与党にとっても、野党にとっても重要だと思います。ですので、与野党の対立はあまりないように思うのですが、やはりあるものなのではないでしょうか。

淵上：交通基本法を制定せよとの要求でありました。交通権という権利が存在するかどうかというところは、あるかないかという議論からあって。私的、個人の権利をそこまで保障することがいいかどうかというところからもそうじゃなかったかな。交通権というのがあるかないか。

山田：社会党側が交通権があるんだという主張をするわけですね。

淵上：ええ。

山田：どういう理屈なんですか。

淵上：交通の権利（交通権）は生存権の一部として、又、社会福祉としての交通保障として、憲法上で保障をうたわれている健康で文化的な生活を守るためには移動の自由というのを保障していかなくちゃいから、憲法 22 条、25 条だとか、そういう憲法に関わって権

利を要求していくという。

山田：交通権というものがあるとするならば、それを国は保障していかなければいけないという理屈で主張するわけですね。それに対して自民党側は、そういう権利はないという反論？

淵上：というより、まだそれの前の段階ぐらいで、憲法との関わりというのをやっぱり自民党側は研究していたんじゃないでしょうか。交通権と憲法との関係というのを。

山田：あるのかないのかを。

淵上：あるのかないのか。

山田：自民党側は研究していた？

淵上：ええ。じゃないかな。それか行政の側です。

山田：それは認めようという方向ではないんですね。

淵上：やっぱり認めるところが問題だったです。

山田：確認ですけれども、自民党側は、そんなものはないと。

淵上：そうです。

山田：社会党側はあるんだと。

淵上：それを認めると、われわれの権利があるということで、権利の主張をされるとむちゃくちゃになると。個々人が要求してくるようになって、例えば過疎地で鉄道やバス路線を廃止をする場合、交通権を盾にとって始めると、とてもじゃないができないんじゃないかというところがやっぱり交通基本法に対する基本的な相手側の、言うなら自民党・行政側（経営側）の抵抗だったと思います。

山田：それは、今は認められてはいないですけれども、当時はある程度は具体的なものとして議論されていた？

淵上：今ようやく認めて、交通基本法があります。

篠原：それは自民党政権でしょうか。

淵上：自民党政権のときです。

篠原：交通権を認めるかどうかの論争は、淵上先生が参議院議員になる以前からずっとあったということでしょうか。

淵上：交通政策問題は以前からありました。私鉄政策要求で交通基本法の制定がありました。

篠原：社会党が93年の細川で与党になります。それでもその法律は成立しなかったのでしょうか。

淵上：なかなかうまくいかなかったです。与党にもかかわらず。まだその頃はそこまでやるかというような状況ではなかった。

福留：優先順位がまだとても交通問題までいかない感じでした。

淵上：自社さ政権になっても自社さですから、自民党と組むわけ。村山さんが総理だとしても。そう簡単にはやっぱり内部、今言われたように順位の問題があったんでしょうね。

篠原：2010年以降は、地方交通が本当に厳しくなっていて、優先順位が高くなってきたというのでしょうか。

瀬上：そうですね。

篠原：憲法と交通権を巡る問題がずっとあったということですね。

瀬上：論争が具体的に出てきたわけじゃないけれども。やっぱり議論をしていくときの考え方のところの争いはそこだったと思います。

山田：交通政策基本法は、2013年ですね。

福留：安倍政権になっていますね。

瀬上：だから、基本法は成立したけれども骨抜き。骨抜きになったところは争いになっていくところ。

山田：交通権が認められた場合には、さっき先生がおっしゃったように、結局、国が交通権を保障するための施策をしなければいけない。端的に言えば、税金を使って地方交通機関を支えるという仕組みになってくるわけですよね？

瀬上：仕組みとしては、そうなります。裁判を起こされれば、結局、国としては負ける、勝つの議論になってきたと思うんです。だから、認めてしまっておけば法律にあるではないかといって、要求がどんどん出てくるんじゃないかと。基本法が出来たので、どう具体化するのか、これからの運動次第です。

山田：あくまでも権利問題としての議論であって、政府が税金を使う形で地方公共機関を維持するという、そういうふうな政策レベルの話までは当時はなかった？

瀬上：そうですね。当時は、権利問題より、補助制度はありませんでしたので、先ず補助金の要求からでした。先ず「隗より始めよ」で、壱岐、対馬、五島の離島に対する補助からはじまりました。地方過疎バス補助として補助金を政府が出している。

山田：離島振興法でしたっけ。

瀬上：離島交付金ですね。それを参考にして私鉄は補助金闘争、要求をやって、予算闘争をやっていくわけです。ですから、それを法律補助にしろというけれども、予算補助にしかなくて、不安定だから、補助金要求をやりながら、やはり交通権というものをつくって、きちんと国が国民の足は守るという形というのをくり上げていこうと。今はちょっとそこに足掛かりができたぐらいな程度じゃないでしょうか。

山田：少し抽象的な話になるんですが、当時先生が国会議員をされていた時代、今もそうなんだろうけれども、大きな流れでいえば、いわゆる新自由主義改革になって、大きな政府から小さな政府に転換していくべきだというような風潮みたいなのが強まっていますよね。小泉政権辺りが一番象徴的だと思いますけれども、小さな政府へという考えがあり、それに対して社会党はやっぱり大きな政府を維持するべきだという、そういう考えが？

瀬上：そうですね。それは保障していくべきやと。きちんとね。そして、路線を守っていく

べきではないかと。

山田：自民党自身が変わっていくわけじゃないですか。自民党自身の中でも大きな政府は維持すべきだというような勢力があったと思うんですけども、それがだんだん力を失って行って、小さな政府へと変わっていく。それに対して、一方で社会党は大きな政府というものを維持していくという。そういうふうな国家観の違いみたいなものが背景にあったというふうに考えることもできるということですか。

淵上：そうですね。やっぱり基本法を作っていくときの争いになってきたのはそういうところですから。例えば自民党のバス協会の代表を金丸信さんがしていたんですよ。だから、バス協会はバス協会です。バス1台で幾らという政治献金をずっとしていたはずですよ。だから、自民党と補助政治、あそこもいろんな話をしたりして、調子は良かったんですけども、法律ということになると頑として駄目でした。話はうまくいったけれども、そういう感じでした。

山田：今、金丸信さんの名前が出ましたけれども、ある意味で参議院の中においては、個々のものに関して言えば対立はあるんでしょうけれども、自民党との関係というのは、参議院の中でいうとそこまで大きな対立がなかった。もちろん安保問題とかになってくると話は違うんでしょうけれども。

淵上：法律に関する限り、衆参がばらばらみたいな感じはなかったです。やっぱり一緒に対応してくるという感じ。私鉄を経営した議員もいましたから。ある程度は地方の公共交通の状況というのは分かってはいたと思うんです。

— 淵上参議院議員と奥田知事との関係について —

篠原：つづいて、奥田県政との関係をお尋ねしたいと思います。先生が当選された89年は、福岡県は奥田県政ということで、奥田知事と淵上参議院議員とのつながりについてお訊きしたいと思います。まずは全体的にどういう関係をお持ちだったのかについてお訊きしたいと思います。

淵上：奥田さんとの関係は、社問研、社会問題研究所という所があって、そこがかなり党と労働組合の関係の仕事をされていたんで、私どもが奥田さんを知っていくのはそこからですもんね。そのときからで、逆に言うと私どもは遠くのほうから奥田さんを眺めているような程度で、直接話し合うようなことはなかったです。

篠原：先生が参議院議員になってからはどうだったでしょうか。

淵上：なってからは奥田さんと森山さんを入れて、それと地方の友人・知人との話の中に私も入って話したこと何回かありました。

篠原：それは研究会や勉強会という形でしょうか。

淵上：それは全く個人的ではなかったんでしょうかね。例えば、うきはに金子文夫さん（浮羽高校の先生、現在、うきは市吉井町に金子文夫歴史資料館があります）という方がおら

れて、その人と会いたいから時間をつくってくれとか。

篠原：それは奥田知事からお願いがあったのでしょうか。

渚上：あのときは会うから、渚上君、出てこんかというようなことではなかったかな。そんな感じでした。双方、恐らくそれは大体、知事がこの人と会うから、おまえさん出てこいみたいな感じのほうが多かったです。

福留：その金子文夫さんという方は高教組か何かの方？

渚上：高教組の方です。

福留：それで、奥田さんはどうしてその人と会われたんですか。

渚上：金子さんは熱烈なファンというか。

福留：奥田ファンだったわけですか。

渚上：ええ。支持者でした。だから、浮羽高校の歴史の先生だったんです。だけれども、例えばうきはの五庄屋の話がありますけれども。

福留：五庄屋ですね。

渚上：だから、五庄屋と言ったら私どもは猛烈に怒られまして、十六庄屋が本当なんだと。

五庄屋というのは違うんだというように。

福留：それは金子さんがそう言うわけですか。

渚上：そうそう。だから、そういう人でしたから、その先生から私もかわいがられたんです。

また学校で歴史を習った先生でもあったし。

篠原：奥田知事と渚上参議院議員と金子先生ですか。

渚上：とかで話すようなことはあったです。

篠原：その3人が福岡で会うわけですね。

渚上：それは地元でした。

篠原：うきはでしょうか。

渚上：はい。うきはというより原鶴温泉で。

篠原：時期は何年ぐらいでしょうか。

渚上：当選して以降です。

篠原：その3人で会うときはどのような話をされるのでしょうか。

渚上：率直に言って、金子さんのお話がいろいろ多才で、それを奥田さんと2人で聞きながら、あとは食事懇談。

篠原：政治的な話ではないのですか。

渚上：やっぱりそれは政治的な話で、この地域はどうやってとか、そういう歴史の話をしながらでした。

篠原：その会合に、なぜ奥田知事は渚上参議院議員に声を掛けたのでしょうか。

渚上：私と金子さんが一緒に地元だったというせいもあったのではないのでしょうか。それ以上のことはないんじゃないかなと思いますけれども。

福留：金子さんというのは、奥田さんよりも年配なんですか。

渕上：ちょっと年配じゃないでしょうか。あまり変わらないぐらいかな。

福留：昔から高教組の関連で奥田さんと。

渕上：とは知っていたんじゃないでしょうか。

福留：ご存じだったわけですか。

渕上：じゃなかったかと思います。

篠原：大体、年に何回ぐらい会うような間柄だったのでしょうか。

渕上：奥田さんとは当選した後、そんなにちょくちょく会ったということはないです。森山さんと奥田さんと私と私の秘書ぐらいで会ったことはありますけれども。だけれども、こちらは奥田さんは忙しいだろうから、会って一杯飲むかなぐらいな感じでした。

篠原：それは年に1回、2回でしょうか。

渕上：定期的なものではなかったけれども、気が向いたときにそんな感じだったです。

篠原：話の内容をお訊きしたいと思っております。奥田県政は少数与党で苦しんでいたところがあります。しかし、93年以降は社会党が国政では与党になります。そうすると、奥田知事から依頼というか、お願いがあったということはございますか。

渕上：直接には全然なかったです。だから、福岡県議団の方が、例えば土井委員長に会わせろとか、そういう窓口連絡係をおまえさんは東京でやってくれとかという話があって、だから、取り次ぎ役。どこで会う、どういうセットをする。そういう役目だったです。もちろん電話をかけてくるのは林武彦県会議員だった、そういうのが多かった。

篠原：奥田知事ではなく社会党の福岡県議が社会党の国会議員の大物というのに会いたいと言って、その取り次ぎを渕上先生に依頼するという形でしょうか。

渕上：そんな感じです。だから、私は東京で使い走り。そういう役割でした。少年兵ですから。

山田：最初、福岡選挙区から出ますけれども、その後に比例代表から出ますよね。選挙制が変わっても役割は変わらない？

渕上：それは変わりませんでした。

山田：イメージからすると、選挙区は地域の代表じゃないですか。比例代表は組織の利益代表という性格が強いと思いますが、あまりそのような役回りは？

渕上：選挙区に渡辺四郎さんがおるじゃないですか。もう一人、小野明さんがいるから、選挙区のことあまり私はタッチはしなかったんです。

山田：じゃ、選挙区の段階から私鉄の総連の利益代表という役回りを自覚されていた。

渕上：そうですね。だから、福岡のそういう役割と私鉄の役割ぐらいは主にやっとなんていうことです。

福留：奥田県政時代に土井さんが福岡に集会や何かで来るということが何回かありましたよね。そういうときは大体、渕上さんが取り次がれたというような感じなんですか。

淵上：福岡で県本部の竹村さん、基本的には中央本部と県本部で決めて、事務的な役割を果たしていました。福岡に対する土井委員長の思い入れもありましたし、奥田知事になって国政選挙で負けなかった。もちろん土井人気もありましたので、土井・竹村ラインとでも言いますか。

篠原：竹村俊夫書記長ですか。

淵上：ええ。

篠原：先生は福岡県の社会党県議会議員と社会党の国会議員の大物とのセッティングをされたということですが、その会合に淵上先生は出席されていないのでしょうか。

淵上：あんまりしなかったです。セッティングの時に〇〇の用件でと言うことなので、ある程度、予備交渉や説明をするので。

福留：会の設営だけで。

淵上：そうそう。

篠原：それは意図的に出席されなかったのでしょうか。

淵上：出る出ないはものによりました。県議のほうみんな上でベテランですから。私は1年生、ペーパーで走って回るぐらいなことが多かったんです。

篠原：福岡県の県議会議員が淵上先生に会いに来ることはありましたか。

淵上：県議が？

篠原：市議でもいいですけども。

淵上：はい、良く来られていました。国会に陳情、見学に来たときに来ていました。直接、何か物事を持ってきて頼むようなことはあんまりなかったです。

篠原：参議院議員の頃に淵上先生に来るお客さんというのは、私鉄総連やそういう所からのお客さんが多かったのでしょうか。

淵上：それが多かったです。

篠原：それは陳情も含めてということですか。

淵上：そうですね。

篠原：奥田や福岡県というよりは、私鉄総連系の。

淵上：そうですね。それと、当時まだ町村合併前ですから、その首長が訪ねては来ていました。

篠原：どういう依頼やお願いを持ってきたんでしょうか。

淵上：それもそんなにこれを頼むとかというか、「何しに来たな」と言うたら、「淵上君の所は居心地がいいけん」と言って、「あんたたちは自民党の所に行かんと、予算やら付かんよ」と。「よかやん。ここにおらせて」とかと言って、私の事務所に来ていました。

篠原：逆に淵上先生が、奥田知事やあるいは福岡県の人たちにお問い合わせをしたことはございますか。

淵上：ないです。

福留：甘木鉄道問題は関係していらっしゃいませんか。

淵上：全然関係なかったです。この前の葦水忌のときに話を聞いて、そんなことがあったのかと。

篠原：甘木鉄道は交通問題ですから、関係があるかと思ひまして。

淵上：JRはJRなんですよ。役所的に考えると、国土交通省の上にJRがある感じですか。

だから、国のことは俺らの所だというのがまずあって、その下が国土交通省、その下が私鉄。それははっきりしとったです。

篠原：奥田知事のことに話を戻しますと、うきはで会ったときの奥田知事との会話で覚えていることはございますか。

淵上：よく自分の子どもの頃の風景や、だから、僕は柿をむくことが好きだもんなとか、子どもの頃のこと。だから、逆に奥田先生と会うときは、いろんなことを県政でやっ取るだろうから、あまり言わないと。ここでゆっくりリラックスしてくださいというような、私は奥田先生にはそういう気持ちのほうが強かったですもん。激務だろうから、息抜きにちょうどいいやと。だから、あんまりいろんなことを奥田先生に言うというより、逆に奥田さんが子どもの頃の話だとか、農村のことだとか、そういう。

そして、福岡県の場合、筑後地区をどうしていくのかとかという話は逆にしてくれて、筑後地区は農村をどうするかというようなことだったです。そんな話は、だから昔の生い立ち等を含めて、いろんなよもやま話みたいなこと。だから、そんなに政策だとか、いろんな物事を頼むとか頼まれるとか、そういう話はなかったです。だから、私も逆にここでのんびりしてくださいと。会うときは私も「これは県政で頑張らにゃいかんですよ」というような要望や要求ではなくて、そういう気持ちのほうが、そういう態度で私も接したですもん。

篠原：例外的に具体的な話として、筑豊をどうしなければいけないと話をしていたのでしょうか。

淵上：筑豊の発展なくして、福岡県の発展はないと強調されていました。次はやはり農村をどうするかというんで、それは話をされて、道路の問題だとか、それは話されとったです。だから、福岡県全体を見て、筑豊・筑後地方をどうするかというのは大きな課題だなという思いは強かったと思います。

篠原：奥田はどのような方向性を示していたのでしょうか。

淵上：あの頃ちょうど大きく農村が変わっていこうとするときですから、時代。結局、米の自由化問題を巡って、農村農家が大きく揺れ動いているときでしたから、どのように農業を立て直していくかみたいな話だった。そのために青年をどうするか。だから、あの頃の農家の青年たちもかなり自民党に対する不満というのは持っていたから、そういう話をしておったところです。その話はしましたけれども。

篠原：先生は奥田知事がそういう話をするのを聞いて、やはり奥田知事が苦勞しているとお

感じになった。

渚上：それは分かりますね。

山田：当時、奥田知事が県民総立ちだとか、自助・共助・公助とか、こういうスローガンを言っていたと思うんですが、そういうのを先生はお聞きになりました？

渚上：はい。そういうスローガンを立てて頑張っていこうというのは大体分かっていたから。

山田：例えば、補助金を出してくれだとか、あるいは国策レベルかもしれませんが、例えば輸入化を阻止してくれとか、そういうふうな、いわゆるお上頼み的な発想をする人が多かったと思うんですが、奥田知事はそういうのに対しては多分厳しかったんじゃないかなと思うんですけれども。

渚上：全然なかったと言っていいぐらいなかったです。陳情みたいなことは。もともと陳情政治は駄目だと思っていたんじゃないでしょうか。

山田：奥田知事自身が？

渚上：自身が。だから、それは地方自治は地方自治できちんとやっていかなきゃならないんじゃないかというのが知事にあっただけじゃないですか。自助・共助・公助があるように。

山田：国に頼むのではなくて、自分たちでやっていかなきゃいけないという立場？

渚上：ええ。そんなのが強かったような。だから、頼まれ事というのですか、それこそ陳情みたいなのは一回もなかったです。

篠原：奥田日記には県議会との対応に苦しんでいることが書かれているように思いますが、福岡県選出の渚上参議院議員には何かをお願いすることはなかったのでしょうか。

渚上：なかったです。私たちは逆にそうじゃなからうかと思うて、察して、じゃあご苦労さんというような感じのほうが強かったです。

山田：利害関係があまり密でないがゆえに、お互い気楽に。

渚上：そうですね。リラックスしてもらおうという、気楽にのんびりするというような感じ。だから、普通の議員の人たちの話を聞いていると、どこをどうしてこうして、ああしてやったとか、俺がしたとかしないとかと言うけれども、そういうふうなことは全然なかったです。

篠原：そういう奥田知事の政治手法について、先生はどういうふうにお感じになっておられましたか。

渚上：恐らく自分の、言うなら部課長級をきちっとまとめてどう使うか。だから、担当の人たちがどうきちっと仕事がやれるかというのを中心に置いたんじゃないでしょうか。だから、私たちが例えばちょっとしたことで頼むよと言ったときでも、ちゃんとそこら辺りは応えてくれていたですもん。だから、そういうのはやっぱりあったんじゃないですか。そうしないと、そういう県に対しての頼み事を聞いてくれるというのはあんまりなかったと思うんで、やっぱり奥田さんがそういうふうな、その部署部署にきちんと責任を持って仕事をせよという話をしていたんじゃないでしょうか。だから、どのようにしてその

部長なら部長を育てていくか。苦勞させながらでしょうけれども。そこら辺りに少数与党のきつさもあつたと思うから、そのきつさをどこで補うかという、そういう育て方をしないと自民党からやられるわけだから、じゃあどこでどういうふうにするかといったら、少数与党ですから、県の幹部と一緒に野党と対抗していくということをやらないといかなかつたんじゃないかなと思うんです。最後は自分が知事が責任を持つという姿勢で態度を示すやり方で。

篠原：しかし、奥田知事は自分のそういう感情を先生に話さなかつた。

淵上：そんな苦勞話は一回も聞いたことがないです。苦勞話も泣き言も聞いたことがないです。だから、ものすごく打たれ強い人じゃないでしょうか。

山田：お酒とかも召し上がりながらの話ですよ。

淵上：召し上がるのもそんなに飲んではなかつたような感じでした。ただ、そういう席でもあつたから、少しぐらいは飲んだかもしれませんが、そんなにやりとしてやあやあと酒を飲むかというようなことはなかつた。

篠原：先生が初めての参議院の選挙のときは福岡選挙区の補選でしたけれども、次からは比例になります。そのときにも奥田知事は、初めての選挙と同じように淵上先生の選挙の応援してくれた感じですか。

淵上：福岡選挙区定数3に対し、社会党現職2名で、2名公認すれば共倒れになるので、1名に絞る必要があり、党、自治労、私鉄（西鉄）で協議して、結果として、選挙区に自治労の渡辺四郎、比例区に淵上貞雄と決め、私は私鉄産別として、全国比例で選挙を闘うことになります。

当時、私鉄総連内部に比例区立候補の動きがあつて、私鉄総連、西鉄労組、社会党に大変なご苦勞を掛ける。奥田知事から変わらない支持協力を頂く。

篠原：全国区の比例ですから。

淵上：そこにいくということで、渡辺さんが選挙区と。そうすると、やっぱり選挙区が中心になりますよね。比例はなら私鉄産別に任せると。こういう感じですから。

山田：ちょっと話はずれますけれども、比例に変わったというのは、社会党の場合はどこが決めるんですか。私鉄総連がうちの所でとかというふうにするのか、社会党のほうで別に決める所があるんですか。

淵上：恐らく福岡県の中社会党の中で渡辺さんも選挙区、淵上も選挙区だから、どういう扱いをするかということの議論をした上で、党としてはやっぱり渡辺さんは自治労出身で、前回も選挙区で闘っているということなどもあつて、協議の結果、渡辺さんを福岡県の代表に、おのずと私を比例と。そういう話をしたんじゃないでしょうか。

福留：淵上さんは補選で出ていますからね。自民党の福田幸弘議員が死んで、だから、自民党の席を奪った参議院ですから。社会党が参議院に2人いるということになりますよね。

山田：難しいという話になる。

福留：そのときにどうしてもやっぱり渡辺さんのほうが、自治労出身ですから。

瀧上：そうなるんです。そうなったと思います。それは党、私鉄、西鉄労組に任せていたから。もう辞めてもいいと思っていたぐらいですから。

山田：92年辺りは土井たか子のブームとかがあって、社会党は追い風の時期だったと思うのですが、チャンスだから2つ取りに行こうとかという話には、社会党の中ではなかったですか。やっぱり確実に1個を押さえるという発想？

瀧上：どうでしょうかね。それはちょっと分かりません。

山田：先生の場合は、決められたから分かったよ、みたいな。

瀧上：意外と候補者というのはそういう所に出ていかんもんで。

福留：それは社会党の？

瀧上：選対委員会か何かをつくって、県で決めてやっていたと思います。いろいろあったと思いますよ。裏ではそれぞれあったと思います。だから、早くに決めたんじゃないでしょうか。

—参議院の議会運営について—

山田：ちょっと大きな話になりますけれども、その後社会党が一気に力を失っていく。この間に社会党内部の中において、実際に村山政権、あるいは細川政権で与党となりますけれども、そのときのビジョンみたいなものというのは議論されていましたか。例えば山花委員長のとときと村山委員長のときでどここと組むかということで全く方向性が変わってくるわけですよね。その辺りについてどういう議論をされていたか、あるいは、先生はどういうふうに思っていたらっしゃいましたか。

瀧上：賛成・反対ぐらいな意思表示はしましたが、その中で具体的なものというのはいくらもなかったです。

山田：例えばどういう争点で？

瀧上：山花さんは山花構想みたいなのを出すやないですか。村山さん、村山さんのときはあったかな。あんまりそういうのはなかったような感じでした。あんまり私は中枢の中に行ったことがなかったから、よく分からない。

山田：グループとしては、村山委員長のほうに近いんですか。

瀧上：村山委員長の頃は参議院の中の議運、この担当をしていたんで、言うなら議会の中をどう回すかというのが仕事でした。

だから、自民党とさきがけと社会党で与党を組んで、そうしたら自民党は私にこう言うんです。それは村山じゃなくて細川政権ができたときかな。私、議運の仕事長くやったんで、細川政権のときは志苦委員長、その下で私は鍛われましたので、それこそ走り仕えしていましたが、自民党と社民党とさきがけで組んだときの国会の回しは、野党担当は私だった。自民党は私に、「自民党は派閥の中が大変やから、俺は自民党をまとめる、

君は全野党をまとめろ」と言われて。各野党を走り回っていました。

篠原：その自民党で強かったのは亀井とか野中などですよ。

渕上：それは衆議院。

篠原：参議院は誰でしょうか。

渕上：あのときは、自民党は、青木さんは幹事長で、実力者でしたね。だけれども、自民党へお願いに行くときには、総務、議運、それから幹事長の順に行く。問題によっては、それぞれの派閥がありますから。派閥の大將にそれぞれ話をしなければならない。だから、それも大変な仕事でした。

山田：今のお話でちょっと思い出したんですが、村山政権のときというのは戦後50年というところで、国会決議をしますよね。そのときには、今おっしゃったような形で内部調整とかに関われる？

渕上：そうですね。ここは文言をどうするかというので、やっぱりもめるわけです。

山田：野党よりむしろもめるのは与党内ですよ。

渕上：ええ。

山田：そこら辺で何か思い出みたいなものはありますか。

渕上：あのときは、そのときにはもう、ああいう問題は党対党の話みたいのところまで上げないと。だから、国体や幹事長段階での話になって、それがじわっと下りてくる感じです。

山田：じゃあ、直接的にそこで折衝の中心になられたというわけではない？

渕上：そのときにその話はちゃんと彼らにしとってくれとか、大体大まかに決まればそんな話になって。

山田：野党側のほうで、そこで批判的というのは？

渕上：野党にはこういうことをお願いしますと言って回らないかんでした。

山田：何かそこで反発とかというのは？

渕上：そらありますよ。例えば、与党を組んでいて、亀井運輸大臣のときに公明党議員の質問に対して、「公明党、もうちょっと勉強してこいよ」と大臣席から発言したわけですよ。そうしたら、国会はばさっと止まるわけです。そして、公明党が大臣は謝罪せよ、謝罪するまではと言って、言うことを聞かんわけですよ。「渕上君、担当、国対行ってこい」と私が行くでしょ。そうしたら、公明党の部屋の中に行って、「何とか一つ大臣が失礼をしたと言っているの、お許し願えませんでしょうか」というような話をしに行くと「だめだ」と言って、公明党の部屋の真ん中に座らされて、ぐるっと議員から取り巻かれて、あちらから文句を言われ、こちらから文句を言われで四面楚歌でじっとしばらく。

公明党の議運委員に議運委員会で謝罪するからどうかまとめてくれとお願いをして、今度は与党議運に持って帰ってきたら「ばかたれ。おまえ、そげなこと約束ばしてくるな、もう一回行ってこい」となるわけですよ。行って、またそこで頭を下げて、どういうふうな形ですか。委員会で謝るのか、理事会で謝るのか、こういうことをずっとしてしまし

た。

篠原：日本の国会を動かす上での貴重な証言だと思いますが、それはベテラン政治家がやることのように思います。けれども、先生は参議院議員としてまだ 10 年もなっていない。

山田：5～6 年ですよ。

淵上：そうですね。

篠原：そういう重要な仕事は、社会党の党内から任されるのでしょうか。

淵上：国会内の役職は、議員総会で決めることになっています。党で議運委員長と副委員長を決めて、私が副委員長。副は見習いで弟子みたいな感じで訓練させられた。志苦さんが議運委員長、その後、小川仁一さんが議運委員長、二人共に重厚な方でした。その 2 人に仕えてそういう下働きをずっとしてきたんです。議運の下でそういう根回し役をずっとしてきました。

篠原：やはりそういうお仕事では、例えば労働組合での活動の経験とかというのは生きるものなのでしょうか。

淵上：生きるですね。よい経験でした。人間関係ですから。やはり組合の労使間よりもまだ激しいですよ。相手が自民党の海千山千のベテランですから、修羅場を何回もくぐってきているでしょうから、自分の党内の中で。だから、自民党が野党になったときは、「君たちがしてきたとおりにしているのに、何で君は説得に来るのか」と言われて。だから、すぐに拒否するわけですよ。「君たちがやったように、俺たちがして何が悪い。君たちがしたことは誤りだったと君は言うか、言わんか」とかと言われて。「そりゃ口が裂けても言われませんが」とか何とか言いながら。今度はこちらに帰ってきたら、「そんな弱腰じゃつまらん。もう一回行ってこい」と怒られて。よく鍛われましたよ。

篠原：そういうお仕事をしている際には、私鉄総連とかとの関係はあまりなく、先生が個人で動いていたということでしょうか。

淵上：そうですね。私鉄の関係は大体私が窓口でやっていたから。私鉄も議運もでした。

篠原：西鉄労組との関係もそういう国会の運営の際にはあまり関係ない。

淵上：そうですね。あんまり単組独自というのは、単組独自の問題があるときには個別に対応していました。あとは私鉄総連本部との話が主でした。

篠原：議運のお仕事は、先生はずっとされていたんですか。

淵上：そうですね。大体議運をずっとやっていました。

篠原：そうすると、先生の党の中でのポストも上がってくると思うのですが。

淵上：そうですね。だから、議員が少なかったからです。党の中で労働部長、幹事長、財務部長、最後は副党首かな。

—私鉄総連・社会党（社民党）との関係について—

山田：96 年ぐらいだと思うんですが、第二次民主党ブームが起こったときに、社会党がそ

もそも丸ごと民主党のほうに行こうとしたら、当時の民主党の中樞がそれを蹴って、個人で来いということで、社民党の中で実質は割れるわけですね。民主党にいく部分、新社会党をつくる部分、それから残る部分。先生は多分残られたんでしょうけれども。

淵上：残りましたね。

山田：どういう理由で残られたんですか。

淵上：新社会は与党になるかならないかで、そして自衛隊を村山総理が認めていくやないですか。それに反発して分裂するわけです。ですからあのときに少数だからこのところはということ、思うけれども、このところがやっぱり社会党が国民から批判を受けた最も一番大きいところですね。ここがあるから、社会党支持率が落ちていくんですけども、このところを批判して、やっぱり新社会ができていく。だけれども、そういう新社会の人たちとの付き合いも多かったから何とかとどまってくれと言っても、それは駄目だったです。認める限りは駄目だと。だけれども、オープンにしているもんですから。国会答弁したわけですから、どうやって守るか。大分というあれもあったし、議連の仕事もしていたんで、やっぱりこのところは守らないかなという気で。新社会党とあのときに民主党は分かれるんです。だから、私は残っていこうと。ただ、九州はそのときにほとんど残ったのかな。

山田：社民にですね。

淵上：ええ。何人か出ていきましたが。

山田：じゃあ、迷ったりはされませんでしたか？

淵上：あんまり迷わなかったです。

山田：結局、私鉄からすると民主に入ると。先生は入らんと。それで、大げんかというか。やっぱりちょうどこの時期のことですか。

淵上：そうですね。

山田：このときに、結局その後、選挙のときは見ておけというふうに川崎委員長が言ったとおっしゃって、その後は影響はありましたか？

淵上：私鉄総連からも民主に行けと言われてたんですよ。だけれども、私は行きませんと。だから、「私鉄が民主に行きたいなら行けばいいじゃないですか。民主の候補を立てりゃいいじゃないですか」と。「淵上君はどうするか」と言うので、淵上君は社民党、社民党と相談してどうするかは決めると。だけれども、党まで替わって出るという意味は毛頭ありませんと。だから、私鉄は私鉄独自の候補を立てたらどうだというのはけんかの材料だった。川崎は川崎でまた同じようなことを言うんですよ。

山田：前は、社会党の党員としての意識はあまりないまま国会議員になったというような話をされていたかと思うんですが、今の話を伺うと、国会議員をしている間に社民党に対する愛着といいまじょうか、あるいは責任感といいまじょうか、そういうのが増してきた？

淵上：やっぱり労働運動をして分裂の経験をする、人間の一番の醜さというのが出てくるわけですよ。同時に弱さも出てくるわけですよ。だから、弱さの部分というのはどうやって守るかということで、守れる部分と弱いがゆえに落ちざるを得ない人たちもいるんで、そういうところを守るためにはきちっとした所がないと守れないと思っていたんで。裏切られたりそういうのがいろいろありまして、結果的に俺はこれでいくと。最初に社民できて、そのまま。だから、私鉄がどう変わろうと、俺は関係ないという。古いなあとかわれようとも。

篠原：確認ですが、淵上先生はずっと労働組合運動の頃から私鉄総連の代表、組織の一員として、参議院でもそのように行動されていたのですけれども、私鉄総連が民主党支持に変わるときには、淵上先生は自分の意思で社民党に残るということをおっしゃっているわけ。失礼な言い方ですが、珍しく先生の個人の意思が見えた局面だと思います。なぜ先生はそのときに私鉄総連の方針ではなく、自分の方針に従ったのかを理解したいと思いません。

淵上：私は労働運動をやっている頃から執行委員を辞めて会社に帰ってこいと何回も誘われたんです。そういう経験があるんで、そんなに組合の役員が会社からちょっと言われたぐらいでうろろしちやいかんというのをずっと思っていて、それで、私鉄の中小組合運動を通してあんまりふらふらしちやいかんというのがだんだんじわっと固まってきたんです。

篠原：ご自身の中で。

淵上：はい。だから、例えば議員になりたいがゆえに党を替わるようなことはしたくないし、それだったらいっそ辞めたほうが良いという気持ちのほうが強いです。

篠原：民主党があまりお好きでなかったということはないですか。

淵上：私鉄の中にも民主党に行けと言う人もいたでしょうし、駄目だというグループも拮抗していたと思うんです。だから、執行部が民主党を選ぶかどうかは私じゃないと。あなたがたやと。というのは、日本の労働運動の中で政党の支配というのが出てくると、労働組合というのは分裂をしたり、いろんな経験をしているから、あんまり政党は労働運動を支配するべきじゃないなというのも一つは組合のときからありまして。だから、というのは一番最初、共産党支持の組合員から、それこそ一番末端の分会のときに追い掛け回られたりしたもんですから、それはそういう経験があって、それやったらあんまり変わらずちやんとしとこうと。

篠原：つまり、政党が労働組合を支配してはならない、それを尺度としたときに、民主党に行くよりは社民党のほうにいたほうが自分としてはポリシーに合うということでしょうか。

淵上：ええ。一番は総評の4・17闘争のときに共産党が中止命令を出すんですね。それでストライキが崩れていったのが若いときにあったんで、労働組合がやることについて共

産党はちょっとやり過ぎじゃないのというのを思ってから、政党が労働組合に対してそういう介入をするのはあっていいことかどうかというのはありました。

篠原：繰り返しで恐縮ですが、先生が選挙で当選することだけを考えれば、民主党に行ったほうが確率としては高くなりますよね。

淵上：あんまり考えなかったです。そんなに議員にいつまでもというのが。連綿としてしがみ付こうなんて思っていなかったんで。

篠原：ただ、20年近く議員をしていて、そして国会運営でも重要な仕事をやると、淵上先生の周りの方々は、今後も参議院議員であり続けてほしいと思う方々も構造化されてくると思うのですが、それでも関係なく。

淵上：淵上貞雄後援会は最初から作っていませんから、関係なかったです。福島みずほ君が私に言った。「あなたが辞めたから私鉄が向こうに行ったのよ」と。

私鉄の中にも社民党支持という人はいます。だから、それはあんまり。社民党は、今は苦勞していますが、私鉄もそれなりに政治運動をやれるわけで。組織内で政治運動を社民党の人が主にやっているの、仕事も政治活動もまじめに頑張ればいいのでは、なんとかなる。

篠原：次に、2010年に国会議員を引退するときの話をお尋ねしたいと思います。

淵上：一つは歳が歳だから。あの頃に暗黙で決めたのが党の70歳定年というのはあって、なし崩し的にはなっておりますけれども、自分の中ではここまでが限度というふうに決めて。

篠原：それは体力的とか健康ではないということでしょうか。

淵上：ええ。大体年齢が来たら、早く引退しないと、いつまでもいたら党人事もよどむという気持ちもあって。国会の仕事は簡単なものじゃないから、ハードな仕事ですから。年齢、身体的、体力等を考慮して、そこのところは自分でそろそろ考えないかなと。

篠原：先生が次の選挙には出馬しないということをお私鉄総連に伝えたという形ですか。

淵上：そうですね。自分で出ないと決めて、この次は出ませんと。

篠原：私鉄総連側はどのような反応だったのでしょうか。

淵上：そうですかみたいな感じやったです。

篠原：慰留はあまりないんですか。

淵上：もう一回出るとか、そういう話はなかったです。扱いにくかったでしょうね。政党のことやらあって。

山田：社民党からすると大きいですよね。有力議員が減るわけですから。

淵上：そうですね。

山田：私鉄総連が社民党を応援してくれる保証もないわけですよね。

淵上：それはあったでしょうね。

山田：社民党の側から慰留みたいなのは？

渕上：なかったです。

山田：党の70歳定年というがあったからですか。

渕上：そうだったと思います。そう明確には、党の場合はそんな明確なことではなかったですけれども、だんだん崩壊的にはなっていましたから、やれる人があったらやったらいいじゃないかというような感じ。

篠原：福岡県の議員からの反応というのはどうだったのでしょうか。

渕上：当時引退すると言って、特段慰留があったりしたのはなかった。なかったですね。だから、長い間、ご苦労様でしたと。

篠原：先生のご家族も了承するという形でしょうか。

渕上：あんまり家族はいろんなことは言わなかったです。そもそも選挙に出るときに、出会い頭の交通事故ぐらいにしか思っていないんだから、辞めると言ったらご苦労さんぐらいな話で。うちの家内は私が言われて辞めるぐらいなら最初から出らん方がいいというようなタイプですから。その程度なら政治家になる必要はないという。だから、かなり他の人からなぜあなたは止めなかったと言われてるんじゃないですか。そのときにそんなことを言っていましたから、だから、「辞める？ ご苦労さん」ぐらいやったです。

篠原：次に先生が引退してからの話ですが、今、先生は私鉄総連に所属しておられるのですか。

渕上：今は私鉄総連で引退をした人たちでつくっている組織があるんです。私鉄高退協という、高齢者と退職者の協議会が現役を含めてあるんです。そこで顧問をなさいと言って、顧問をしていて、もう辞めてよかろうと言ったら、今度は逆に死ぬまで顧問をしると永久顧問に。

篠原：私鉄総連には、大きな意味では所属しているということですか。

渕上：だから、高退協の顧問として。

山田：先生が西鉄を退職たから、私鉄総連も抜けて、代わりにということですよ。

渕上：ええ。それで、西鉄は辞めさせてくれと言って辞めました。私鉄は辞めさせんで、永久顧問に。

篠原：政党については、現在も社民党に所属しているということでしょうか。

渕上：そうです。

篠原：これはずっと一貫して。

渕上：それは一貫している。

篠原：今は社民党の福岡県連の役職でしょうか。

渕上：顧問です。

篠原：その他に政治団体に顧問等で所属していることはありますか。

渕上：ないです。もうできるだけ引退したらそういうものは持ってきてもしないように。

福留：参議院を辞められると同時に社民党県連の。

淵上：代表。

福留：代表に就かれますよね。

淵上：はい。

福留：だから、政治活動から引退されたということではないですよ。

淵上：ないですね。政治ではある。

福留：代表の職が去年までですか。

福留：2018年まで。

淵上：それから顧問。

福留：野上隆三さんという方はどういう方なんですか。淵上さんの後の代表の方。

淵上：北九州で市議員をされて、中小企業診断士。

— 生い立ちと中国での生活、引き揚げについて —

山田：最初に立ち返って、お生まれが1937年(昭和12年)3月に福岡県田川郡、4人兄弟の長男として生まれたということですがけれども、前回伺ったお話だと、お父さま、お母さまのそれぞれの出身はうきはだったと思いますけれども、どういうふうなご家庭だったのでしょうか。お父さんのお名前は？

淵上：淵上定(さだみ)。おふくろはシノブ。カタカナやったかな。

篠原：田川郡でお生まれになったわけですか。

淵上：はい。

篠原：お仕事は何をされていたご家庭なののでしょうか。

淵上：結婚した頃何をしとったか。聞いたことないから。

篠原：やはり炭鉱関係の職業でしょうか。

淵上：恐らくおやじたちがおった所が炭鉱の三菱系。だから、田川の炭鉱じゃなかったんでしょうかね。炭鉱で働いたやろうか。よく分かりませんね。私、おふくろさんとおやじさん、どこでどうやってどうしたのかというようなことは聞いたことないけん。おやじたちも言わなかった。

山田：お父さまがお生まれになられたのはいつですか。

淵上：明治43年。

山田：明治43年。お母さまは？

淵上：大正3年。

篠原：そして、先生は5歳の頃に中国へ。

淵上：私が生まれて何日か目には関門海峡を渡ったとか何とか言っていましたので、恐らく生まれるとすぐに中国に。満鉄の龍鳳炭鉱という所。

篠原：確認ですが、先生が中国に行かれたのは何歳の頃ですか。

淵上：生まれてからすぐですよ。

山田：先生が物心がつかれたときにはお父さまは中国のほうの炭鉱で。

渚上：働いていた。

山田：どういのお仕事ですか。

渚上：炭鉱だったと思います。

山田：炭鉱でもいろいろありますよね？

渚上：ありますね。どんな仕事をしていたのか知りませんが、当時、炭鉱で中国の方々を使っていた。

福留：その監督みたいな、事務屋の仕事ですか。

渚上：事務屋だったか、それもちょっと定かではないんですが。

福留：自分で働く方じゃないんですね？

渚上：恐らくそういう、だから、中国の方々を10人近く使っていたんじゃないでしょうか。そんな話を聞いていましたので。

福留：経営ですか。

渚上：いえいえ、下のほうの。

福留：その会社の中で監督みたいな仕事を？

渚上：みたいなことをしていたんでしょうかね。家の中に中国人を入れる所と入れない所があったですよ。おやじたちはうちの中に入れてとったですもんね。終戦、敗戦になって、名前だけしか僕は覚えていない。マーさんという人がうちに来ていました。敗戦になったら食料をはじめとして何もないじゃないですか。そのときにその人が差し入れてくれて。だから、豚を飼ったり、いろんなことをしました。そして、夜襲があり、強盗が入って来るわけですね。そのときはちゃんとその人が来て守ってくれていました。だから、あんまり手荒な使い方はしていなかったんじゃないでしょうか。

引き揚げて帰ってくる時はその人に全部財産なんかをやって。その人が言っていましたもん。男の子ばかり4人兄弟ですが、当時3人おりましたんで、けんかしたら誰が残るかと言うとすぐにけんかやめていた。そのときにマーさんが言っていたのは、日本に帰ってもまた中国と国交を回復するから、交流ができるやないかと。それまで預かっておくから1人残れと言うとですもん。だから、誰が残るかと言ったら、けんかがぱたっと終わりよる。そういう人がいたんですよ。だから、強盗に入られるとか、帰ってくるまでに中国の人たちだとか、近くにも朝鮮の方々もいたけれども、守ってくれていました。だから、満鉄が龍鳳炭鉱というのを持っていて、龍鳳会というのがあって、会報が時々来ていたんで。

山田：「りゅうほう」という字は「龍」ですよ。「ほう」は伝説の鳥の鳳凰の「鳳」ですか。

渚上：龍鳳、難しい字でした。龍鳳炭鉱。

山田：撫順炭鉱の中にあった。

渚上：撫順。恐らく龍鳳炭鉱は全国的な組織があったけれども、おやじたちは会には行って

いなかったもんな。

山田：それは引き揚げてきた後に、元龍鳳炭鉱で働いていた人たちのそういう会があって、その会報誌が来ていたわけですね。

淵上：会があって、会報なんか来ていました。今はもう来ませんけれども。

山田：中国にいらっしやったときの思い出は、特に印象深いエピソードとかはありますか？

淵上：唯一戦争を経験したのが国府軍と毛沢東、蒋介石軍と毛沢東の軍のちょうど内乱の真ん中に挟まって、双方の山から撃ち合いがある経験はしました。

山田：当時、いわゆる「満洲」地区は内戦の戦場になって、引き揚げ自体が少し遅くなりますよね。45年では引き揚げができませんでしたよね。

淵上：その頃、日本の兵隊がうちにちょっとおったことがあったです。

山田：それは戦争が終わってからですか。

淵上：終わってからです。だから、おまえの所はピストルがあろうと言うて、襲撃がありました。

山田：その襲撃というのは中国の方が来たんですか。

淵上：それは分かりません。中国か韓国、朝鮮の方なのか分からないけれども。

山田：じゃあ、マーさんという方がいらっしやったから。

淵上：守られとったです。

山田：ということですね。

淵上：毎日じゃなかったけれども、来てくれていていました。話は別ですが、敗戦後、北満のほうに開拓団で行っていた方々、この方たちが飢えで死んだのか寒さで死んだのかは、夏もありましたから、多くの方が亡くなって、最初は木の棺がちゃんとありましたが、月日が経つと、木の棺がなくなって、その次は布団だけになって、布団がなくなって、その次は毛布だけになって、毛布がなくなってきたら白い敷布で、後は全部野焼きやったです。帰るとき、私どもの引き揚げのちょっと前に長野の方といわれた青年の方が2～3人がわが家に寄って帰る。それから、うきはの人がわが家に寄って、風呂に入ってもらって、ご飯を食べて帰る。そんなことは中国でしていたです。

山田：ということは、収容所ではなく、引き揚げのときまでご自宅にいらっしやった？

淵上：引き揚げるまで自宅でした。私の家の近くが電車の終点でしたので、収容所があるとかというのはなかったように思いますけれども。

山田：内戦で、例えばソ連軍だとか、共産党だとか、国府軍からの指示があって、収容所に入ったとかいう記憶は？

淵上：収容所に入れと言うようなことはありませんでした。あつたと思います。ソ連軍に捕まった兵隊さんが逃げてきてわが家にきていましたから。

福留：割と大きな家だったんですか。

淵上：いや、そんなことはなかったですよ。2階建ての社宅です。

山田：戦争が終わっても他の日本人が。

淵上：なぜわが家にはわかりませんが、混乱していた時ですから、お互い様ではなかったでしょう。3人ぐらい泊めたりしていましたから。

山田：戦争が終わってから周りにもいわゆるお父さまと同じように日本から働きに来てい
る人たちがいたわけですね。

淵上：ええ。

山田：戦争が終わった後に年を越しますよね。その後も家にいらっしゃった？

淵上：そうですね。ずっと家におって、それから社宅を何回か替わらされたですね。

山田：具体的にいつ引き揚げたとかいうのは覚えていらっしゃいますか。

淵上：22年佐世保に上がって、佐世保でしばらくいて、それからうきはに帰ってきたんで
す。

山田：22年ですか。

淵上：22年だったと思います。

山田：22年だとかなりたっていますね。

淵上：そうですね。

山田：早いのが21年。

淵上：早い人たちはだいぶん見送ったですもんね。

山田：それは、遅かったのはお父さまの仕事の関係？

淵上：そんなのもあったかもしれんです。

山田：お父さん自身が留用とかで国府軍だとか中共軍の仕事をさせられるとかという記憶
はないんです？

淵上：いえ。敗戦になって以降、そんな仕事に就かずに。ひょっとしたら就いたかもしれ
ませんが、そのマーさんというのが人間は働かないと駄目になると。だから、たばこ
紙とを買ってきて、たばこを巻かせるわけですよ。そして、たばこを作らせるわけ
です。そして、味とか何かは関係なかったです。巻きがいのと悪いのを区別して値段を付
けて。そして、おやじが巻いて作ったタバコを私が売りに行っていました。売りに行くと、
大体たばこですから完売していました。完売して、家に帰ろうと思ったら中国の子ども
たちが私を襲撃する。売上金を取られるわけ。だけれども、昔だと立ち向かっていってけん
かをしていましたが、負けているからそういうわけにいかんじゃないですか。急いで逃げ
て帰らにゃいかんわけです。何回も襲われたです。中国の子どもたちが5~6人伏せとっ
て、そして売上金の収奪に来るわけ。だから、そういう仕事もしました。それから、あめ
売りをして。あめ売りやらは7個1円ぐらいで売った、売って、大体終わった頃にちゃ
んとどこからか見ているんです。襲撃に来て、金を奪うという。

福留：そのときの買い手は中国人ですか。

淵上：中国人だったり、日本人だったりです。

福留：貨幣は円ですか。

淵上：貨幣はロシアの金やったです。

福留：ロシアの貨幣？

淵上：ロシアのお金。赤い本当に原色の変な、今なら偽札がどンドンできるような印刷。あれは今の広告よりもまだ悪かったです。一時期は日本円がまだ通用していましたけれども、あとはロシアの金。ロシアが入ってきて。

山田：日本語で売っていた？ それとも中国語ですか。

淵上：日本語だったです。大体たばこだったから幾ら、買うのはほとんど日本人が多かった。

篠原：引き揚げの際の話ですが、葫蘆島からアメリカの貨物船に乗ることができたとのことですが、これは正しいですか。

淵上：それは正しいと思います。葫蘆島ともう一つ、青島かな。ほとんどの引き揚げ者は葫蘆島だったと思います。

山田：葫蘆島ですね。撫順から瀋陽、当時でいえば奉天を経由して葫蘆島まで移動されたんでしょうけれども、住んでいらっしゃる社宅から。

淵上：それぞれおやじはおやじ、おふくろはおふくろ、子どもは子どもがリュックサックを背負って、そして、無蓋車ですね。あれに乗って、だーっと。途中、だから、まだ日本人が残っていました。日の丸の旗を振ってくれたです。だから、私は特別、国旗に対していろいろあるけれども、その経験があるんで、君が代より国旗のほうが抵抗はないです。やっぱりあのとき、あの沿道で旗を振ってくれた、そのときに、無蓋車ですからいつ夜襲に遭うか分からない。食料を積んでいても取られたらもうないわけですから。そんなときに沿道でこう。だから、必ずしも国旗をみんなのようにきちっとというわけにはいかんです。どうもそれがすぐに浮かんでくるんですよね。あのときの日本人の気持ちみたいなのがありますね。

山田：中国にいる間、小学校は行っていらっしゃらないですね？

淵上：小学校は1年生から3年生までずっと行きましたよ。

山田：3年生まで行かれました？

淵上：はい。3年生で終わり。

山田：戦争が終わってからも小学校には通えていたということですか。

淵上：学校はありましたが、授業はなかったです。

山田：学校はあったけれども、小学生なんだけれども、学校で授業はなく、やられるとすれば、物を売るとか。

淵上：だから、そういうのが、遊びと魚捕りとそれが仕事やったです。

山田：学校の授業というのは。

淵上：終戦になってからはなかったような気がします。

山田：戦争が終わる前まではあって。

渚上：ありましたけれども。

山田：その後はあってもないようなものと。

渚上：ない。だから、みんな遊んで回りましたよ。

山田：今のお話を伺うと、マーさんがいらっしやったということもあるんでしょうけれども、ご家族は無事に。

渚上：だから、珍しく親子ともども帰ってこられた。

山田：佐世保を経由して、ご出身のうきはのほうに戻られて、御幸小学校ですか。

渚上：そうです。

山田：卒業されたということですね。

渚上：だから、負けてからは授業はなかったです。内乱に巻き込まれたりしていたから。昼間は、ちょうど谷みたいなこんな感じになっていて、こちらとこちらから攻め合うから。そこを行ったり来たりするわけですから。だから、夜中に攻合いなんかになってきたときはやっぱり音だけでも怖かったですよ。

山田：周りで巻き込まれて亡くなられたり、けがをされたりという日本人の方はいらっしやった？

渚上：けが人はいました。女性が取られたり、いろいろなことがありました。

山田：ご家族無事でというのは、本当に幸いだった。

渚上：そうですね。

山田：引き揚げの経験を持つ方の中には、現地の人に対して良くない感情を抱く方もいらっしやいますが、そういう気持ちは？

渚上：ないです。中国の人は、それこそマーさんは最後まで変わりなく守ってくれましたので。だから、私の家に寄って、先に帰った人がおふくろの里に「あそこはまだちゃんとしとりますよ。飯も食っとりますよ」という報告をしてくれていたの、安心はしたと言っていました。だから、その先生は同じうきはに帰って。先生というか、終わってから、引き揚げてきてから小学校で用務員をされていた方です。その人がわが家に寄って、わが家の状況を見て、帰って報告をしてくれていたから、その点はよかったです。

篠原：日本に帰ってきてから、お父様はどのような職業に就かれたのでしょうか。

渚上：おやじは田舎ですから仕事がまずないですから、行商を。おふくろも行商をしていました。しばらく行商をしていて、おふくろの里が土建業だったので、そこで働くようになる。それから、おふくろは、これも行商をしたり小さな個人経営の竹細工を作っていた所で働いたり。そうこうしているうちに学校給食が始まったので、そこの調理人でおふくろが働くようになって、それから少し生活が安定していくんです。余談ですが、おふくろは中国にいたときに子どもを亡くすんですよ。

山田：本当はもう一人いらっしやった？

渚上：5人。それで、中国で亡くなる。これも野焼きしてきましたけれども。人が大勢亡く

なったときに集まったから喜んどったら怒られて。けれども、結局、注射した痕から化膿して、それで亡くなったです。

山田：一番下のご兄弟？

淵上：今おる4人目は日本に帰ってきて生まれた。

篠原：行商されていたということですからけれども、何を売っておられたんですか。

淵上：おやじはボタン。これをどこからか仕入れてきて、これを小売店に売っていました。

仲卸しみたいな仕事だったんでしょうね。

篠原：ボタンは、昔は貝でしたよね。

淵上：ええ。重たかったですよ。だから、私たちも新聞配達をしました。

篠原：先生は長男でありますよね。やはりご両親からの期待が。

淵上：やっぱり家の中が分かるじゃないですか。だから、そんなことはしたです。

山田：ご両親がうきは出身だとしても、戻っていらっしやっても土地はない？

淵上：土地はない。

山田：家も借りるか何かで住まわれて。

淵上：そこは田舎でして、おふくろのおばあちゃんのきょうだい警察官。だから、警察官舎があって志賀島で警察をしていたんで、その家が空いていたから、そこに入った。

山田：そこに入らせてもらった。

淵上：おやじが最も固執したのはやっぱり土地と墓と家でした。

山田：墓は？

淵上：もうおやじの家はなかったです。墓だけはありましたけれども。

山田：お父さまは長男ではないんですよね。

淵上：長男じゃない。三男坊。5人のうちの三男坊。

山田：恐らく成人になられて、故郷を出られて、田川のほうに行かれてということだと思うんですが。

淵上：田川におやじの家はなかった。

山田：もともとはうきはで、出られて。でも、そこも家がなくて、「満洲」に渡られたけれども、結局、戦争で引き揚げられてということで。

淵上：うきはに帰ってきた。おふくろが墓だけは買ったです。

山田：建てられたわけですね。

淵上：建てたです。だから、今おやじとおふくろが入っている。

山田：お墓を買われたのはお父さまが亡くなる。

淵上：亡くなってからだね。

山田：いつ亡くなられたんですか。

淵上：平成17年。

山田：2005年ですね。

淵上：その頃だったと思います。

福留：じゃあ、お父さんがお元気なうちに参議院議員になっていらしたわけですね。

淵上：ええ。

福留：参議院議員になったのは喜ばれたでしょう。

淵上：なってからすぐ脳梗塞になって。「名前は何？」と言ったら「淵上貞雄」と言っていました。

—大坪康雄氏について—

福留：時間もたちましたが、これまで聞いていないことがあると思うんですよ。社会主義協会の幹部の大坪康雄さんからオルグを受けられたということがありますよね？ それがいよいよ淵上さんの民主党に行かなかったり、社会党に残ったり、そういう大きな要因になっているんじゃないですか。

淵上：やっぱりなりましたね。

福留：そのことをやっぱり聞いておいたほうがいいと思うんですよ。いつぐらいから社会主義協会との接触が生まれたんですか。

淵上：結局、社会主義協会というより、先ほど言われた社問研。

福留：社問研の大坪さん？

淵上：中での学習会で会っていたようです。

福留：それは淵上さんがどの辺の？

淵上：そのときに同じ西鉄の中で働いていた人たちは先に大坪さんとの接触があったようです。書店に行ったら共産党が出しよる『学習の友』というのがある、それを買って私は読んでいて、そうしたら4・17で変わるじゃないですか。俺は、この本は間違うとったなと思って、そんな話をその仲間にしたときに、「そらいかん。そっちに行く前にこっちに来て」と。だけれども、私は『学習の友』が共産党の本とかは知らずに、よく見ればどこかに書いてあったんでしょうけれども、そんなことは知らずに組合運動をしようから、そのぐらいは読むかといって読んでいた。そのときに誘われて、大坪さんの紹介があった。

福留：それは淵上さんが組合のどの辺におられるところですか。

淵上：まだ分会。

福留：分会といいますと、柳川かどこか？

淵上：いえ、福岡西鉄博多営業所の。分会の役員をしている頃です。

福留：何歳ぐらいになりますか。

淵上：24～25歳になっていましたね。

福留：執行委員になられたのが1964年、昭和39年。

淵上：もっと前です。それは林さんの選挙のときです。

福留：これは林さんの選挙。大体この時期に大坪さんなんかの勉強会に行かれたという。

淵上：そうですね。その頃、大坪さんと具体的に変わったのは若松君という地区労オルグしていた人が私を紹介。それだとか、長田、同じ同期生がいて、紹介してくれたです。話半分で、終わったらすぐに酒飲み大会をしていました。

福留：大坪さんはそういう社会主義協会の幹部ですよ。

淵上：ええ。当時は協会のことは知りませんでした。

福留：伝説のオルグで。私も結構、何遍も会ったんですが、この人は大体どういう人だろうというのが(笑)。社会問題研究所というのがあったんですよ。そこで時々会うんですよ。社会主義協会が割れた後で、奥田先生たちの拠点が社会問題研究所で。こちらは経済学者が少なかったんですよ。だから、私は割といろいろ書かせてもらったりしていたんですが、それで原稿を持って社会問題研究所とかへ行くと、どうも正規の職員なのか、どうか分からないような人が時々いるんですよ。社会問題研究所の所長が小林先生、次いで奥田先生になるんですが、八丁さんがいわば専従の研究員で。だから、八丁さんという方はずっといるんですが、時々、大坪さんというのが八丁さんよりちょっと。

淵上：年上ですね。

福留：年上で、ちょっと偉そうな感じの雰囲気の人で。だから、その人の影響が結構あると。

山田：大坪さんの社会問題研究所の中での立場は先生もよく分からないまま？

福留：今、分かっているのは、社会問題研究所の客分みたいなことで、正式には社会主義協会のオルグですよ。

淵上：オルグでしょうね。

福留：東京辺りにずっといて、全国をオルグしていたんです。八丁さんも大坪さんもそうですが、終戦後、間もなくの頃の学生で、もともとは共産党に入っているんです。共産党から離れた後、奥田先生の所に出入りして。そういうことで、社会主義協会の分裂についても八丁さんとか大坪さんというのはかなり大きな役割をしたんじゃないかなと思うんですけれども。だから、向坂先生のほうは理論集団としてという位置付けなんですよ。ところが、大坪さんなんかはどんどん理論集団からはみ出してオルグしていく。実践活動をするわけです。奥田先生もどちらかというところがあるんですけど。そのところが向坂先生と肌合いがだんだん違ってくるんじゃないかと思うんですよ。だから、それは淵上さんにも思想的な影響はかなり大きいと思うんです。だから、民主党に行かないとかという判断もそういう経験が響いているんじゃないかなと思うんです。

篠原：そういう認識はおありになられるんですか。

淵上：職場で分からなかったり、迷ったり、困った時にこんな活動をしたがどうだろうかとか相談をしていましたので、そんな相談をしに行ったですもんね。そして、そのときに間違っていると一回も言われたことがない(笑)。こうしたらどうかというふうに言われる。だから、そのときに一番弱いところを大事にしておけというようなことをよく言われて

いましたもんね。そんなことで自分の考えや行動の中にも影響があったのかも知れません。人との出会いで。

篠原：それがその後、数十年たっても。

淵上：だんだんそういうような感じになってきましたね。だけれども、やっぱりそれだけ思っていた。だから、議員になっても大きい組合と小さい組合があったら、小さい組合を先に優先していました。大手の組合は自力で出来ますから。大体そんな感じで党活動は、というか議員活動をしようということでしたので。

(第4回聞き取り 終)